和歌山市文化体育振興事業団調査報告書　第23集

高井遺跡 第２次発掘調査概報

２０００

財団法人　和歌山市文化体育振興事業団

序　文

遺跡の立地する和歌山市は、和歌山県の北部に位置し、奈良県の大台ヶ原に源を発する紀ノ川によって運ばれた土砂により形成された和歌山平野を中心とした地域であります。高井遺跡は和歌山市域の北東部、紀ノ川右岸に位置し、周辺には古墳時代の大規模な倉庫群が確認された鳴滝遺跡、白鳳時代創建の上野廃寺跡、紀伊国府跡と推定される府中遺跡など著名な遺跡が集中しており、当地域は和歌山市の歴史を考える上で大変重要な地域であるといえます。

今回の調査の結果、遺跡の南西部で古墳時代の竪穴住居、平安時代の掘立柱建物、鎌倉時代の土葬墓などの重要な遺構が検出され、高井遺跡の性格の一端を明らかにすることができました。

調査は当財団が平成11年８月から10月までの期間で行い、ここに概要報告書をまとめたものです。本書が広く私たちの郷土に関する歴史知識を豊かにすることを願ってやみません。

本書出版に際して、発掘調査に御協力をいただいた関係機関等及び地元の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成12年３月31日

財団法人　和歌山市文化体育振興事業団

理事長　伊　藤　　明

例　言

1．本書は、和歌山市が和歌山市直川字高井垣内1234番地の1他に計画した市立直川小学校プール建設工事に伴う発掘調査の概要報告書である。

2．調査は、和歌山市の委託事業として財団法人和歌山市文化体育振興事業団が受託し、対象面積約600㎡を1999年8月5日から同年10月30日までの期間で実施した。

3．発掘調査及び報告書刊行に係わる事務局は下記のとおりである。

和歌山市教育委員会		財団法人和歌山市文化体育振興事業団	
教育長	山口喜一郎	理事長	伊藤　明
文化振興課長	久保隆司	事務局長	藤田光彦
文化財班長	小原保誠	総務課長	川嵜健治
学芸員	益田雅司	主　事	西山佳宏（調査庶務担当）
		学芸員	北野隆亮（発掘調査担当）
		学芸員	井馬好英（　〃　）
		学芸員	川口修実（　〃　）

4．遺跡・遺構及び本概報掲載の遺物写真撮影は井馬と川口が分担して行った。

5．本書の執筆は発掘調査担当の北野、井馬、川口のほか同財団学芸員高橋方紀が分担し、編集は北野が行った。なお、「３．高井遺跡の既往の調査（１）第１次調査の概要」については和歌山市教育委員会益田雅司が執筆した。各執筆分担の文責は目次に示した。

6．写真図版の遺物に付した数字番号は実測図番号に対応する。

7．概要報告書の作成にあたり、関係機関等の方々に有益な御教示・御指導を賜ったことに感謝の意を表します。

本文目次

1．調査の契機と経過……（北野隆亮）……1

2．位置と環境……（川口修実）……2

3．高井遺跡の既往の調査

（1）第1次調査の概要……（益田雅司）……4

（2）第1次調査出土の遺物……（川口）……5

（3）直川1235－1番地出土の遺物……（〃）……5

4．調査の方法と経過

（1）調査の方法……（北野）……6

（2）調査の概要……（〃）……7

5．遺構

（1）古墳時代の遺構……（井馬好英）……11

（2）平安・鎌倉時代の遺構……（川口）……13

6．遺物

（1）土器……（川口）……19

（2）緑釉・灰釉陶器、輸入陶磁器……（〃）……26

（3）瓦……（〃）……27

（4）竈……（〃）……27

（5）土錘……（〃）……28

（6）石器……（高橋方紀）……28

（7）石製品……（〃）……29

（8）金属製品……（北野）……29

7．まとめ

（1）高井遺跡検出の竪穴住居について……（井馬）……30

（2）平安・鎌倉時代の高井遺跡……（北野）……31

報告書抄録

図版目次

図版１　調査地遠景（南から）、調査前の状況（南東から）
図版２　調査地近景（北から）、調査地近景（南から）
図版３　全景（上が北）、第１区全景（上が北）
図版４　第３区全景（北から）、第４区全景（北から）
図版５　第４区全景（南から）、第５区全景（西から）
図版６　第１区P-72（下が北）、第３区SB-1（上が北）
図版７　第３区SB-1（西から）、第３区SB-1土層堆積状況（北東から）
図版８　第３区SB-1遺物出土状況（北から）、第３区SB-1遺物出土状況（南東から）
図版９　第４区SB-2（上が北）、第４区SB-2（東から）
図版10　第４区SB-2土層堆積状況（東から）、第４区SB-2遺物出土状況（南から）
図版11　第１区SH-1（右が北）、第１区SH-1（北から）
図版12　第１区SH-4（南から）、第３区SH-5（西から）
図版13　第１区P-53（西から）、第４区SK-10（東から）
図版14　第４区SK-10（北から）、第４区SK-10遺物出土状況（北から）
図版15　第５区SX-1・SK-15（上が北）、第５区SX-1・SK-15（西から）
図版16　第５区SX-1（南から）、第５区SK-15（南から）
図版17　第１区北壁土層堆積状況（南から）、第２区南壁土層堆積状況（北から）
図版18　第３区東壁土層堆積状況（西から）、第３区東壁土層堆積状況（西から）
図版19　第４区西壁土層堆積状況（東から）、第５区南壁土層堆積状況（北から）
図版20　土師器、黒色土器、緑釉陶器、瓦器、須恵器、
図版21　SB-1出土土器
図版22　SB-2出土土器
図版23　土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、瓦質土器
図版24　緑釉陶器、灰釉陶器、白磁、青磁、瓦
図版25　竈、石器
図版26　石器、銭貨

1．調査の契機と経過

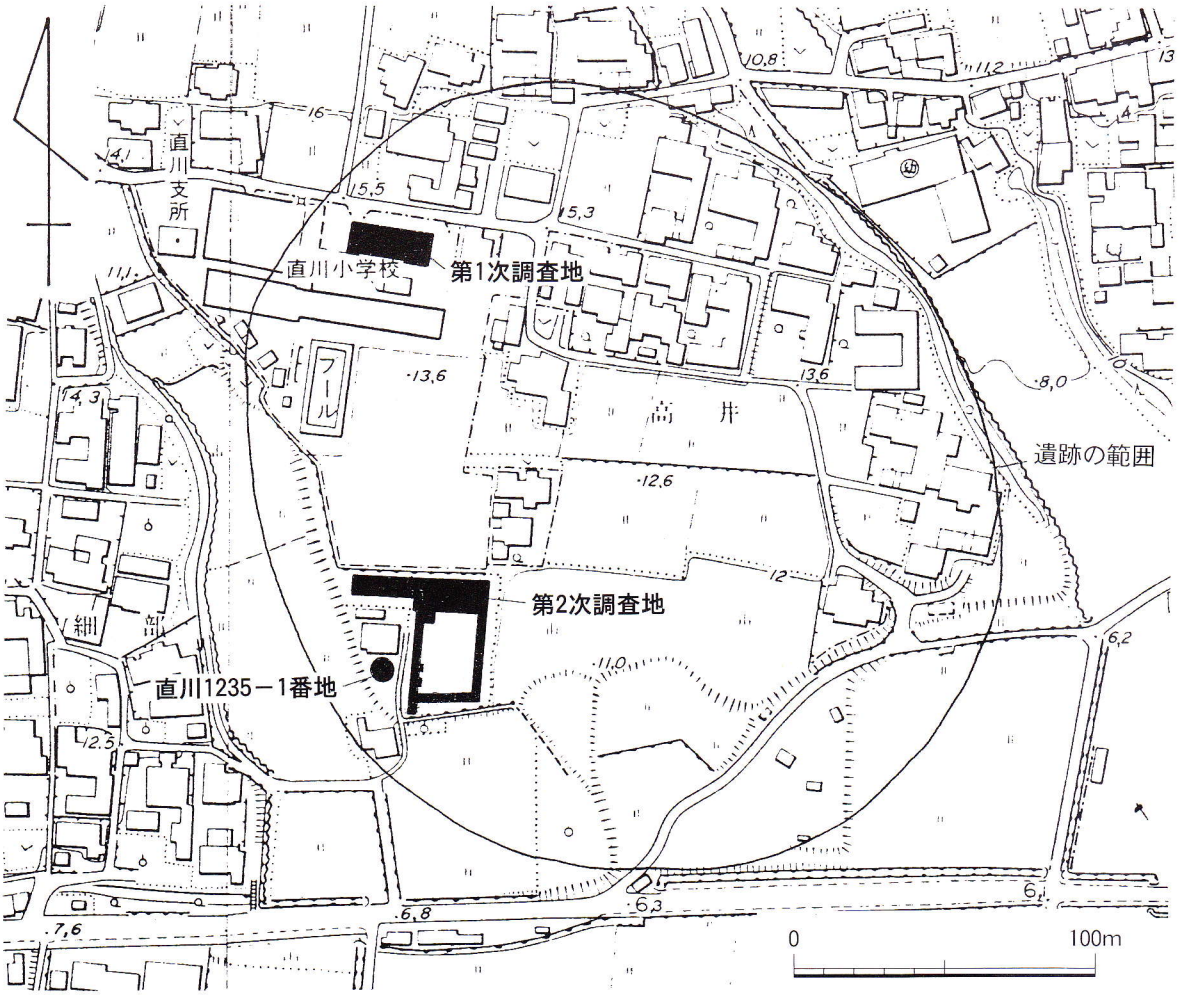
和歌山市が和歌山市直川字高井垣内1234番地の１他に所在する直川小学校南側隣接地に計画した小学校プール建設用地が『和歌山市埋蔵文化財包蔵地所在地図』に記載された高井遺跡（遺跡番号91）の範囲内に相当することから、和歌山市教育委員会が指導を行い、財団法人和歌山市文化体育振興事業団が委託を受けて発掘調査を実施することとなった。調査地は、標高約12mを測る河岸段丘上にあり、高井遺跡の南西部に位置するものである（第１図、図版１）。

周辺の調査例としては、調査地北側約100m地点で小学校校舎建設対象地において当財団が実施した対象面積250㎡の調査がある（第１次調査）。

第１次調査では、古墳時代とみられる土坑１基、平安時代頃と考えられる掘立柱建物を構成する可能性のあるピット群を46基検出し、須恵器、土師器、黒色土器など古墳時代以降の遺物が出土した。

また、直川1235－1番地の民家敷地から土地所有者により庭池の掘削時に須恵器や土師器などが掘り出されたことがある。

今回の調査は第２次調査にあたるもので、対象面積600㎡を1999年８月５日から同年10月30日までの約３ヶ月間の期間で実施した。



第１図　調査位置図

2．位置と環境（第2図）

和歌山市は、和歌山県の北西端に位置し、北は和泉山脈を境に大阪府泉南郡岬町・阪南市に、東は和歌山県那賀郡岩出町及び貴志川町に、南は海南市に接し、西は紀伊水道に面している。本市は、和泉山脈の南裾に沿って西流し、紀伊水道に流れ込む紀ノ川により形成された和歌山平野を中心に立地する。今回報告を行う高井遺跡は、紀ノ川の河口から約8㎞上流に位置し、和泉山脈の南麓、標高約12mの段丘上に立地する。

縄文時代の遺跡としては、高井遺跡（1）、直川遺跡（3）、六十谷遺跡（4）、川辺遺跡（23）が知られるが、南岸ほど良好な遺跡は確認されておらず、内容が明らかなものは少ない。唯一内容が明らかな川辺遺跡では、晩期の土器が多数出土している他、竪穴住居、土器棺墓等が検出されている。

弥生時代の遺跡として、田屋遺跡（15）、西田井遺跡（16）、北田井遺跡（17）、宇田森遺跡（18）が近接して存在している。これらの遺跡の出現と消長は一様ではないが、弥生時代中期以降に大きく展開し、古墳時代まで継続するもので、当地域の中心的な集落と考えられる。またこれら平野部の集落に対し高地性集落として橘谷Ⅰ・Ⅱ遺跡（13）があげられる。4本の空濠で囲まれた後期の集落であり、5棟の竪穴住居が確認されている。また近接地から銅鐸が出土しており注目される。

古墳時代の集落も弥生時代の集落域と重なり、特に平野部に展開するものが多い。その中で丘陵上に営まれた集落として府中Ⅳ遺跡（11）がある。弥生時代後期後葉から古墳時代前期に営まれた集落で、竪穴住居が7棟確認され、その中でSB−1は一辺8mを越す大型住居であり、古墳時代においては県下最大級の規模を有するものである。中期中頃からは造り付けの竈が付設され始め、田屋遺跡では韓式土器が共伴しており注目される。また鳴滝遺跡では7棟の大型掘立柱建物が検出され、畿内政権との関係を示唆する大規模な倉庫群として注目される。古墳の築造は南岸の岩橋千塚古墳群に見られるほど密ではないが、和泉山脈南端の丘陵には古墳群が築造されており、大谷古墳を含む晒山古墳群、鳴滝古墳群、六十谷古墳群（8）、北山古墳群（9）、直川八幡山古墳群（10）などが知られている。これらは古墳時代中期以降から本格的な造営を開始し、特に大谷古墳は馬冑をはじめとする豊富な副葬品から外来的な要素が強く窺え、またそれは楠見遺跡や大同寺遺跡（5）から出土した陶質土器からも知られる。これら陶質土器は、ともに大阪府野中古墳出土資料との対比から5世紀中葉頃に比定されており、この時期に紀ノ川北岸に外来的色彩の濃い遺跡が集中しているのは注目される。古墳時代後期には、畿内的な石室に岩橋型の要素をとりいれた園部丸山古墳（7）に代表され、和泉砂岩を使用した大規模な石室が構築されている。またこれら丘陵に立地するものの他、低地部においても古墳は造営されていたようであり、北田井遺跡では古墳と推定される周溝遺構が確認されている。

歴史時代以降、紀ノ川北岸地域では南海道に面する形で、直川廃寺跡（2）、上野廃寺跡（19）、山口廃寺跡（20）などの寺院が点々と建立された。ほぼ全容が明らかにされた上野廃寺跡は、東西両塔を備えた薬師寺式の伽藍配置をとり、西塔の西方に廻廊から突出する形で講堂が設置されている。山口廃寺跡・直川廃寺跡は伽藍配置は不明ながら、創建瓦と見られる複弁八葉蓮花文軒丸瓦が出土している。また集落遺跡では、南岸の鳴神遺跡群において奈良時代から平安時代にわたる遺物

が多数出土しており、その中には陶硯、国産施釉陶器、輸入陶磁器、土馬など特筆すべき遺物がある。北岸においては、当該期の遺跡の実態は不明瞭であるが、吉田遺跡（24）では奈良時代の掘立柱建物をはじめ、竪穴住居、火葬墓等が検出されており、竪穴住居からは墨書土器が出土している。府中Ⅳ遺跡からも、復元条里の方向に即した掘立柱建物が２棟検出されているなど、これらの遺跡の分布とその性格から、この時期以後、当地域周辺が南海道の整備に伴い、交通の要衝として重要な位置を占めていたことが知られる。

また高井遺跡の東1.5㎞に位置する府中遺跡（12）は、府中という地名が残り、紀伊国府跡と推定されている。過去の調査ではそれに関わる明確な遺構は確認されておらず、その規模や内容など実態は不明であるが、奈良・平安時代の遺物が出土しており、その中には菱形叩き目文を有する平瓦や陶硯が出土している。

鎌倉時代から室町時代においては西田井遺跡、吉田遺跡、川辺遺跡等が知られており、掘立柱建物、井戸、木棺墓、土坑墓等が検出されている。特に、川辺遺跡では掘立柱建物、井戸等の他、木棺墓がまとまって検出されており、一つの墓域と考えられている。

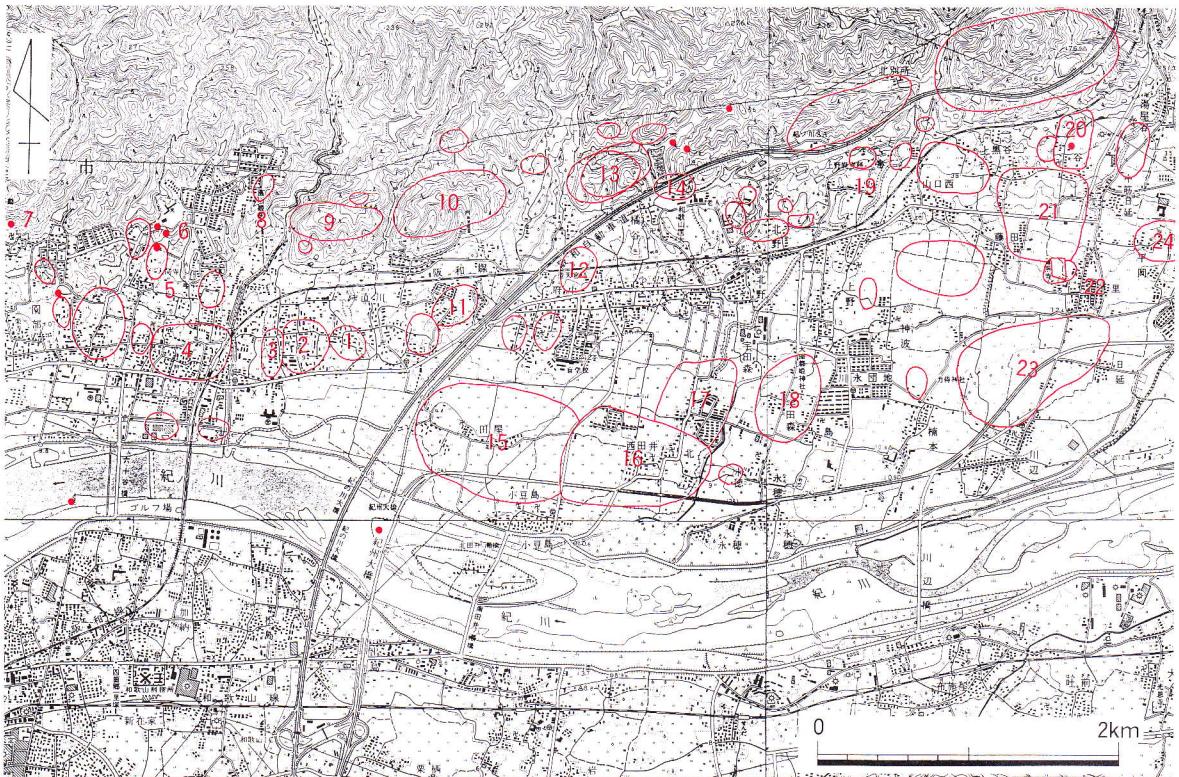
【参考文献】

北野耕平「初期須恵器の系譜-紀伊六十谷出土の土器とその年代-」『神戸商船大学紀要第一類文化論集』第17号　1969年

『吉田遺跡第２次調査概報』和歌山県教育委員会　1971年

『川辺遺跡発掘調査報告書』（財）和歌山県文化財センター　1995年

『府中Ⅳ遺跡第２次発掘調査概報』（財）和歌山市文化体育振興事業団　1996年



番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	高井遺跡	縄文	7	園部円山古墳	古墳	13	橘谷Ⅰ・Ⅱ遺跡	弥生	19	上野廃寺跡	白鳳
2	直川廃寺跡	奈良～平安	8	六十谷古墳群	古墳	14	弘西遺跡	弥生	20	山口廃寺跡	白鳳
3	直川遺跡	縄文	9	北山古墳群	古墳	15	田屋遺跡	弥生～古墳	21	山口遺跡	弥生～平安
4	六十谷遺跡	縄文～弥生	10	直川八幡山古墳群	古墳	16	西田井遺跡	弥生～中世	22	山口御殿跡	江戸
5	大同寺遺跡	古墳	11	府中Ⅳ遺跡	弥生～古墳	17	北田井遺跡	弥生～古墳	23	川辺遺跡	縄文～中世
6	大同寺墳墓	奈良	12	府中遺跡		18	宇田森遺跡	弥生	24	吉田遺跡	弥生～奈良

第２図　高井遺跡周辺の遺跡分布図

3．高井遺跡の既往の調査

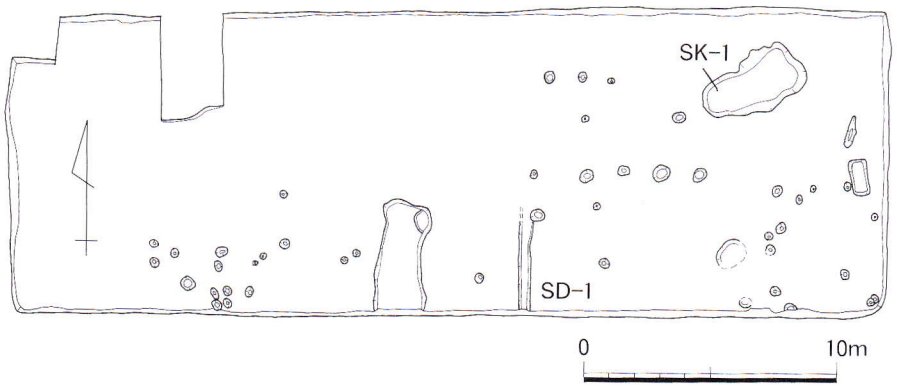
（1）第1次調査の概要

平成2年に、高井遺跡の範囲に入っている直川小学校で校舎の増改築工事が計画されたことから、当遺跡の実態を確認するための調査を建設工事に先立って行うこととなった（第3図）。調査面積は250㎡で、期間は8月6日から9月4日までであった。

調査に先立っておこなった試掘調査の結果、現在の地表面は旧耕作土の上に盛土をしたもので、旧耕作土のすぐ下に遺構面があると考えられたので、まず重機で盛土と旧耕作土を取り除いて遺構面を出し、その後は人力による遺構検出作業をおこなった。なお調査区の西端部分は旧校舎の基礎工事等で攪乱を受けており、遺構の確認は出来なかった。

遺構面では柱穴と思われる小さな円形のピットが46個検出された。その直径は20～60㎝、深さは5～20㎝と比較的浅いものが多かった。そのうちの中央部やや東よりのところで直径の大きいピットが東西方向に5個一列に並んで検出され、一部北側にも並ぶようにも思えるので掘立柱建物のあった可能性が高い。ほかのピット群についても軸線上に並ぶものもあるので何軒分かの掘立柱建物の存在が考えられる。調査区のほぼ中央で南北方向に延びると思われる幅約1ｍの溝（SD－1）を検出した。北側部分についてはすでに削平を受けて消失しており、南側についても残深が20㎝ほどで底部がわずかに残っている状況である。溝内の堆積土は暗灰色系の粘質土で土器片を少量出土している。北東端近くで4×2.5ｍを測る不定型の土坑（SK－1）を検出した。底部についても最深部で約47㎝を測るが、安定したものとはいえず用途は不明である。堆積土は暗灰黄色粘質土で、土師器片・須恵器片等を少量出土している。

今回の調査では、従来知られていた縄文時代の遺構・遺物は確認できずに、古墳時代以降の遺構・遺物が検出された。耕作地にする際にかなりの整地をおこなったようで、各遺構の上部がほとんど消失し、わずかに底部分を検出したにすぎなかった。また西側については後世の攪乱が著しく遺構等の検出ができなかった。逆に東側では包含層と考えられる暗灰茶色系の堆積層がわずかに残っていた。遺構としてはいくつかの掘立柱建物の存在を想定させるピット群が注目できる。時代としてはピット内から黒色土器等が出土しているので、平安時代以前に立てられていたものと考えられる。またSK－1とした土坑内から古墳時代のものと考えられる須恵器甕や土師器の把手部分が出土しているので、SK－1については古墳時代の可能性が高い。



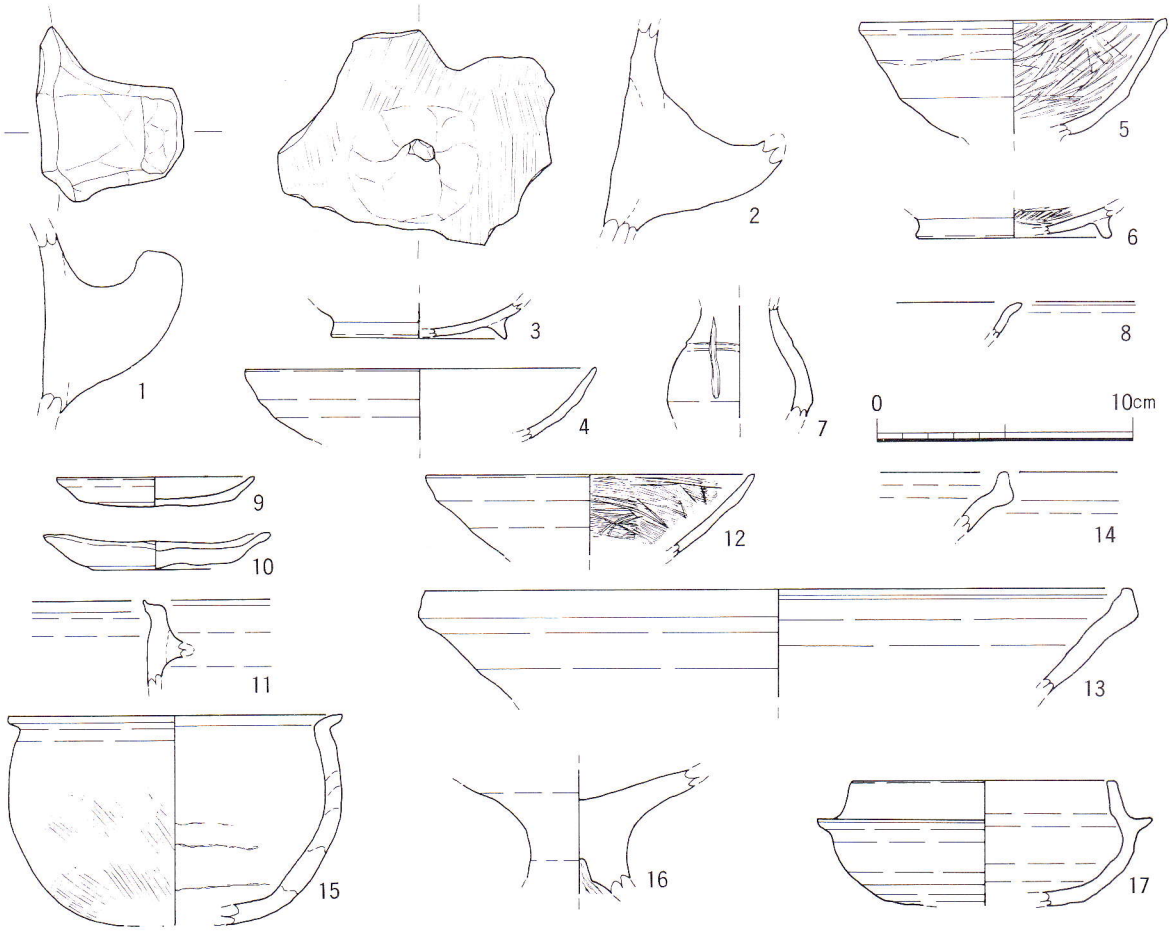
第3図　1次調査　遺構全体平面図

（２）第１次調査出土遺物（第４図１～14、図版20上）

第１次調査出土遺物は、古墳時代（１・２）、平安時代（３～８）、鎌倉時代（９～14）、江戸時代のものに分けられる。以下、図示できたものについて報告を行う。１は土師器の堝、２は甑である。１は把手を外側から貼付けるが、２はほぞ穴を穿ち、把手を差し込んだ後、内側を円盤状の粘土で充填するものである。３・４は土師器の椀で、３は断面逆三角形の高台を貼り付ける。５・６は黒色土器のＡ類椀で、５は口縁端部が丸く肥厚するのが特徴で、内面には細かなミガキが見られる。７は須恵器の小壺で、外面に「＋」字のヘラ記号が見られる。８は畿内産の緑釉陶器で、口縁部は短く外反する。９・10は土師器の皿で、ナデと指押さえにより成形し、口縁部をヨコナデ調整する。11は羽釜で、口縁部を内側へ折り返し、端部を細くつまみ上げるものである。12は瓦器椀で、体部～口縁部をヨコナデし端部は丸くおさめる。内面のミガキは細かい。13・14は東播系のこね鉢で、13の口縁部は丸みをもたず肥厚しない形態であり、14よりも先行するものである。

（３）直川1235-1番地出土遺物（第４図15～17、図版20下）

第２次調査の西隣（第１図）より出土した遺物で、土地所有者の方の許可を得、実測調査を行う機会を得たので、合わせて報告を行う。15は土師器の鉢で、球形の体部に短く外反する口縁部を有する特徴的な形態を呈する。外面は二次焼成により赤変している。16は土師器の高杯で、全体的に厚手である。17は須恵器の杯身で、陶邑編年のMT15型式に比定できる。また図示したもの以外に、土師器・



第４図　１次調査及び直川1235－1番地出土遺物実測図

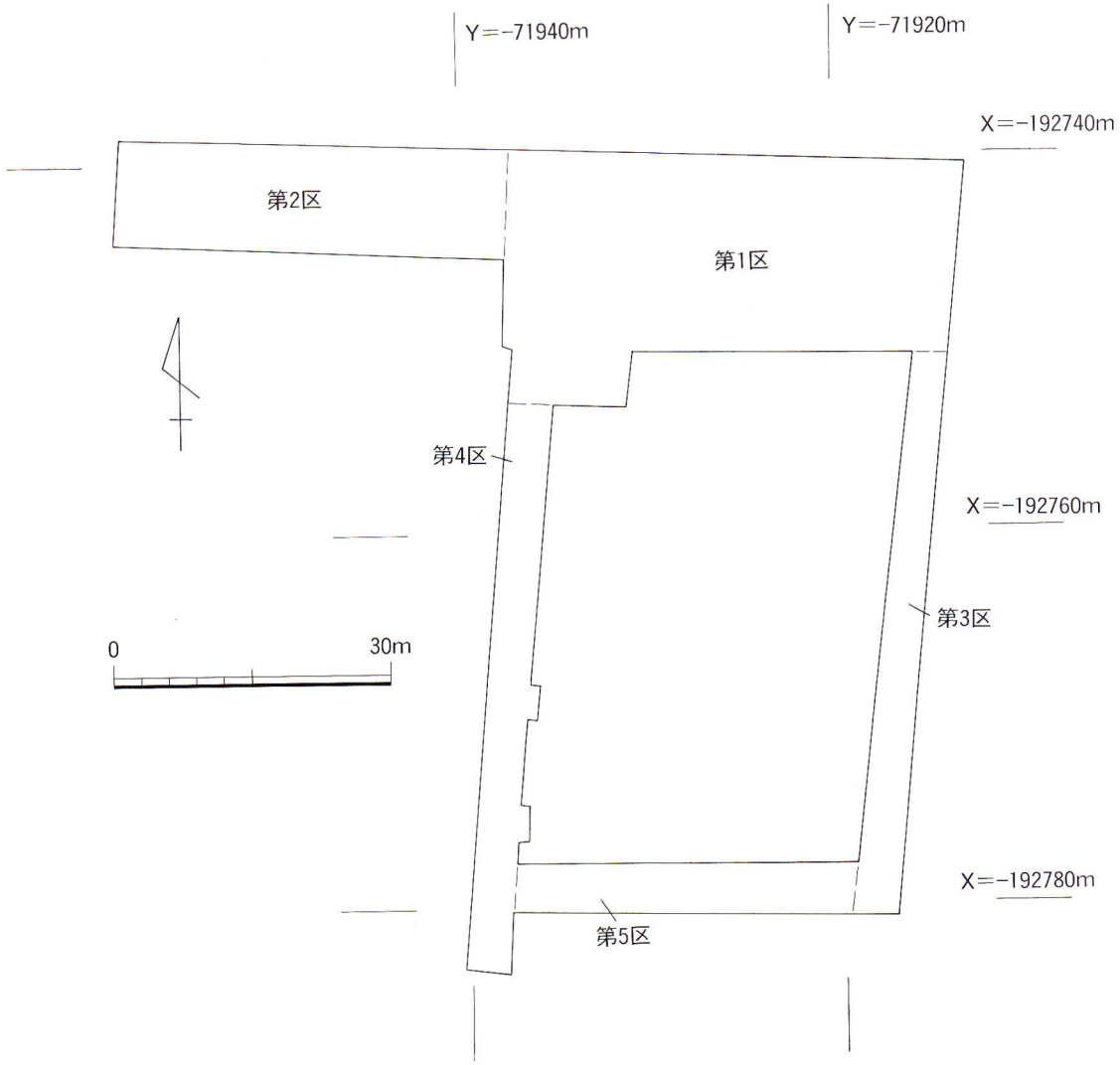
須恵器の甕がある。これらは、出土地点と第２次調査の位置関係から竪穴住居から出土した可能性が高く、住居がさらに西方へ展開していたことを示唆する遺物として重要である。

４．調査の方法と経過

（１）調査の方法

調査は、1999年８月５日から同年10月30日までの約３ヶ月間の期間で、小学校プール建設工事予定範囲内において調査区を設定し、実施した(第５図)。調査対象範囲内において、北東側の最も広い南北10m、東西24mの調査区を第１区とし、西側に隣接する南北６m、東西21mを第２区とした。また、第１区の東端から南に幅2.5m、長さ30mのトレンチ調査区を第３区とし、第１区西端から第３区と同様に南に幅2.5m、長さ33mのトレンチ調査区を設定し第４区とした。そして、第３区と第４区の南端を結ぶ幅３m長さ18mトレンチ調査区を第５区とした。以上の調査区に加えて、第４区の東側に検出遺構の延長を確認するためのサブトレンチを３箇所設定し、面積合計約600m²の調査を行った。

調査は、機械力によって旧地表面である第１層(水田耕土)から第４層(江戸時代の遺物包含層)ま



第５図　調査地区割図

でを掘削し、第５層以下を人力により掘削した。

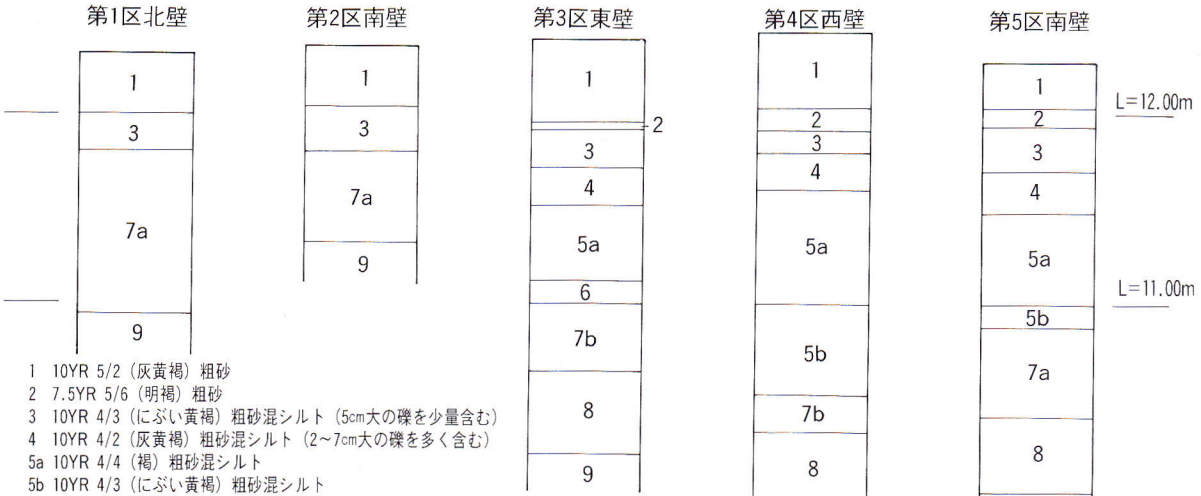
以下の遺物包含層の遺物取り上げについて、第５層は第３～５区といったトレンチ調査区に広がりをもつことからトレンチ幅で長さ５ｍ単位の遺物取り上げを行った。また、第６層についても第３区に偏ってみられた為、同様の遺物取り上げを行った。

土層の色調及び土質観察については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を使用した。遺構平面図の実測について、国土座標軸の整数値に合致した測量杭を調査範囲内に設置し、遺構実測の基準とした。遺構平面実測図の一部及び壁面土層堆積状況図については1/20の縮尺で手実測で実施した。なお、遺構内の遺物出土状況図及び特殊遺構については1/10の縮尺で実測図を作成した。遺跡の水準は和歌山県水準点（T.P.＋）を基準とした。また、遺構平面全体実測図については縮尺1/40でラジコンヘリによる航空写真測量を実施した。

遺構等の写真撮影は随時行ったが、最終的な全景写真等についてはラジコンヘリによる航空写真撮影を実施した。

（２）調査の概要

調査地の基本的な土層堆積状況について、地表面の標高は調査地北側では東西に水平に標高12.20ｍを測るが、南側丘陵端部においては標高12.10ｍを測り北側より少し低くなっている。現地表である水田耕土（第１層・10YR5/2（灰黄褐）粗砂）が約40㎝、床土（第２層・7.5YR5/6（明褐）粗砂）が約10㎝の厚さで堆積する。その下の堆積は、旧耕土とみられる堆積の第３層（10YR4/3（にぶい黄褐）粗砂混シルト）が約20㎝、その床土に相当するとみられる第４層（10YR4/2（灰黄褐）粗砂混シルト）が約20㎝堆積する。さらに第5a層（10YR4/4（褐）粗砂混シルト）が第３～５区で40～60㎝、第5a層に礫を混入した第5b層が第４区で50㎝第５区で約10㎝堆積する。第３区の第5b層下に第６層（10YR4/2（灰黄褐）粗砂混シルト）が10㎝の厚さで堆積する。以上の第5a層から第６層はいずれも丘陵端部の堆積であり、北側から南側にかけて緩い傾斜がみられる。以上の堆積は全て遺物包含層であり、



第６図　調査地土層柱状模式図

第3・4層は江戸時代まで、第5a・5b層は室町時代まで、第6層は鎌倉時代までの遺物を包含する層である。

第6層より下層の堆積について、無遺物層である第7a層(2.5Y6/4(にぶい黄)粗砂混シルト)は第1・2区と第5区に堆積しており、厚さ50~90cmで堆積するものである。第7b層は第7a層に小礫を混入したもので厚さ20~40cmで第3・4区に堆積する。第8層(10YR5/6(黄褐)粗砂混シルト)は第3・4・5区にみられるもので、約40cmの厚さで堆積し、確認した最下層である第9層(10YR6/6(明黄褐)粗砂混シルト)は20cm以上の厚さで全調査区にみられる。

遺構については第7a・7b層上面で検出した。この遺構面の標高は第1・2区で11.80mであるが、南西側へ向かい下がっており、第3・5区では10.90m、第4区では10.50mを測る。遺構は古墳時代の土坑(土器棺?)1基、竪穴住居2棟、平安時代の掘立柱建物8棟分以上、ピット群、鎌倉時代の掘立柱建物1棟分以上、集石遺構2基、土葬墓1基、ピット群などを検出した。

なお、平成11年10月20日から10月22日の3日間にかけて、和歌山市立直川小学校全校生徒を中心とした関係者を対象に現地説明会を行った(写真1)。説明会は5回に分けて行い、参加者の合計は272名であった。

写真1　現地説明会風景

5．遺構

遺構は、第1~5区を通してすべての調査区において検出した(第7図、図版3~5)。中でも第2区を除く調査地中央部から東側にかけては、掘立柱建物に伴うとみられる柱穴などを多数検出し、遺跡の中でも特に遺構の密集する場所とみられる。まず古墳時代の遺構では、第3区及び第4区にそれぞれ1棟ずつ竪穴住居を検出した。これらは、ともに方形の平面形をもつもので、時期的には第3区検出のSB-1が前期のもので、第4区検出のSB-2が後出する中期のものである。このほか、第1区ほぼ中央部において前期の土器棺墓とみられるピット1基(P-72)や第5区西端において貯蔵穴の可能性があるピット1基(P-308)のほか、数基のピットを検出した。奈良時代のものは比較的少なく、明確なものでは第3区南端において検出した土坑1基(SK-7)がある。平安時代の遺構では、第3・4区のほぼ中央部から北側に集中して多数の掘立柱建物に伴うとみられる柱穴を検出し、少なくとも8棟以上の掘立柱建物が存在し、その方向性などから2時期以上のものが存在するものとみられる。次に鎌倉時代の遺構では、第3・4区のほぼ中央部から南側に集中して掘立柱建物に伴うとみられる柱穴や土葬墓とみられる土坑1基(SK-10)、集石遺構2基(SX-1・SK-15)、溝2条(SD-6・7)などを検出した。掘立柱建物は1棟以上あるものとみられる。また室町時代の明確な遺構は確認できなかったが、基本層序の第5層が室町時代の堆積であり、第2区西端で検出した溝(SD-1)の覆土が第5層と類似することから室町時代に埋没した遺構であ

Y=-71940m
Y=-71920m
X=-192740m
X=-192760m
X=-192780m
SD-1
SK-3
B
B'
SH-4
SK-1
SH-8
SH-2
P-52
P-28
P-24
P-35
P-72
P-46
SH-6
SH-1
A
A'
SH-7
SH-3
C
C'
P-48
P-142
P-63
P-53
P-54
P-66
SH-5
P-155
P-322
P-168
SB-1
D
D'
SH-9
P-177
SB-2
P-207
SK-10
P-308
SX-1
SK-15
P-268
SK-7
SD-6
SD-7
0
10m

第７図　遺構全体平面図

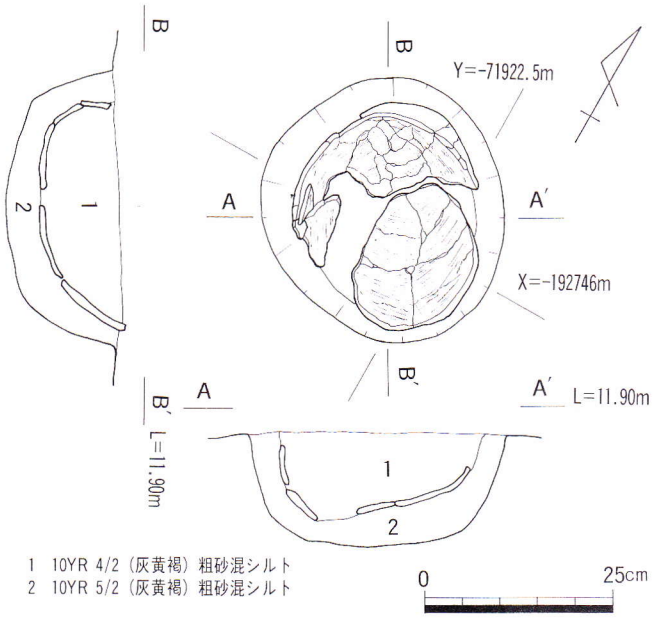
るものと考えられる。このほか、第１区と第２区の境目付近において江戸時代の土坑１基（SK－３）を検出した。

本書では、これらの遺構を古いものから時代ごとに記述し、特に重要と考えられるものについて個別に詳細を述べるものとする。

（１）古墳時代の遺構

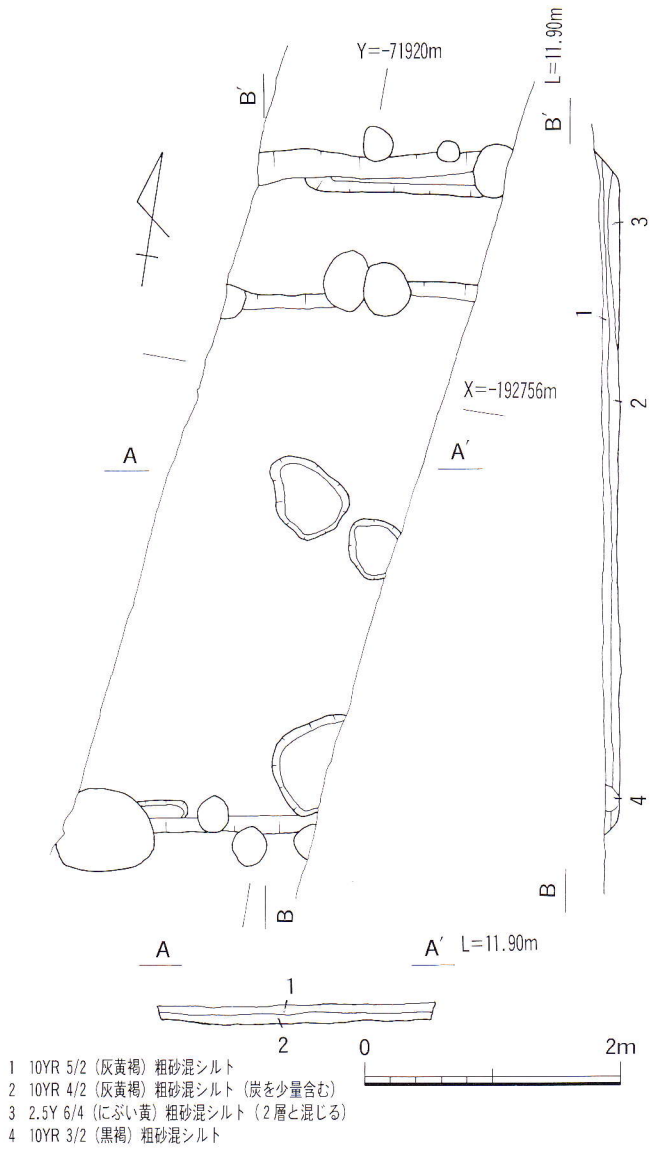
古墳時代の遺構は、前期前半頃のピット１基（P-72）、前期後半の竪穴住居１棟（SB－１）、中期後半の竪穴住居１棟（SB－２）、中期以降の貯蔵穴の可能性があるピット１基（P-308）、後期のピット２基がある。

［P-72］（第８図、図版６上）　P-72は第１区のほぼ中央やや南寄りで検出した直径35cmを測るほぼ円形のピットであり、検出面からの深さは15cmを測る。このピット内部には底面から４cm程度のところに土師器の甕が横位で埋設されていた。この甕は、在地系のものとは全く異なる生駒西麓産のもので、搬入品と考えられ、時期的には庄内併行期の範疇と考えられる。また甕の破片接合の結果、口縁部及び底部が欠失していることから、横たわった底部上位が削平を受けているものとみられ、さらに口縁部が埋設時に打ち欠かれていた可能性があるものと考えられる。以上の状況からみて、この遺構は甕を用いた土器棺である可能性がある。

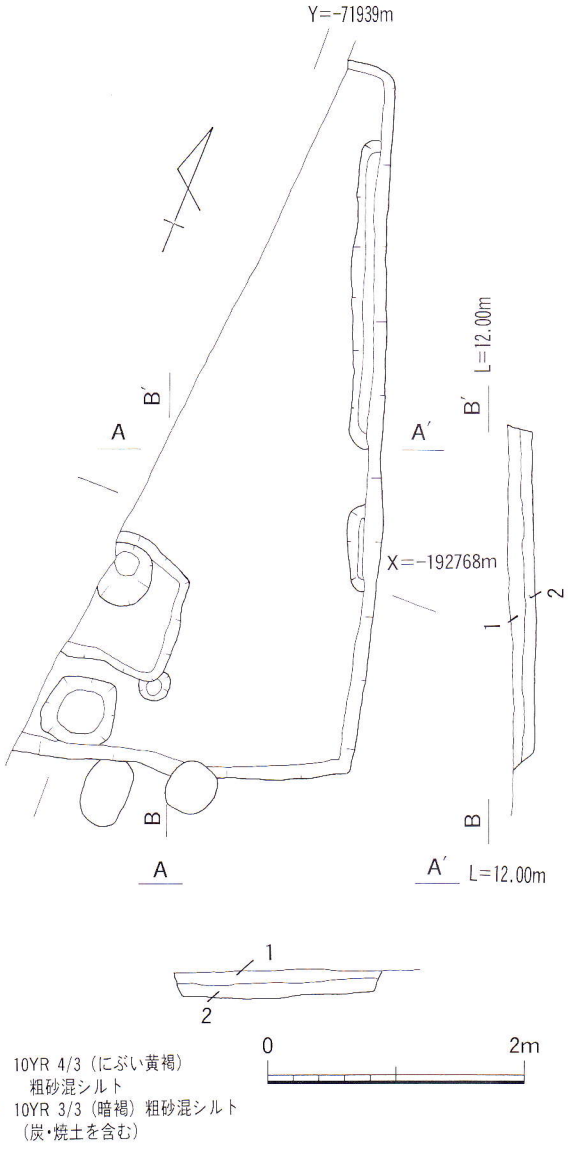


第８図　P－72 遺構平面図及び土層断面図

［SB－１］（第９図、図版６下・６上）　SB－１は第３区のほぼ中央部において検出した方形の平面形を呈する竪穴住居であり、その方向性はN-11°-Wである。この住居は、調査区が狭少な範囲であったため平行してのびる南北両壁を検出したに過ぎない。この状況からみて、この住居の南北幅は5.4mを測り、東西幅もその近似値であるものと考えられる。住居の深さは、検出面から15cm前後を測り、覆土は大きく２層に分層できる（図版７下）。上層である第１層は、灰黄褐色系の粗砂混シルトであり、多量の土器が含まれていた（図版８）。また第２層は第１層に比べ灰味が強い土色であり、炭が含まれる土層である。床面の検出では、まず北壁に平行して幅1.0mを測る、いわゆるベッド状の高まりを検出した。このベッド状遺構は、床面からの高さ10cmを測るもので、にぶい黄色の粗砂混シルトの土を盛り固めて作られている。また、このベッド状遺構を作った後に、壁溝を掘削していることがわかる。この壁溝は、南壁際の一部においても検出できた。また南壁際の調査区東壁直下には隅円方形状のプランをもつ深さ10cm程度の土坑を検出した。この土坑内部からはほとんど土器が出土しなかったが、住居に伴うものとみられ、位置的に貯蔵穴の可能性が高いものと考えられる。また床面のほぼ中央部には、不定形の５cm程度の浅い落ち込みを２カ所検出した。



第９図　SB－１　遺構平面図及び土層断面図



第10図　SB－２　遺構平面図及び土層断面図

これらには熱変した砂岩が含まれており、住居に伴う炉と考えられる。この住居から出土した遺物は、多量の壺・甕・高杯などの土師器のほか、サヌカイトの剝片や砂岩の自然石を用いた叩石などがある。

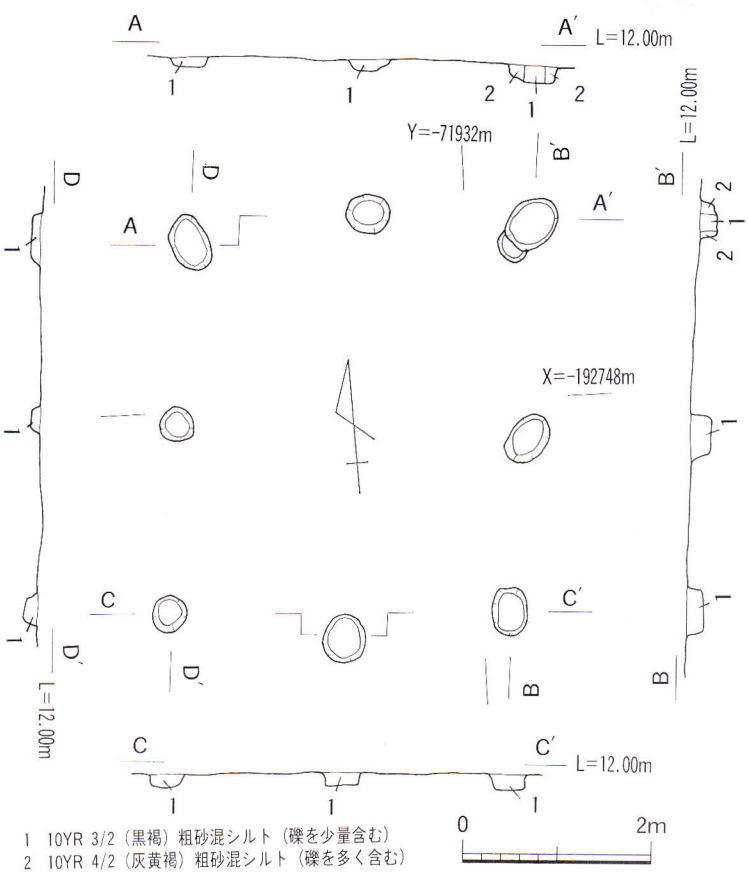
［SB－２］（第10図、図版９）　SB－２は第４区のほぼ中央部において検出した方形の平面形を呈する竪穴住居であり、その方向性はN－18°－WとなりSB－１とほぼ近似した方向性をもつ。この住居は、調査区が狭少な範囲であったため、東壁周辺の約1/4程度を検出したに過ぎない。この状況からみて、この住居の南北幅は5.6mを測り、東西幅もその近似値であるものと考えられる。住居の深さは、中心部で検出面から20cm前後を測り、大きく２層に分層できる（図版10上）。第１層は、にぶい黄褐色系の粗砂混シルトである。第２層は炭・焼土が含まれた暗褐色系の粗砂混シルトであり、多量の土器が出土した（図版10下）。住居の床面は、北端で標高11.77m、南端で11.63mをそれぞれ測り、緩やかに傾斜する状況が確認できた。床面の検出では、まず東壁直下において幅25cmを測る壁溝を検出した。また南壁直下には一辺45cm、床面からの深さ23cmを測る隅円方形状の土坑

があり、この住居の貯蔵穴とみられる。この貯蔵穴の北側には直径50㎝、床面からの深さ35㎝を測る主柱穴がある。また北壁近辺の調査区西壁の土層から焼土塊が顕著に観察できたことから、この住居はカマドをもつもので、そのカマドが北壁に造り付けられていた可能性が高いものと考えられた。この住居からの出土遺物は、土師器の壺・甕・高杯や須恵器の甕のほか、砂岩の叩石・台石、結晶片岩の砥石、不明鉄製品などがある。

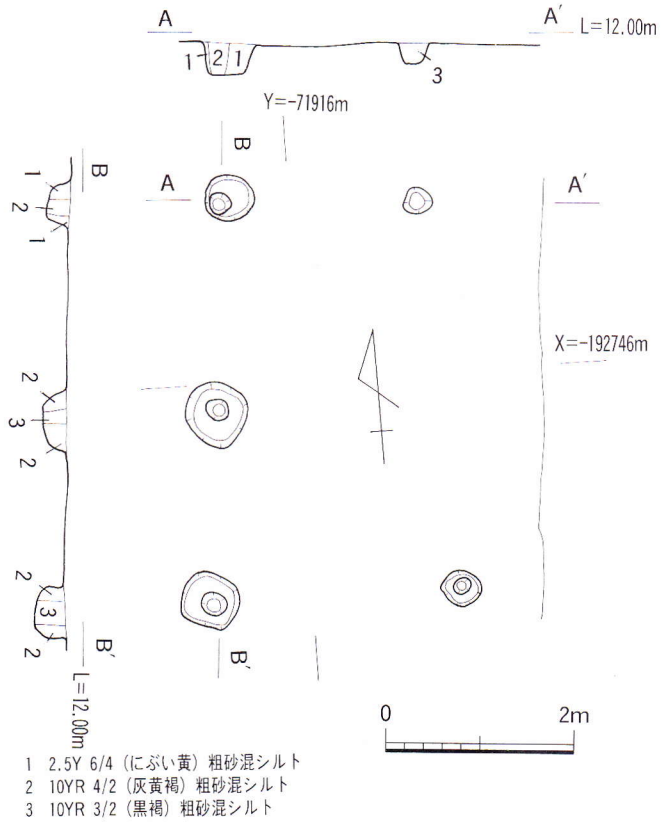
（2）平安・鎌倉時代の遺構

平安・鎌倉時代の遺構は、調査区のほぼ全域で検出した。平安時代の遺構は、第1区全域から第3区北半に集中し、掘立柱建物8棟以上（SH-1～8）、建物に伴うと考えられる柱穴群、溝を検出した。これに対して鎌倉時代の遺構は、第3・4区の南半から第5区に密集することから、分布に遍在性がある。検出した遺構には掘立柱建物1棟以上（SH-9）、建物に伴うと考えられる柱穴群の他、第4区南端で検出した東西方向の溝（SD-6・7）があり、この溝は集落の南限を画する性格が考えられる。この他に土坑、土葬墓（SK-10）、集石遺構（SX-1、SK-15）がある。以下、主要な遺構について報告を行う。

［SH-1］（第11図、図版11）　第1区の南西で検出した掘立柱建物である。建物の規模は梁行2間（3.8m）、桁行2間（4m）の規



第11図　SH－1　遺構平面図及び土層断面図

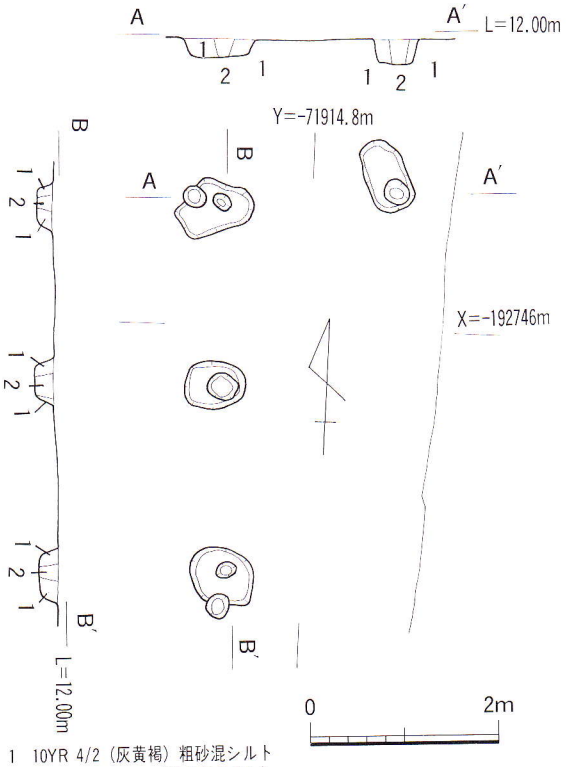


第12図　SH－2　遺構平面図及び土層断面図

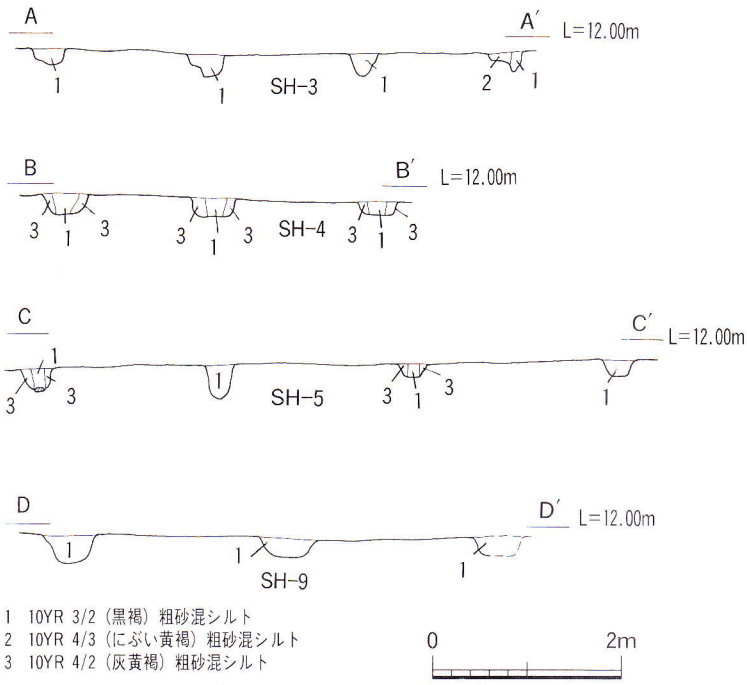
模を有し、主軸は真北に対してN－2°－Eをとる。柱間は、梁行はほぼ1.9m等間であるが、桁行は1.8～2.2mとかなりばらつきがある。柱穴は直径30～50cmの楕円形を呈し、内１ヶ所で柱径20cmの柱痕跡を確認した。深さは検出面から15～20cmを測る。また柱穴の底面のレベルはほぼ水平である。土師器の細片が少量出土した。

［SH-2］（第12図）　第１区東方、SH－８と重複する形で検出した東西２間以上、南北２間（4.2m）の掘立柱建物である。柱間は2.0～2.6mを測り、一定ではない。主軸は真北に対してN－8°－Eをとる。ホリカタは直径約60cmの隅円方形を呈する大きなものであり、柱芯の大きさは15～20cmを測る。深さは30cm前後残存している。土師器、黒色土器が少量出土した。

［SH-3］（第14図）　第１区SH-2の南隣で検出した東西３間の掘立柱建物である。柱間は西から1.7m、1.7m、1.6mである。柱穴は直径30～40cmの楕円形を呈するものであり、深さは20cm前後残存している。内１ヶ所で、柱痕跡を確認した。土師器、黒色土器の他、炭が出土している。北側に対応する柱穴が確認できないことから、南側に展開する掘立柱建物であると考えられる。



第13図　SH－８　遺構平面図及び土層断面図



第14図　SH－３～５・９　土層断面図

第１表　掘立柱建物一覧表

遺構No	規模		主軸方向	時期	備考
SH－１	梁行２間×桁行２間	3.8×4.0m	N－2°－E	平安時代	柱間は1.8～2.2mと不定
SH－２	２間×２間以上	4.2m×？	N－8°－E	平安時代	ホリカタは一辺60cmの隅円方形
SH－３	３間×？	5.0m×？	N－2°－W	平安時代	南に展開する掘立柱建物か
SH－４	２間以上×１時以上	3.2×1.6m	N－16°－E	平安時代	柱間は1.6m等間
SH－５	３間×？	6.1m×？	N－9°－E	平安時代	内１基に片岩を礎盤として使用
SH－６	梁行１間×桁行２間	2.4×2.5m	N－6°－W	平安時代	SH－７と重複、新旧は不明
SH－７	２間以上×２間以上	3.4×2.5m	N－35°－E	平安時代	柱間は1.7m等間
SH－８	２間×２間以上	3.9×2.4m	N－3°－E	平安時代	SH－２と重複、新旧は不明
SH－９	１間以上×２間以上	4.5×1.0m	N－6°－W	鎌倉時代	柱穴は直径50cmの楕円形

［SH-4］（第14図、図版12上）　第１区の北西で検出した東西２間以上・南北１間以上の掘立柱建物である。柱間は1.6m等間である。主軸は真北に対してN－16°－Eをとる。ホリカタは直径40～50cmの楕円形を呈し、柱芯の規模は約20cmを測る。深さは検出面から30cmを測り、柱穴の底面のレベルはほぼ水平である。土師器、黒色土器が少量出土している。

［SH-5］（第14図、図版12下）　第３区の北端で検出した南北３間の掘立柱建物であるが、東西どちらに展開するのか明らかではない。柱間は北から1.9m、2.1m、2.1mを測る。主軸は真北に対してN－9°－Eをとる。柱穴は直径約30cmの円形を呈し、深さは20～40cm残存している。また内２ヶ所で柱痕跡を確認したが、その１つの底面には片岩の板石を使用して礎盤としていた。出土遺物には、土師器、黒色土器、炭がある。

［SH-6］　第１区のほぼ中央で検出した、梁行１間（2.4m）、桁行２間（2.5m）の規模を有する小型の掘立柱建物である。桁行の柱間は東西とも1.3m等間と短い。主軸は真北に対してN－6°－Wである。柱穴は直径30cm前後の円形を呈する。土師器、黒色土器が出土している。

［SH-7］　SH-6と一部重複する東西２間以上・南北２間以上の掘立柱建物である。柱間は1.72m等間である。主軸は真北に対してN－35°－Eである。柱穴の規模は直径40cmを測る。土師器、黒色土器が出土しているが、SH-6との新古関係は定かではない。

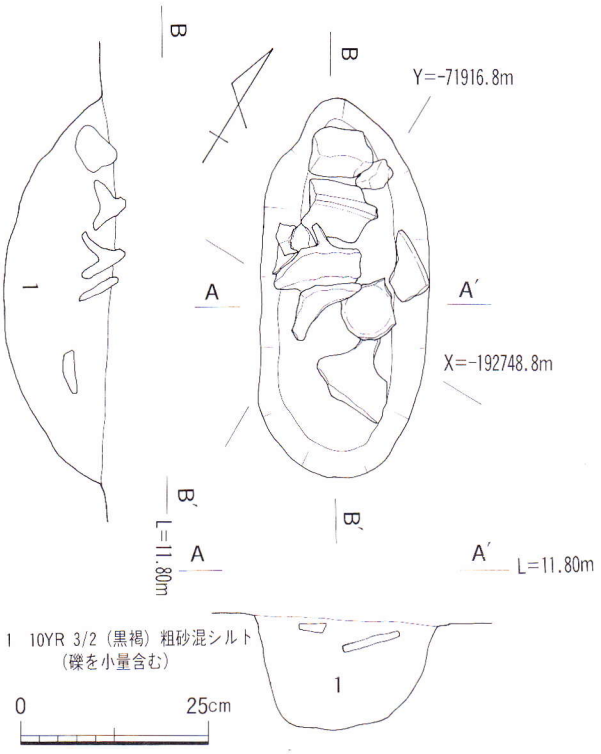
［SH－８］（第13図）　第１区東方、SH－２と切り合いをもつ東西２間以上、南北２間（3.94m）の掘立柱建物である。柱間は約２m等間である。主軸は真北に対してN－３°－Wをとる。柱のホリカタは62～80cmを測る大きなもので、やや不整な楕円形を呈するもので、柱芯の大きさは22～36cmを測る。深さは20～30cm残存している。土師器の細片が出土した。SH－２との新古関係は定かではないが、SH－８は平安時代の柱穴に切られているため、SH－２より時期的に遡上する可能性が高い。またSH－２と８は建物の規模や柱穴の形状が類似することから、建て替えの可能性がある。

［SH－９］（第14図）　第４区のほぼ中央で検出した、東西１間以上・南北２間以上の掘立柱建物である。柱間は2.3m等間である。主軸は真北に対してN－６°－Wをとる。柱穴は直径約50cmの楕円形を呈する比較的大きなものであるが、柱痕跡は確認できなかった。深さは検出面から30～40cm残存している。土師器、瓦器が少量出土した。

これらの建物は、伴出遺物からSH-1～８が平安時代、SH－９が鎌倉時代に存在したものと考えられる。復元できた建物は９棟であるが、他に多くの柱穴を検出していることからより多くの建物の存在が想定できる。またこれらの建物は、SH-2と5、SH-3と8、SH-6と9の方向性が一致し、SH

-1・4・7は大きく異なることから、一定の規格性に基づいて建てられ、何時期かの建て替えが想定される。

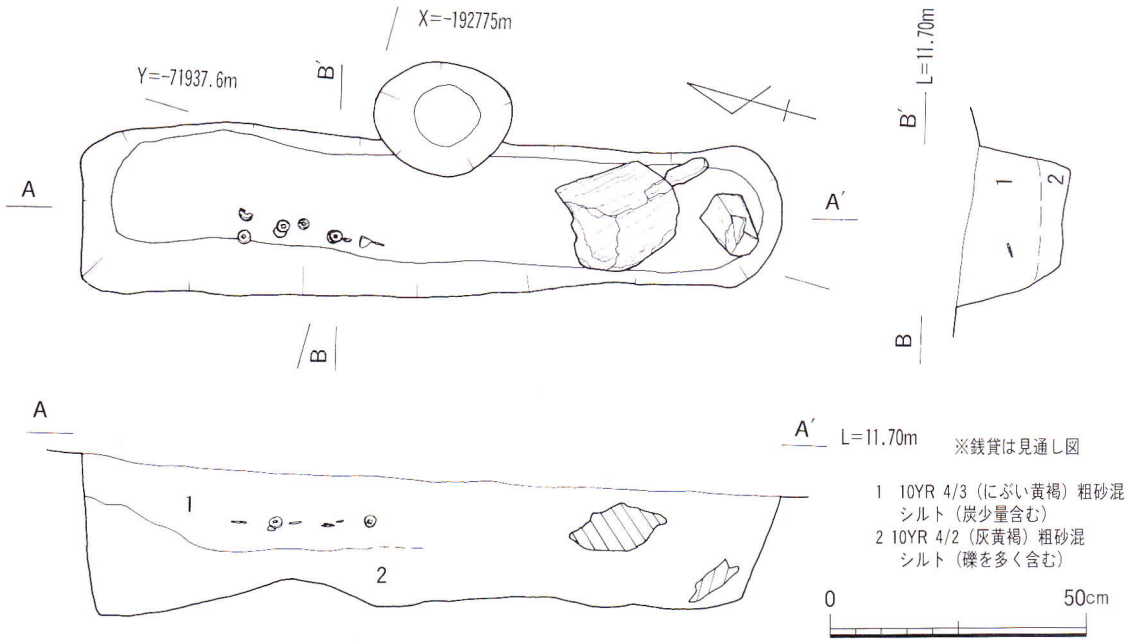
［P-53］（第15図、図版13上）　第１区南東で検出したもので、長径50cm、短径22cmの規模を有する。遺構の平面形は楕円形を呈し、深さは検出面から15cmを測る。埋土は単層であり、その上層から、土師器片、黒色土器A・B類椀、竈が密接した状態で出土した。遺物は全て破片であることから廃棄されたものと考えられるが、周辺の遺構の状況とは全く異なり、廃棄時の何らかの祭祀的な行為とも考えられる。



第15図　P－53 遺構遺構平面図及び土層断面図

［SK-10］（第16図、図版13下、図版14）

第４区南方で検出した土葬墓で、長さ138cm、幅26～34cmを測り、北側がやや幅広い。深さは検出面から25～30cmを測り、断面は逆台形を呈し、垂直ぎみに掘り込まれている。床面は水平ではなく、凹凸が著しい。埋土は２層に分けられ、北側のみに炭混じりの第１層が北端から60cmの範囲にわたって確認できたが、南側については明確にできなかった。出土遺物は第１層から土師器・瓦器片の他、銭貨15枚以上が出土している。銭貨は全て北宋銭であり、１列に並んで出土し、高さも水平であった。また南側では片岩の大



第16図　SK－10 遺構平面図及び土層断面図

石が落ち込んだ状態で出土している。以上のような状況から第１層は直線的に南側へ延びており、そのレベルが片岩の大石の底面と一致することから、棺の腐食による流入土であると考えられる。また、銭貨は棺蓋上に副葬されていた可能性が高く、片岩も蓋石として使用されていたものが、棺蓋の腐朽に伴って落ち込んだものと考えられる。

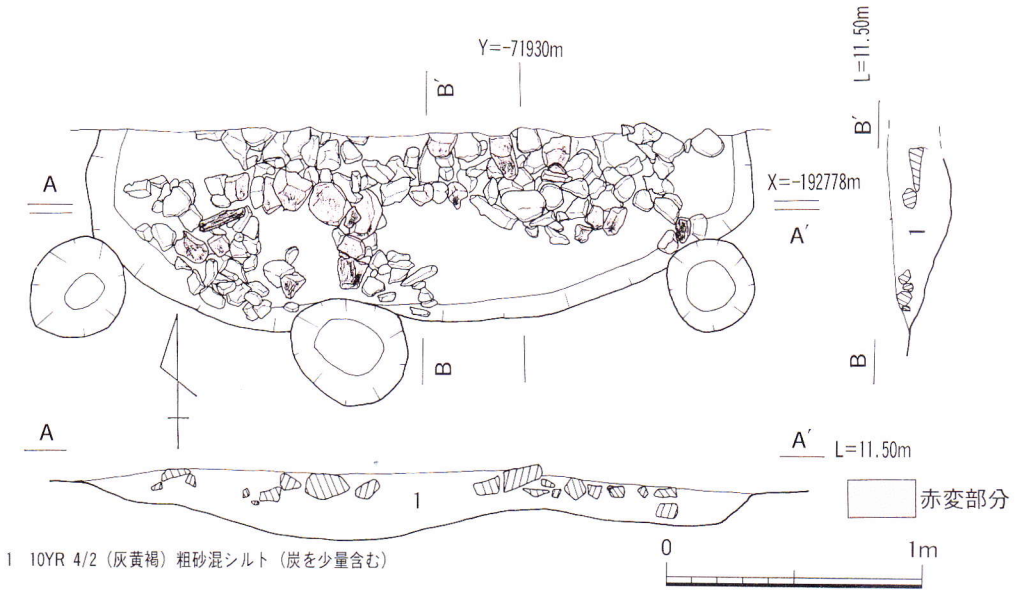
以上、SK-10は狭長なトレンチで検出したため、他にも同様の遺構が存在するのか、単独で位置するものかは明らかではない。また付近にはSH-９を始め、建物が確認できることから、屋敷墓のような性格も想定できるかも知れない。いずれにしろSK-10の存在は、当該期に集落の一部が墓域化したことを示すものである。

［SX-１］（第17図、図版15、図版16上）　第５区西方で検出した集石遺構である。調査区北壁外へ延びるため全体の規模・形状は不明であるが、東西2.47m、南北1.65m以上の規模を有し、ややいびつな隅円方形を呈する。深さは検出面から20cm前後を測り、ホリカタはなだらかに掘り込まれている。埋土は単層であり、炭を少量含んでいる。遺構の中央には10～40cm大の砂岩の河原石がやや乱雑に据えられており、礫の上面のみが被熱し赤変していたが、床面等には火を受けた痕跡は認められなかった。土師器、瓦器が少量出土している。

以上のように被熱範囲が礫の上面に限られることから、遺構内の礫は投棄されたものではなく、ほぼ原位置を保っている。そしてこの上部で火を使用した行為が行われたことは間違いなく、何らかの焼成遺構であると考えられる。

［SK-15］（第18図、図版15、16下）　第５区の中央、SX-１の1.4m東で検出したものである。調査区北壁外へ延びていることから、全体の規模・形状は不明であるが、東西2.64m、南北0.8m以

第17図　SX－１　遺構平面図及び土層断面図



第18図　SK－15 遺構平面図及び土層断面図

上、深さ20cm前後を測り、平面形は隅円方形を呈する。埋土は単層であり、炭が少量混入している。５～20cmのやや小振りな砂岩河原石の他、片岩が据えられている。SX－１同様に、礫の上面のみが被熱し赤変しているが、床面等には火を受けた痕跡は確認できなかった。出土遺物には、土師器・瓦器片の他、平瓦が出土している。SK-15は、その規模や形状、方向性からSX－１と同様の性格が考えられる。

以上２基の集石遺構は、同じ性格の施設であると考えられるが、SK-15の礫が小振りであること、片岩が含まれるなど若干の相違点もあり、これは構築された時期差を示している可能性がある。しかし出土遺物からは明確な時期差は確認できず、ほぼ同時に廃絶したものと考えられる。また床面や側面、下方の礫までは火が及んでいないことから、上部は削平されていると考えられ、検出した部分は下部施設であると考えられる。その性格については定かにできなかったが、SK-10と方向性を同じくすることから埋葬にかかわる施設とも思われる。

6．遺物

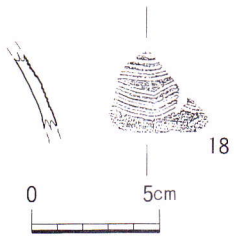
今回の調査で出土した遺物について、縄文時代のものはサヌカイト製石鏃がある。また、弥生時代のものでは中期の壺などが少量出土した。古墳時代では、竪穴住居から出土した土師器・須恵器など土器類の他、叩石・台石・砥石などの石器がある。古墳時代以降では、掘立柱建物を構成する柱穴群を中心に奈良～鎌倉時代の土器、緑釉・灰釉陶器、輸入陶磁器、瓦、竈、土錘などが出土した。また、特筆すべきものとして、鎌倉時代の土葬墓と考えられるSK-10から銭貨（全て北宋銭）が15枚以上出土した。室町～江戸時代の遺物は比較的少量であるが、遺物包含層から中国製青磁・火打石などが出土した。

本書では、これらの出土遺物について、まず土器を一括して時代別に分類してふれ、そのなかで量的に最も多く出土した古墳時代の土器をSB-1・2出土資料、包含層他出土土器に分けて扱い、その他の時期のものは時代別に記述する。土器以外のものは緑釉・灰釉陶器、輸入陶磁器、瓦、竈、土錘、石器、石製品、金属製品の項目をそれぞれ設けて記述するものとする。

（1）土器

弥生時代の土器

弥生時代の土器（第19図）は、図示したものを含め2点出土した。18は壺の体部と考えられ、ナデ、ミガキにより調整された後、2条の櫛描波状文が施文される。弥生時代中期後半に比定できる。SB-1から出土したが、住居に伴うものではなく、混入品と考えられる。



第19図　遺物実測図1

古墳時代の土器

［SB-1出土土器］（第20図、図版21）

19～27は土師器で、図示したもの以外に甕が出土している。19～21は壺である。19・20は二重口縁壺であり、19は直立ぎみに立ち上がる頸部から大きく屈曲して段をなし、口縁は大きくひらく。20も同じく段をなして、内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は短く外反するが、明確な頸部を有さない。また口縁端部は、調整時のナデによって凹線状に窪んでいる。外面には黒斑が認められる。19・20はともにナデにより丁寧に調整され、胎土も精良である。21は外上方に大きく外反する口縁部を有し、端部は調整時のナデによって引き延ばされる。全面をナデによって調整するが、内外面ともに粘土紐の接合痕を残しており、丁寧なものではない。また胎土中には5㎜前後の片岩・石英を多量に含んでおり、他の土器に比べて明らかに異質である。このことから、紀ノ川南岸地域からの搬入品である可能性が高い。

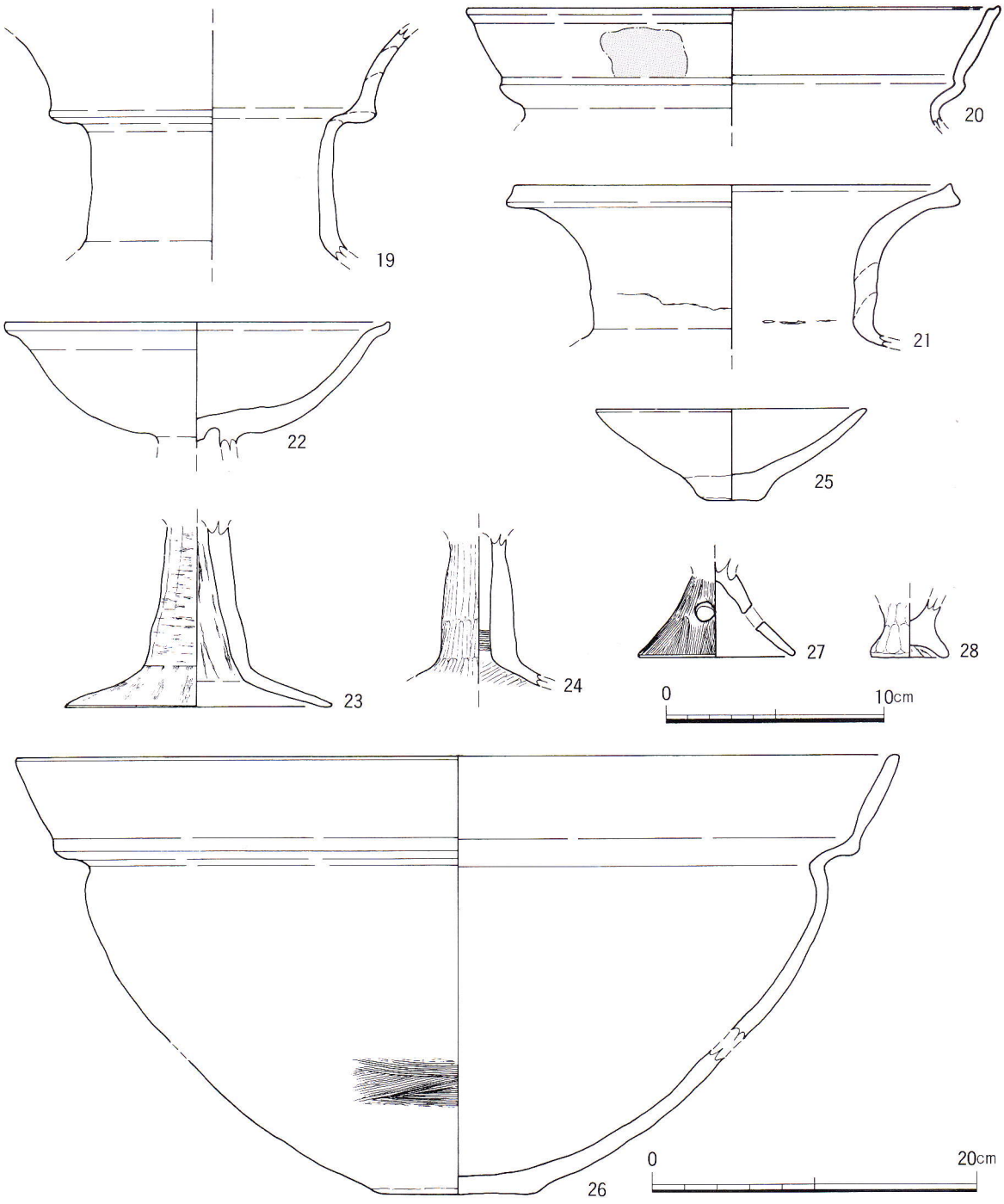
22～24は高杯である。22は口径17.6cmを測る杯部であり、緩やかに外上方にのび、口縁端部にいたって外反し、端部は上方につまみ上げられる。器表面が磨滅しているが、丁寧なナデによる調整が確認できる。23・24は脚部である。23は脚部径12.2cmを測り、裾部が大きく屈曲して接地するものである。脚部上半にはヨコ方向の、下半にはタテ方向のハケによって調整し、ナデ消される。24も同様に裾部が屈曲して接地する形態と考えられ、内外面をミガキにより調整する。

25・26は鉢である。25は口径12.4cm、器高4.2cm、底径3.4cmを測り、底部から口縁部にかけて外

上方に直線的にのびる形態を呈する。指押さえの後、不定方向のナデによって調整する。26は口径54.4cm、器高26.9cm、底径9.0cmを測る大形の鉢である。口縁部は有段口縁を呈し、直線的に外上方にのびる。磨滅しているが、体部下半にはヨコ方向のハケの後、ナデによって仕上げられる。

27は、脚部径7.2cmを測る小型器台または高杯である。タテ方向のハケによる調整の後、円錐状にひろがる脚部中位には、直径９㎜の円孔が外から穿たれる。円孔の数は３ヶ所と考えられる。

28は製塩土器で、脚台高2.0cm、裾径2.8cmを測る製塩土器である。短くひろがる脚台底部は、僅



第20図　遺物実測図２

かに窪んでいる。外面は指ナデにより調整され、指圧痕を残しているが、内底面は未調整である。

以上、SB－1出土土器は布留式併行新段階の様相を呈し、古墳時代前期後半に位置づけられる。

［SB－2出土土器］（第21図、図版22）

29～44は土師器で、図示したもの以外の器種として甑と考えられるものが1点ある。29・30は壺である。29は小型丸底壺であり、口径8.2cm、器高10.3cmを測る。球形の体部に外上方にのびる口縁部を有し、端部は丸くおさまる。体部外面はハケによって調整された後、ナデ消される。口頸部には炭化物が付着しており、外面には黒斑が認められる。30は平底を呈し、底径7.0cmを測る。胎土はやや粗く、3㎜前後の砂岩礫、石英を多量に含む。

31～35は甕で、「く」の字形の口縁部を有するが、肥厚しない形態のもである。31～33は口縁部が外上方に直線的にのびるものであり、口径は31が14.0cm、32が14.4cm、33が17.9cmを測る。31・32は端部を丸くおさめるが、33は外上方につまみ出している。34は口縁が大きく外反するもので、口径21.5cmを測る。35は直線的に立ち上がる体部から口縁部にいたって若干ひらくもので、体部と口縁部の境が不明瞭なものである。以上の甕は、ハケによって調整した後、ナデによって仕上げるもので、赤褐色から暗褐色に発色し、胎土には少量の片岩・石英を含んでいる。

36～43は高杯である。36の杯部は緩やかに立ち上がり、口縁端部を外反させるものであるが、杯部は深い。37・38は杯部下半が水平に短くのび、そこから口縁部が外反ぎみに大きくひらくものである。これらはハケによって調整した後、ナデによって全体を仕上げるものであり、37は杯部下半にミガキによる調整を加えている。39～43は脚部である。41は脚部が他のものに比して細く、中実で筒状を呈する。42・43は裾部が大きく屈曲して、接地するものである。これらはナデ、ヘラ削りの後、ミガキ等によって仕上げている。

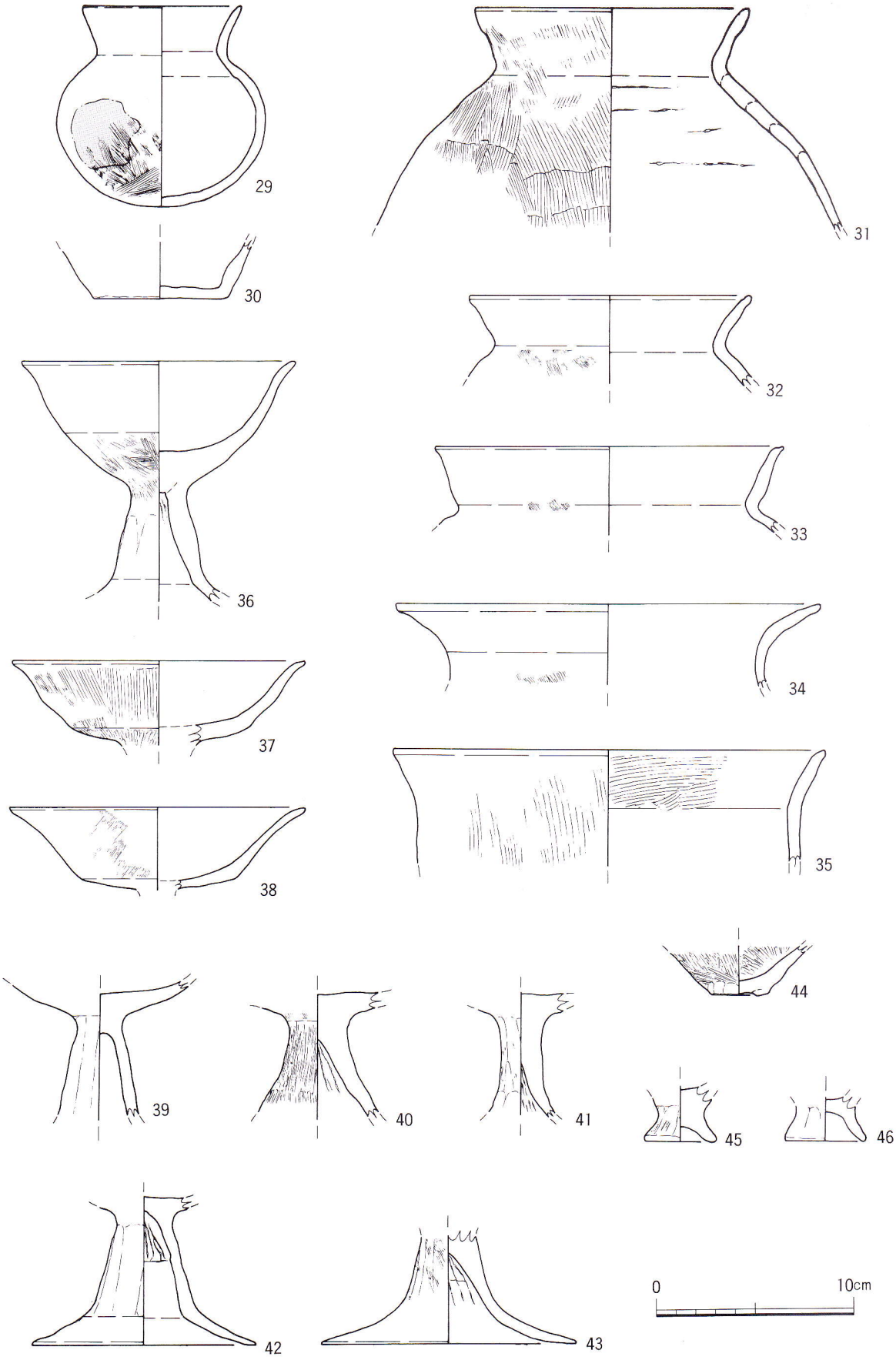
44は底径3.0cmを測る鉢の底部である。成形過程は輪状の粘土紐を底部にして据え、体部を成形した後、底部を充填したものと思われる。成形の後、内外面をミガキによって調整している。胎土は精良である。また内面には煤の付着が確認できる。

45・46は製塩土器である。ともに短くひらく脚台部に、45は底部が僅かに窪むものであり、46は上げ底ぎみのものである。ともに指ナデによって調整され、外面にはその指圧痕を残している。45が脚台高1.5cm、裾径3.6cm、46が脚台高1.8cm、裾径4.0cmを測る。

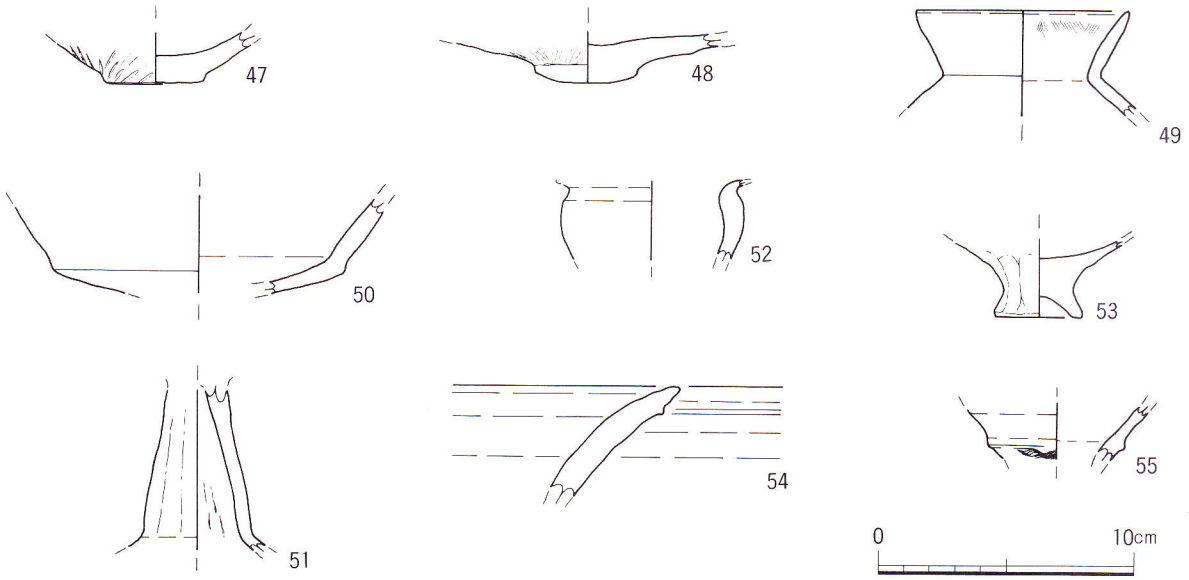
以上SB－2出土の土器は、報告したものは全て土師器であるが、その他に須恵器が12点出土している。しかし全体の量からすれば極少量であり、器種も甕のみに限定される。SB－2は、SB－1よりも後出する様相を呈し、古墳時代中期後半に比定できる。

［包含層他出土土器］（第22図）

47～52は土師器である。47は甕で、庄内式併行期と考えられるものである。底径3.8cmを測るもので、叩きによって成形した後、全体をナデにより仕上げている。48は壺と思われ、丸みを帯びた不安定な底部をもち、底径は4.0cmを測る。ハケによって調整した後、ナデによって仕上げている。49は小型丸底壺であり、口径8.4cmを測る。「く」の字形にひらく口縁部をもち、ハケ調整の後、ナデによって仕上げる。50・51は高杯である。50は水平ぎみに短くのびる杯部から、大きく外反する口縁部を有する。52は鉢形を呈する手づくねの土器であり、残存高は3.1cmを測る。丸みを帯びた体部に短く屈曲する口縁部を有すると考えられる。指押さえとナデによって成形される。



第21図　遺物実測図 3



第22図　遺物実測図 4

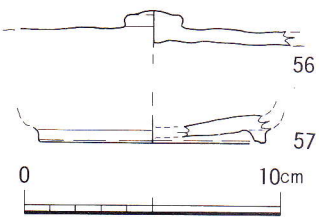
53は製塩土器であり、脚台高2.0cm、裾径は3.4cmを測る。体部は椀形にひらくものと考えられる。外面にはナデによる指圧痕が残る。

54・55は須恵器である。54は甕の口縁部であり、口縁端部直下には断面三角形の凸帯がめぐる。55は瓶の頸部である。外面に櫛描波状文が施文される。焼成は良好で、黒灰色に発色する。

これらは47・52・54・55が第３区第５ａ層、48～51が第３区第６層、53がＰ-308から出土した。

奈良時代の土器（第23図）

56は杯蓋である。偏平な宝珠様のつまみを有する。転用硯として使用されたようで、内面はかなり磨耗している。57は杯身で、底径8.8cmを測る。底部はヘラ切り未調整であり、直立する低い高台が底部端に貼付けられる。高台の接地面は凹線状に窪んでいる。57も56同様に内面が磨耗していることから、転用硯の可能性がある。56は第３区第６層から、57は第３区SK-７から出土した。



第23図　遺物実測図 5

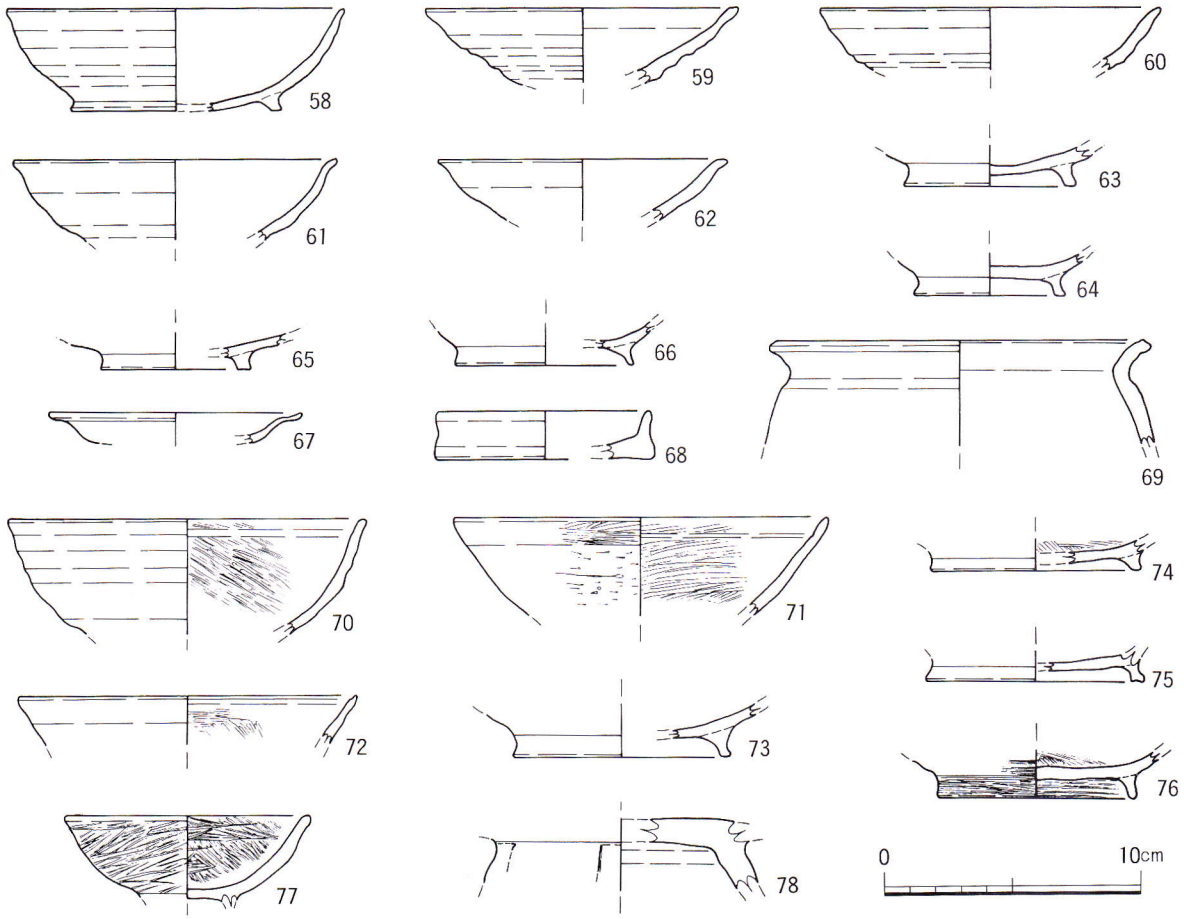
平安時代の土器（第24図、図版23上）

58～69は土師器で、58～66は椀である。58～60はいわゆる「多段ヨコナデ技法」と呼称される成形技法をとるもので、回転台成形による土師器である。58は口径13.4cm、器高4.1cm、底径8.2cm、59は口径12.4cm、60が13.4cmを測る。61は底部際を強くヨコナデするもので、58～60の簡略化が進んだものである。62の体部は凹凸がなく、内湾ぎみに立ち上がり、口縁部をヨコナデによって外反させるものである。63～66は底部で、63～65は逆台形状の高台を有し、66は外側にふんばる細い逆三角形の高台を貼り付ける。67は口径10.0cmを測る皿であり、「て」の字状口縁を呈する。器壁は薄手である。68も皿と考えられ、平らな底部から、直立する口縁部を有する。蓋の可能性もある。69は甕で、口径14.4cmを測る。短く外反する口縁部を有し、端部は面をもつ。これらは赤褐色に発色し、胎土には赤色軟質粒を少量含んでいる。出土位置は、58が第１区Ｐ-66、59～62が第３区Ｐ-155、63が第１区Ｐ-63、64が第１区第６層、65・66は第１区Ｐ-52、67が第３区Ｐ-322、68が第３

区第５ａ層、69が第３区Ｐ−142である。

70〜77は黒色土器で、70〜75はＡ類椀である。70は回転台成形によるもので、口径14.0cmを測る。ヘラミガキは比較的丁寧であるが、炭素の吸着は不十分で、内面のみに限定され、口縁部外面には及ばない。以上の特徴は、典型的な在地産の黒色土器に見られるものである。71は口径14.6cmを測り、体部は外上方に直線的にのびるものである。単位は定かではないが、外面にはヘラ削りを施した後、内面・外面口縁部にヘラミガキを施す。72は口径13.2cmを測り、口縁内端面が沈線状に窪む点が特徴である。71・72は炭素の吸着は良好で、口縁部外面にまで及んでいる。73〜75は底部の破片であり、外側にふんばる逆台形の貼付高台を有し、75の接地面は僅かに窪んでいる。76・77は黒色土器のＢ類椀である。76は底径7.8cmを測り、方形の高い高台を有するもので、全面に燻しがかかる。またヘラミガキも外底面の一部にまで及び、ほぼ全面に施され、直線的なものである。見込み部には平行にミガキが施される。以上の特徴から楠葉産の製品と考えられる。77は口径9.8cmを測る小形の椀である。やや厚手なつくりで、外底面を含め、全面に緻密なヘラミガキが施される。全体に二次焼成を受けている。これらの出土位置は、70・76が第１区Ｐ−53、71が第１区Ｐ−24、72が第１区Ｐ−46、73が第３区第６層、74が第１区Ｐ−35、75が第１区Ｐ−28、77が第１区第２層である。

78は須恵器圏脚円面硯の硯面部で、口縁、脚台下部を欠損する。磨墨面は径９cm前後と考えられるが、丁寧なつくりではない。口縁部直下には方形の透かしがあり、穿孔時のヘラ切りが２ヶ所認められ、その幅は不明であるが、間隔から５ヶ所あったものと推定される。第３区第５a層から出土した。

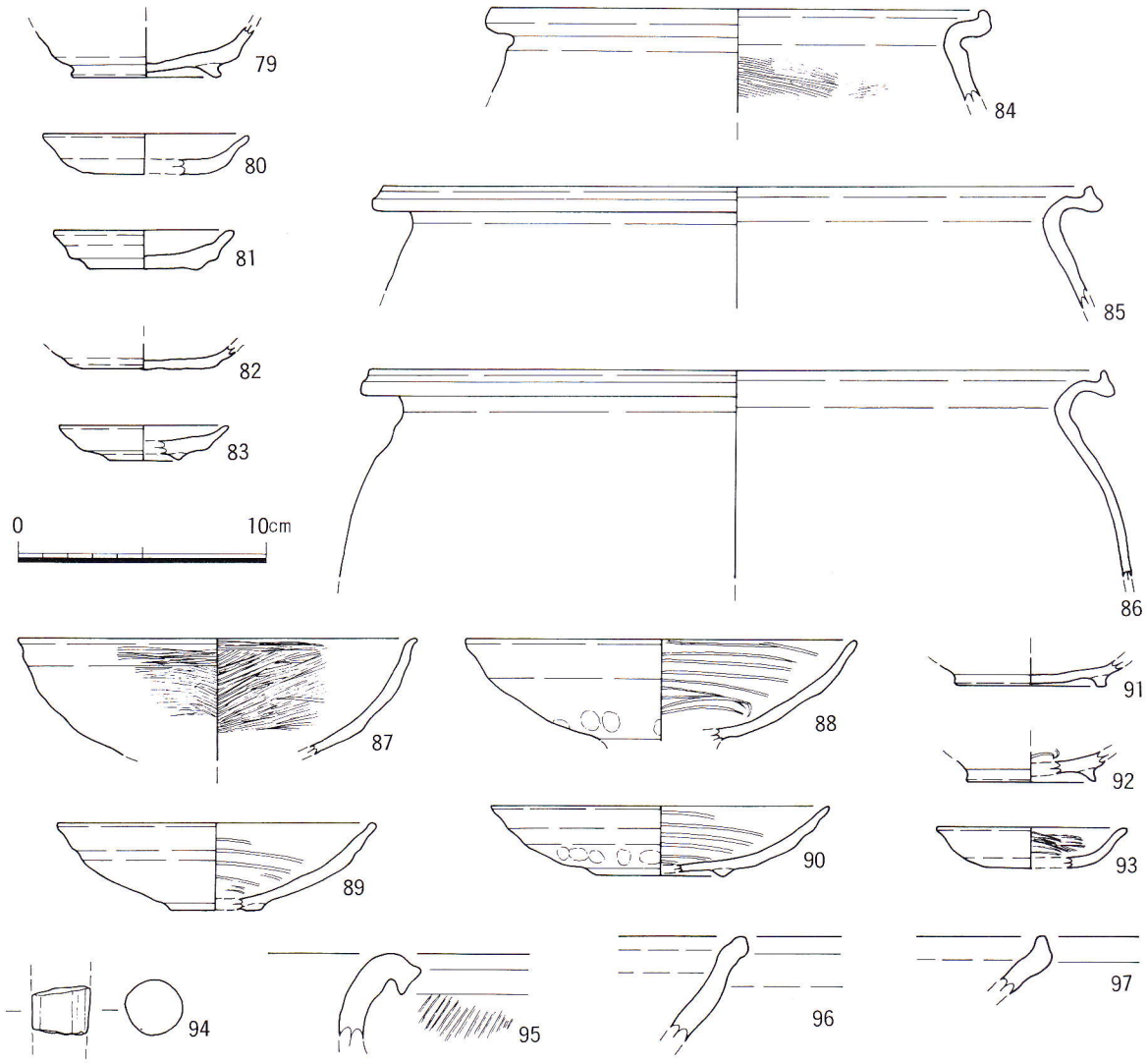


第24図　遺物実測図６

鎌倉時代の土器（第25図、図版23下）

79～86は土師器である。79は底径6.0cmを測る椀であり、外側にふんばる低い貼付高台を有するが、ナデ付けは粗く、全体的に粗雑なつくりである。80～82は皿で、ナデと指押さえによって成形し、口縁部をヨコナデ調整するもので、底部には指圧痕を残している。80は口径8.2cm、器高1.6cm、81は口径7.0cm、器高1.6cmを測る。83も皿であり、断面逆三角形の低い貼付高台を有する。体部下半は水平方向に立ち上がり、屈曲して外反するものである。口径6.8cm、器高1.4cm、底径2.8cmを測る。84～86は釜で、口縁部を大きく外反させ、端部を上方へつまみ上げるものであるが、84はやや厚手で丸みを帯びている。全体をナデによって調整するが、84の内面にはハケによる調整が確認できる。口径は84が20.0cm、85が28.4cm、86が29.4cmである。これらの出土位置は、79がSX－１、80・83が第３区第５ａ層、81が第３区第６層、82が第５区SK-15、84が第３区P－142、85がSD－６、86がSD－７である。

87～93は瓦器である。87～92は椀であり、ナデと指押さえによって成形した後、口縁部をヨコナデ調整するもので、ナデが一段のもの（87、88）、二段にするもの（89、90）がある。87は全面に



第25図　遺物実測図７

細かなヘラミガキが施され、他より先行するものである。口径16.0cmを測る。88～90は口径に比べ、器高が低い形態のものであり、内面には７～９回転の螺旋状暗文が認められる。また89・90の高台は形骸化しており、低く不安定なものである。口径は88が15.6cm、89が口径12.6cm、器高3.5cm、底径3.6cm、90が口径13.6cm、器高2.8cm、底径5.0cmである。91・92は底部で、91は方形の、92は逆三角形の貼付高台を有する。93は皿で、口径7.8cm、器高1.6cmを測る。磨滅のため不明瞭だが、ミガキの他、暗文が確認できる。これらは87・91・93が第３区第３層、88が第３区Ｐ-207、89が第５区Ｐ-268、90が第３区第６層、92が第３区Ｐ-177からの出土である。

94は瓦質土器の足釜で、タテ方向のナデによって調整される。第３区第６層からの出土である。

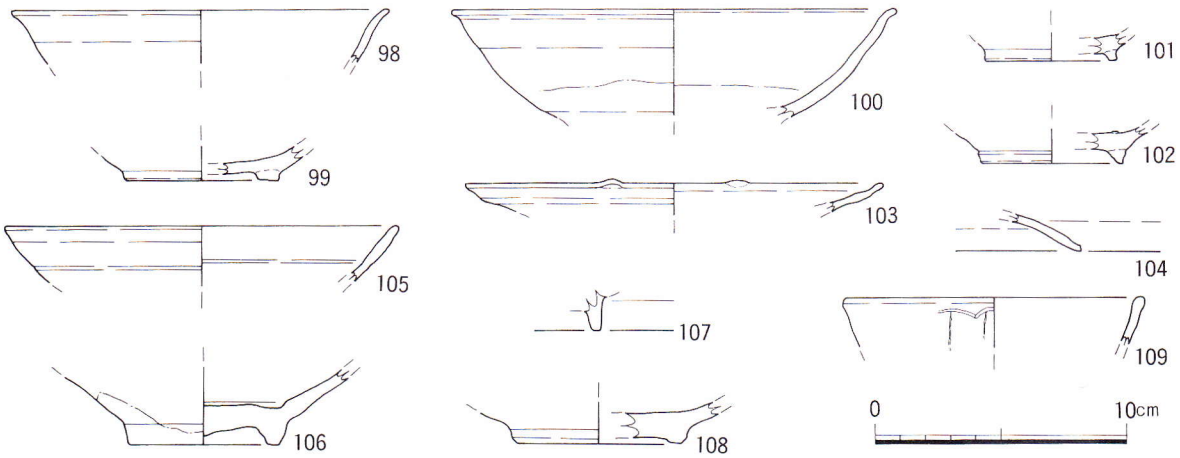
95～97は東播系の須恵器である。95は甕で、外反する口縁部は端部を上・下方に拡張させるものである。叩きによる成形の後、ナデ調整される。96・97はこね鉢である。96の口縁部は外反するが、肥厚しない形態であり、97よりも先行するものである。97の口縁部は肥厚し、端部を上方に拡張させる。これらの出土位置は、95が第３区第６層、96・97が第３区第５ａ層である。

（２）緑釉・灰釉陶器、輸入陶磁器（第26図、図版24上）

緑釉陶器は４点出土しているが、全て椀である。98は口径14.8cmを測り、口縁端部を短く外反させる。焼成は硬質であり、釉は薄く、緑灰色を呈する。畿内産と考えられる。99は底径6.0cmを測り、底部を糸切りで切り離した後、方形の低い高台が貼付けられる。軟質焼成で淡黄褐色を呈し、下部は橙色を呈する。施釉にあたってはトチンを使用し、全面に薄く施釉されているが、釉の剝落が著しい。釉は淡緑色を呈し、また濃緑色の粒斑が認められる。以上の特徴から防長産と考えられる。出土位置は、98が第３区第６層、99が第３区第５ａ層である。

灰釉陶器は10点出土している。100～102は椀で、100は口径17.4cmを測り、ゆるやかに立ち上がる体部に短く外反する口縁部を有する。体部は回転ナデによって仕上げられ、釉は刷毛塗りによって薄く施釉される。101は断面方形の、102は三角高台を有するもので、102は内面全面に施釉され、また重ね焼き時の釉着痕がみられる。103は口径16.4cmを測る皿で、口縁端部には輪花を意図した指圧痕が確認できる。104は蓋で、回転ナデにより仕上げられる。これらは、100が第１区Ｐ-48、101・103が第３区第６層、102が第５区第５ａ層、104が第３区Ｐ-168からの出土である。

中国製白磁は12点出土しており、碗と皿がある。105～108は碗である。105は口径15.4cmを測る



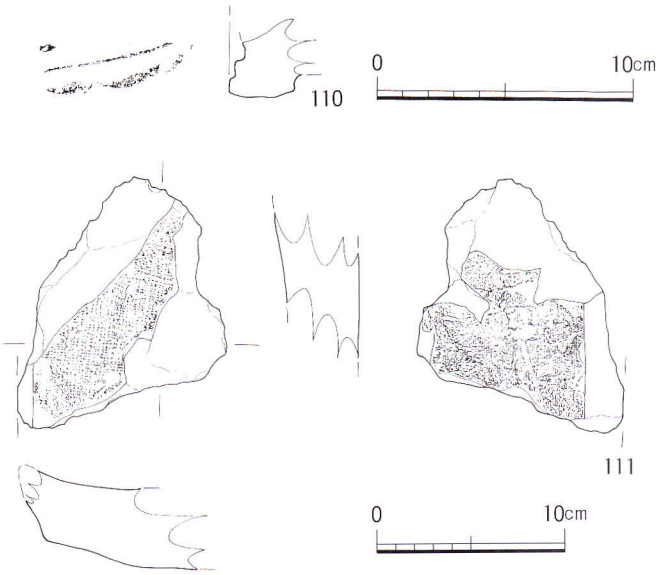
第26図　遺物実測図８

もので、内外面口縁部下に一条の沈線が認められる。また釉はくすんだ乳白色に発色する。106は底径6.0cmを測るもので、断面方形の厚い高台を削り出し、内底面見込み部には明瞭な段がつく。釉は厚く施釉され、高台付近まで垂下しており、内底面見込み部は輪状にカキ取られる。107は直立した高い削り出し高台を有する。108も低い高台を削り出すが、削り出しが浅いため、底部の器壁は厚い。釉は内面のみに施釉され、黄色を帯びた白色を呈し、釉全体に貫入がみられる。これらの出土位置は、105が第３区第３層、106が第３区第６層、107が第３区第５ａ層、108が第２区SD-１である。

中国製青磁は４点出土している。109は室町時代後期の青磁の碗である。口径11.8cmを測り、ヘラ先による細線の線描蓮弁文をもつ。釉は薄く施釉され、くすんだ灰緑色を呈する。第５区第３層から出土した。

（３）瓦（第27図、図版24下）

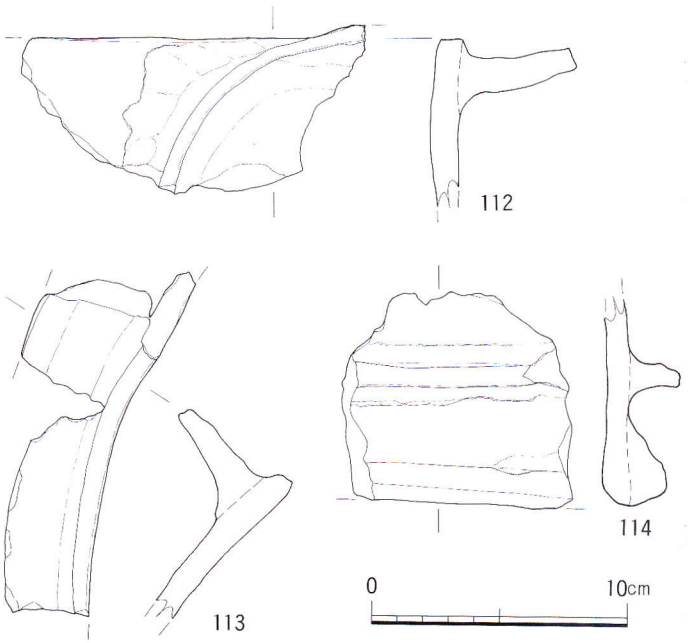
古代～中世の瓦と考えられるものは、軒平瓦１点、丸瓦１点、平瓦が10点出土した。110は軒平瓦の瓦当部である。周縁から段状をなして文様区にいたる、特異な形態を呈するものである。瓦当下部から顎裏面にかけては板状工具によるナデ調整が行われる。111は厚さ約4.0cmを測る厚手の平瓦であり、狭端部付近の破片であると考えられる。凹面は布目痕が、凸面は板状工具による削り痕が確認できる。110は第５区第５ａ層、111は第５区SK-15から出土した。



第27図　遺物実測図９

（４）竈（第28図、図版25上）

112は庇正面付近の破片で、庇は上方へせり出している。113は焚き口部分の破片であり、焚き口はほぼ垂直に切り取られ、アーチ形を呈するものと思われる。113と同様に庇は上方へせり出している。114は底部の破片で、底部から高さ４cmの所には鍔が水平に取り付くものと考えられる。また底部端には粘土を補充しており、全体の安定を測ったものと考えられる。これらは指頭による押圧・ナデによって庇・鍔を貼付け

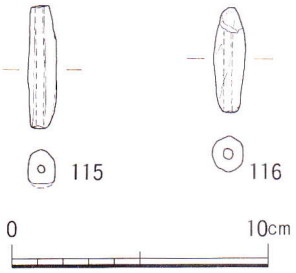


第28図　遺物実測図10

るが、丁寧なものではない。また112・114は胎土・焼成が共通することから、同一個体の可能性がある。これらの出土位置は、112・113がP-53、114がP-54である。以上の竈はP-53とその南隣からの一括資料であり、共伴遺物から10世紀中頃～後半の年代が与えられる。

（5）土錘（第29図）

115・116は土錘である。ともに円筒形を呈する管状土錘で、棒状のものに粘土を巻き付けて製作したものと考えられる。115は長さ4.8cm、厚さ1.0～1.2cm、孔径0.3cmを測り、重量は7.6ｇである。116は長さ4.2cm、厚さ1.2cm、孔径0.4cmを測り、重量は5.4ｇである。また116には部分的に黒斑がみられる。出土位置は115が第3区第5ａ層、116が第3区第6層である。

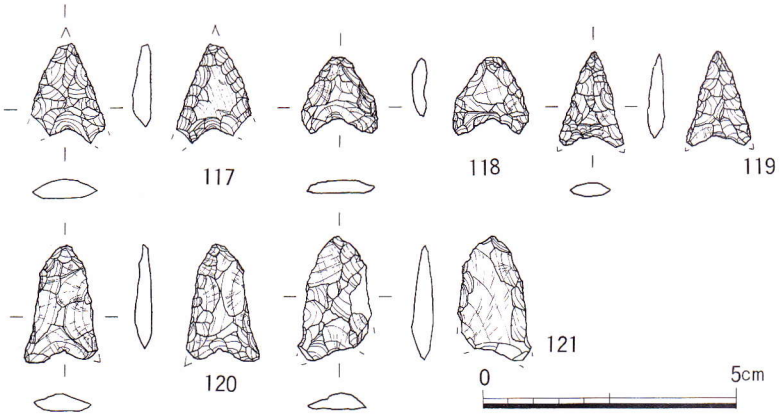


第29図　遺物実測図11

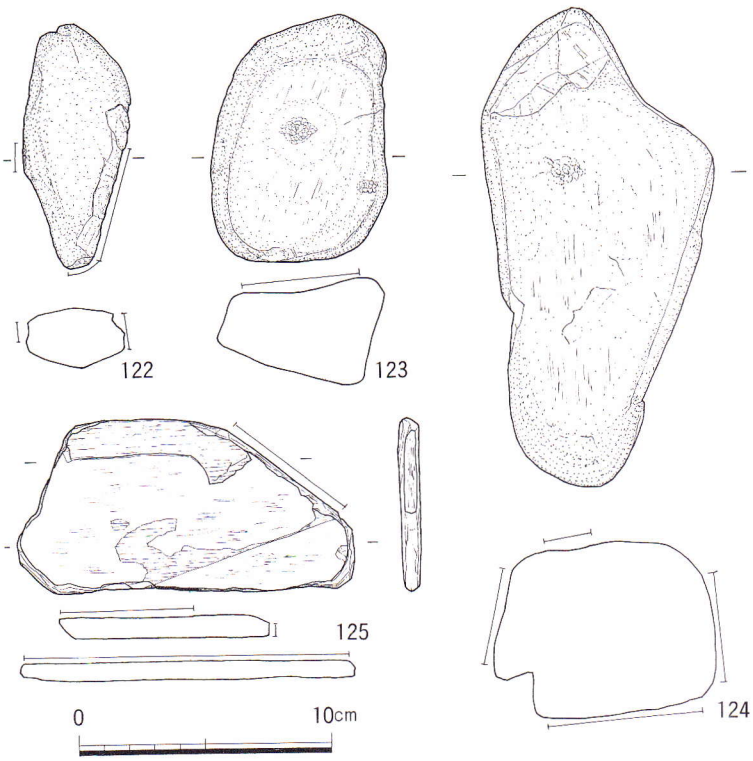
（6）石器（第30・31図、図版25・26）

石器では石鏃、叩石、台石、砥石などが出土した。

117～121は凹基式の打製石鏃である。117はチャート製で色調は淡灰色を呈する。先端部から基部に向けて丁寧な細部調整が施される。残存長2.0cm、幅1.5cm、厚さ3.5㎜を測る。118～121はサヌカイトを石材に用いるものである。118は全長1.5cm、幅1.5cm、厚さ3㎜を測るもので、幅と比較して鏃身が短い。色調は淡灰色を呈しており、全体的に風化が著しい。119は調整剝離を全面に施すものである。長さ1.9cm、幅1.3cm、厚さ3㎜を測る。120の調整順序は先端部から基部だが、一定ではない。全長2.4cm、幅1.4cm、厚さ3.5㎜を測る。121は右面に大剝離面を残すもので、左面には先端部から基部に向けて細部調整が施される。残存長2.5cm、幅1.4cm、厚さ4㎜



第30図　遺物実測図12



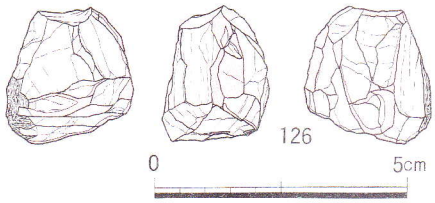
第31図　遺物実測図13

を測る。以上の石鏃の重量は、117からそれぞれ0.9ｇ、0.5ｇ、0.5ｇ、0.9ｇ、1.3ｇを量る。なお遺物の出土位置は、117は第３区第5a層、118はSK−１、119・121は第３区第６層、120は第１区第６層である。

122〜125は礫石器である。122は砂岩を用いた叩石で、下端部及び側縁部に敲打痕を残すものである。色調は火を受けたため淡黄褐色に変色している。法量は長さ12.9cm、幅5.6cm、厚さ3.6cmを測り、重量は260ｇである。123は台石である。中央部にはわずかに敲打痕が認められる。石材は砂岩であり、火を受けたため暗赤褐色に変色している。また全体は平滑であるが、磨痕は明確でなく、砥石としての使用頻度は低いとみられる。法量は全長13cm、幅9.3cm、厚さ5.6cm、重量は820ｇを測る。124は大型の台石で、法量は全長25.3cm、幅12cm、厚さ9.4cm、重量は3.36kgを測る。平坦面の一部には敲打による凹みがみられ、全体はやや平滑になっている。125は結晶片岩を用いた板状の砥石である。法量は全長17.8cm、幅9.2cm、厚さ1.1cm、重量は310ｇを測る。片面及び側面の一部を研磨に使用しており、使用面は光沢を持つ。なお遺物の出土位置は、122・123はSB−１、124・125はSB−２である。

（７）石製品（第32図）

石製品には石英製の火打石（126）がある。法量は全長2.6cm、幅2.5cm、厚さ2.1cmを測り、重量は15.6ｇである。石材の稜線は火打金との打撃により細かくつぶれており、また一部には石英に付随して形成された結晶片岩がみられる。第５区第４層から出土した。



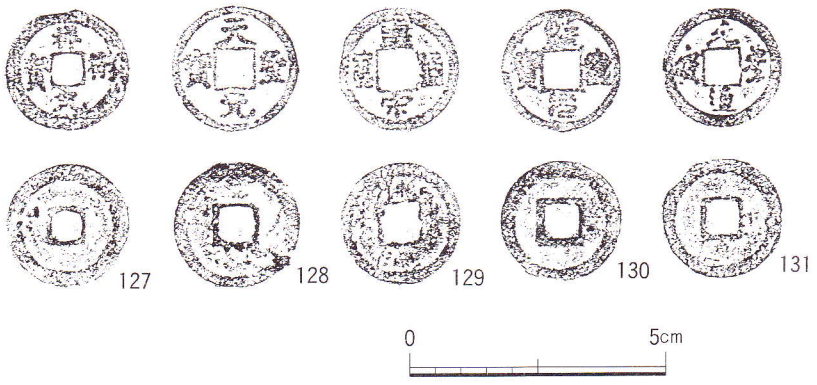
第32図　遺物実測図14

（８）金属製品（第33図、図版26）

金属製品では銭貨（127〜131）、鉄製刀子、鉄製鏃などが出土した。

銭貨は全てSK−10から出土した銅製の中国銭であり、土坑から15点以上出土したものの内、完形の５点を示した。銭種は127から131の順に「祥符元寶」、「天聖元寶」、「皇宋通寶」、「熙寧元寶」、「元豊通寶」であり、初鋳年はそれぞれ、西暦1009年、1023年、1038年、1068年、1078年である。直径は128が2.6cm、127・129が2.5cm、130・131が2.4cmを測り、厚さは128・130・131が1.5㎜、127・129が1.0㎜を測るものである。重量は127から131の順に3.2ｇ、2.0ｇ、1.9ｇ、2.2ｇ、2.7ｇを量る。

鉄製刀子と鉄製鏃はそれぞれ、P−85、P−180から出土したものである。



第33図　遺物実測図15

7．まとめ

高井遺跡は『和歌山市埋蔵文化財包蔵地所在地図』に縄文時代の遺物散布地と記載されているが、平成２年に本財団が遺跡の北西部で行った第１次調査で古墳時代と考えられる土坑１基や掘立柱建物を構成すると考えられる平安時代以前とみられるピット群などを検出し、当該期にも遺構・遺物の存在することを確認した。その後、遺跡南西端部にあたる直川1235-1番地の民家の庭から古墳時代後期の遺物が出土した。

高井遺跡の南西部を調査した今回の第２次調査では古墳時代の竪穴住居２棟、平安時代の掘立柱建物８棟分以上・ピット群、鎌倉時代の掘立柱建物１棟分以上・ピット群・集石遺構２基・土葬墓１基などを検出し、古墳時代の集落、平安時代の集落、鎌倉時代の集落・墓域が展開することを明らかにすることができた。また、遺物としては弥生土器、土師器、製塩土器、須恵器、黒色土器、瓦器、緑釉・灰釉陶器、中国製白磁・青磁、瓦、竈、土錘、銭貨、石鏃、叩石、台石、砥石、火打石など縄文時代から江戸時代までの遺物が出土しており、遺構・遺物の多寡など性格の不明な時期もあるが遺跡全体としては継続して営まれたものと考えられる。

なお、これらの調査成果のうち、新たな知見である古墳時代の竪穴住居についてと平安・鎌倉時代の高井遺跡の状況について項目を設け、それぞれまとめることとする。

（１）高井遺跡検出の竪穴住居について

今回の調査において検出した２棟の古墳時代の竪穴住居について、周辺の遺跡を踏まえてまとめてみる。

まず第３区で検出した古墳時代前期の竪穴住居SB-１は、検出した範囲では北壁にのみベッド状遺構をもつものであり、住居床面の中央部には、不定形の浅い落ち込み状の炉をもつものである。また南壁際の調査区東壁直下には隅円方形状の貯蔵穴とみられる土坑をもつ。このような古墳時代前期の竪穴住居は、東約800mの地点に位置する府中Ⅳ遺跡において多数検出されている。この府中Ⅳ遺跡は、和歌山平野を一望できる和泉山脈最南端の舌状台地に立地するもので、当遺跡と同じ立地条件にあり、谷部を挟んだ隣接する集落といえる。この遺跡において検出されている竪穴住居のなかで、古墳時代前期に比定できる平面形が方形の住居は20棟（建て替え及び拡張を含めている）であるが、SB-１に類似する炉・ベッド状遺構という共通点をもつ住居は２棟である。この調査成果から、府中Ⅳ遺跡検出の竪穴住居の一般的な規模及び構造は一辺５m前後のほぼ正方形で４本の主柱をもち、中央に炉を配するものである。また炉の変遷は、時期が下るにつれ浅くなり、そのプランも不明瞭となる傾向にある。ベッド状遺構では、古墳時代前期前葉のものとして、一辺が8.6mを測る和歌山県内では最大級の平面規模の方形住居があり、この例は南東隅のコーナー部に単体のベッド状遺構をもつ特殊な住居である。また古墳時代前期中葉の例には、南側の入り口部を除くすべての壁際にベッド状遺構をもつものがある。

高井遺跡検出のSB-１は、出土遺物から古墳時代前期後半のものとみられ、府中Ⅳ遺跡検出の住居に後出するものであり、炉の形態からも比較的新しい要素をもつものと考えられる。またベッド状遺構では、少なくとも前期後半まで残存する施設として確認できたものといえる。

次に、第４区のほぼ中央部において検出したSB-２は、出土した遺物から古墳時代中期後半のも

のである。周辺地域では、南東約１kmの和歌山平野上に立地する田屋遺跡において５世紀の中頃から６世紀の前半にかけての43棟の竪穴住居が検出されている。これらの竪穴住居には明確な作り付けのカマドがほとんどのものにみられる。これらのカマドが作られた位置は、西側壁を除く東及び南北壁にあり、特に東及び北壁に多く作られている。当遺跡検出のSB－２は、確実に東壁には存在せず、調査区西壁に検出した焼土と、田屋遺跡と同じ背後に和泉山脈を構える立地条件から、おそらく北壁に作られている可能性が高いものと考えられる。

今回の調査では、古墳時代の竪穴住居は２棟のみの検出であったが、第５区西端で検出したP－308から古墳時代中期とみられる土師器の高杯・甕や製塩土器が出土しており、削平された竪穴住居の貯蔵穴の可能性がある遺構と考えられ、さらに第４区西隣接地である直川1235－1番地から６世紀前半頃の土器が採集され、聞き取り調査などから同地点には竪穴住居が存在する可能性が非常に高いものと考えられる。このことから、当遺跡は古墳時代前期から後期まで継続する集落跡であり、その広がりは、西側の谷部により形成され、南側に張り出した第４区周辺の舌状台地端部に始まり、その端部周辺を北東側に向け、延びるものと推定できる。

【参考文献】
『府中Ⅳ遺跡第２次発掘調査概報』　（財）和歌山市文化体育振興事業団　1996年
第32回埋蔵文化財研究集会資料　『古墳時代の竈を考える』　（財）和歌山県文化財センター　1992年

（２）平安・鎌倉時代の高井遺跡

今回の調査において重要な成果として平安時代と鎌倉時代の遺構・遺物がある。それぞれについて、概略をまとめることとする。

まず、平安時代の遺構について、検出したピット群から少なくとも掘立柱建物８棟を復原することができた。遺物については、土師器・須恵器・黒色土器の他、緑釉・灰釉陶器、中国製白磁、瓦、竈などが出土した。瓦は少量の出土であるが、検出した掘立柱建物のなかには柱穴のホリカタが一辺約60cmを測る平面形隅円方形（SH－２）のものや直径約80cmを測る楕円形（SH－８）のものも含まれ、瓦を葺いた建物も混在した可能性が考えられる。また、中国製白磁、緑釉・灰釉陶器及び黒色土器の一部は他地域からの搬入品とみられることや、圏脚円面硯の存在、少量の出土ではあるが奈良時代の須恵器杯蓋に転用硯がみられること、高井遺跡の周辺に南海道のルートが復原されていることなどから、当地に展開していた平安時代の集落が近隣に存在する紀伊国府や直川廃寺跡などと関係の深かったことを示唆するものであるといえよう。

次に、鎌倉時代の遺構について、検出したピット群から掘立柱建物を１棟復原することができた。この掘立柱建物（SH－９）は主軸を真北に対してN－６°－Wの方向性をとるものであり、先行する平安時代の掘立柱建物（SH－６）と一致するものである。このことから、鎌倉時代の集落について、平安時代から継続して展開していたものと考えられる。また、北宋銭が15枚以上出土した土葬墓（SK－10）や上面に火を受けた集石遺構（SX－１・SK－15）の存在から、高井遺跡の鎌倉時代集落は丘陵裾の集落縁辺部に墓域を形成していたものと考えられよう。

以上、平安時代の集落、鎌倉時代の集落・墓域が展開することを今回の調査で明らかにすることができた。

報告書抄録

ふりがな	たかいいせきだい2じはっくつちょうさがいほう
書名	高井遺跡 第2次発掘調査概報
副書名	
巻次	
シリーズ名	和歌山市文化体育振興事業団調査報告書
シリーズ番号	第23集
編著者名	北野隆亮・井馬好英・川口修実・高橋方紀
編集機関	財団法人 和歌山市文化体育振興事業団
所在地	〒640-8227 和歌山県和歌山市西汀丁29 TEL073－435－1195
発行年月日	西暦 2000年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
高井遺跡 (たかいいせき)	和歌山県 (わかやまけん) 和歌山市 (わかやまし) 直川 (のうがわ)	3020150	91	34° 15′ 35″	135° 13′ 9″	19990805 19991030	600	小学校 プール 建設

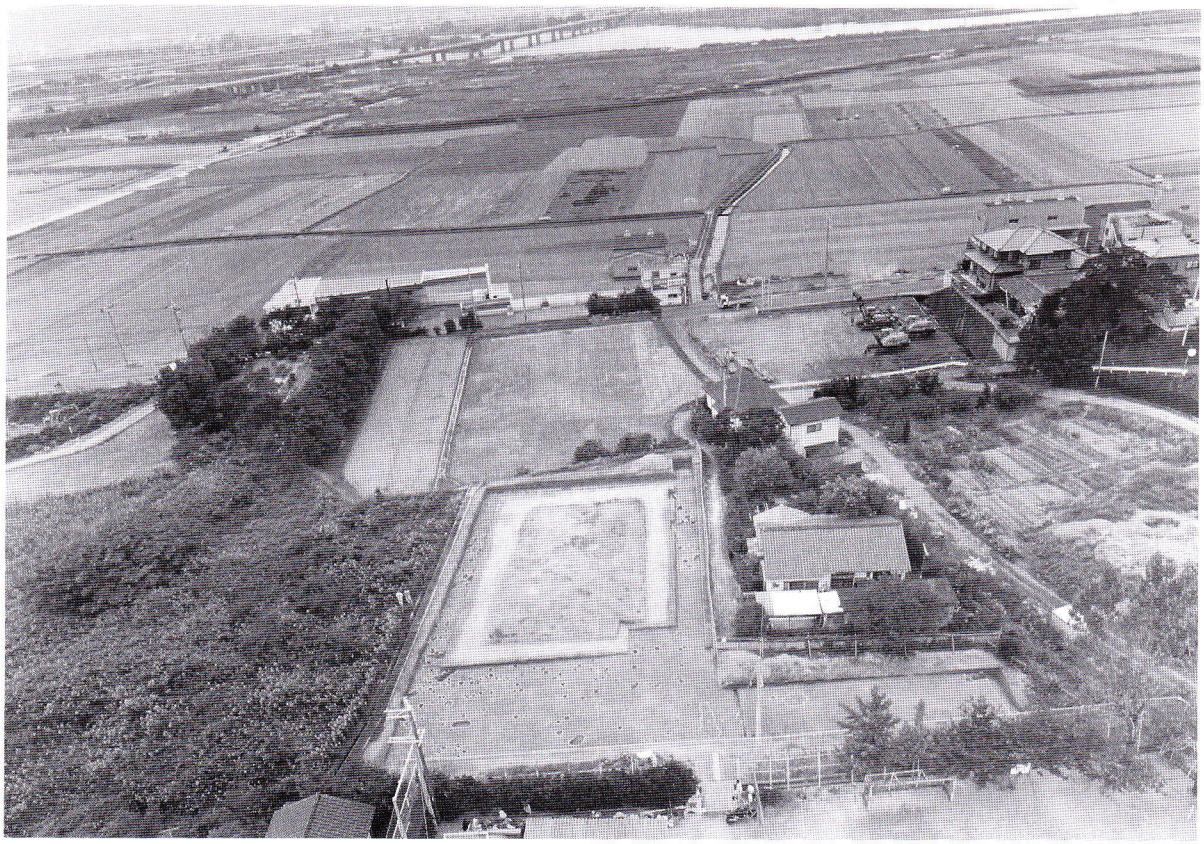
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高井遺跡	散布地	古墳時代 平安時代 鎌倉時代	竪穴住居 掘立柱建物 集石遺構・土葬墓	石鏃・土師器・須恵器 緑釉陶器・灰釉陶器 陶硯・輸入陶磁器 黒色土器・瓦器	古墳時代集落 平安時代集落 鎌倉時代集落・墓域

図　　版

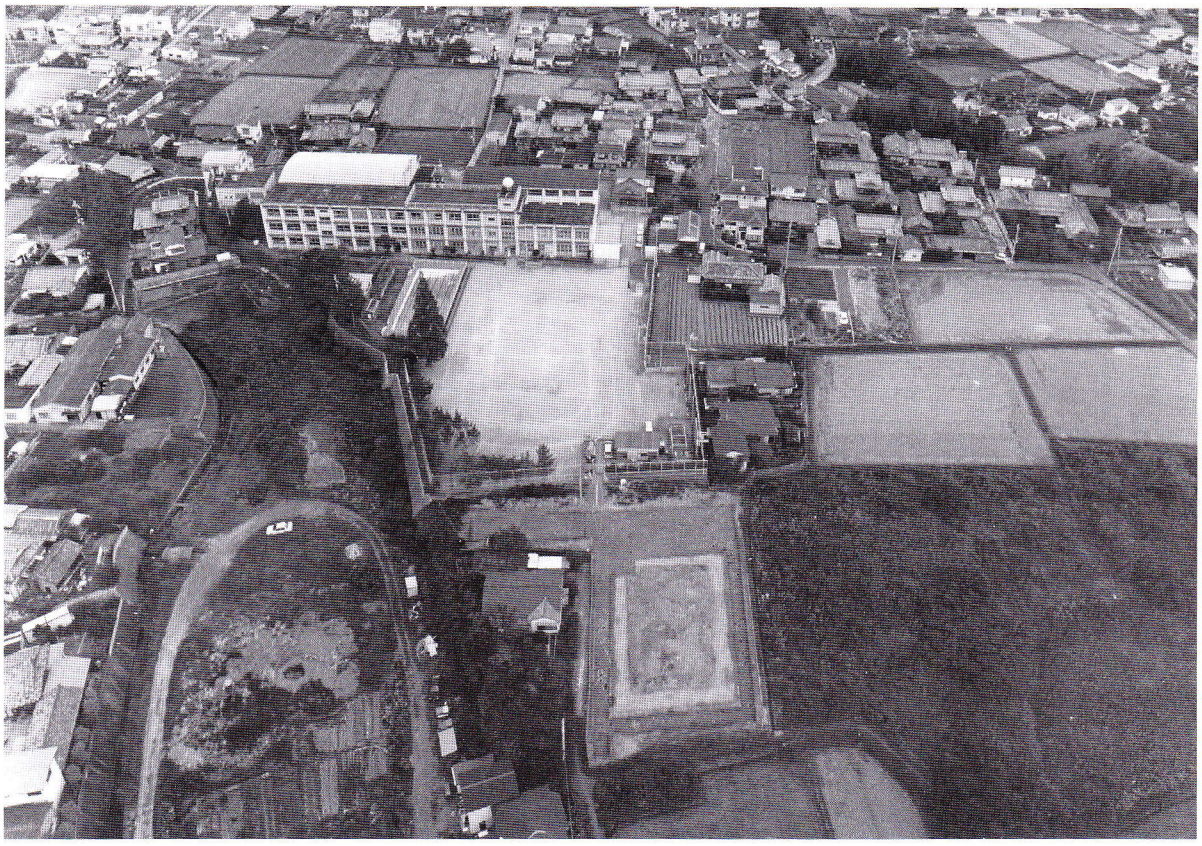
調査地遠景（南から）

調査前の状況（南東から）

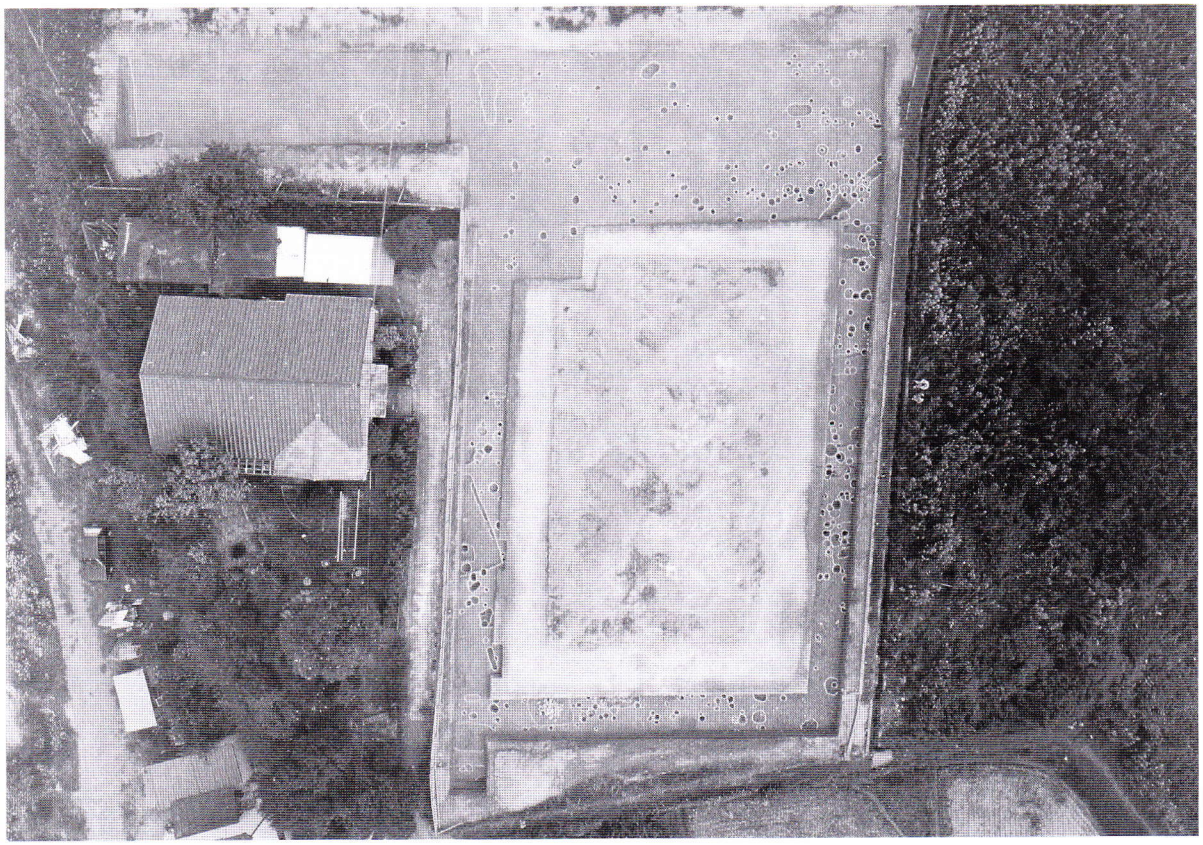
図版2



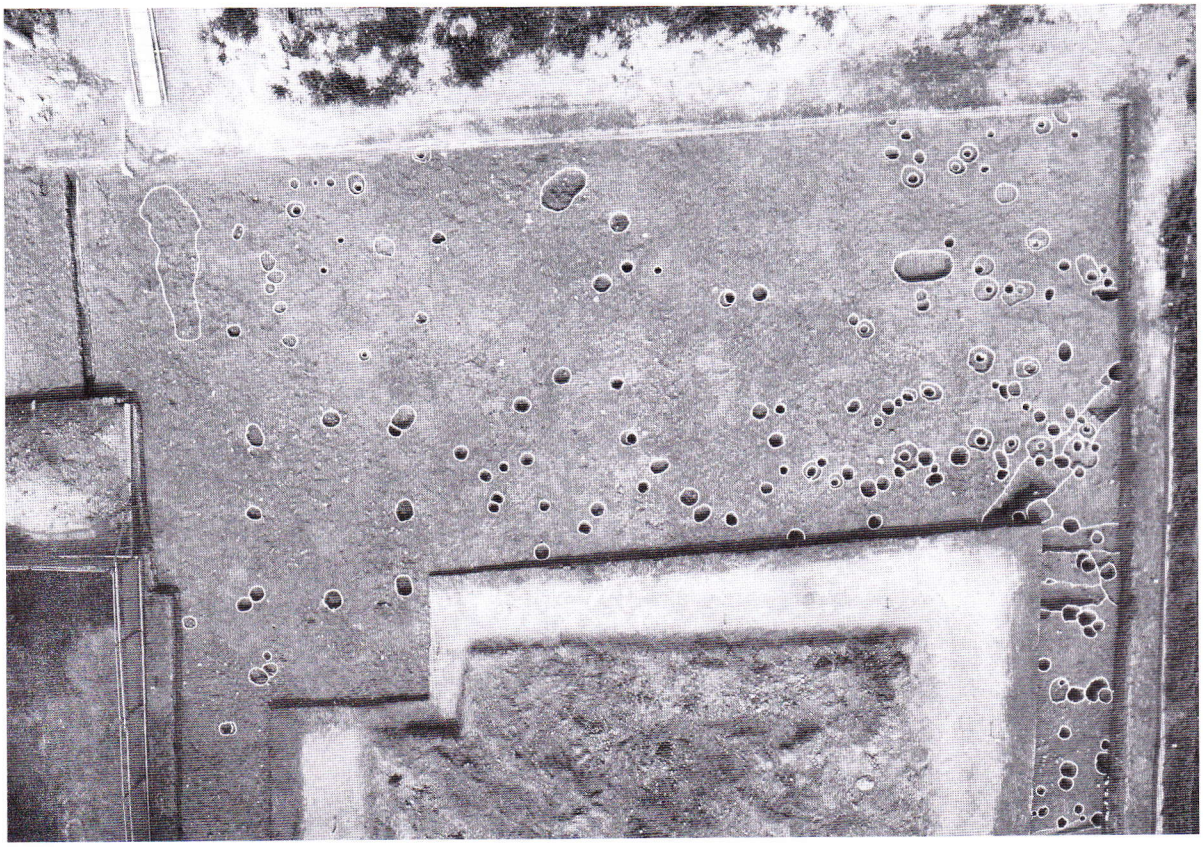
調査地近景（北から）



調査地近景（南から）

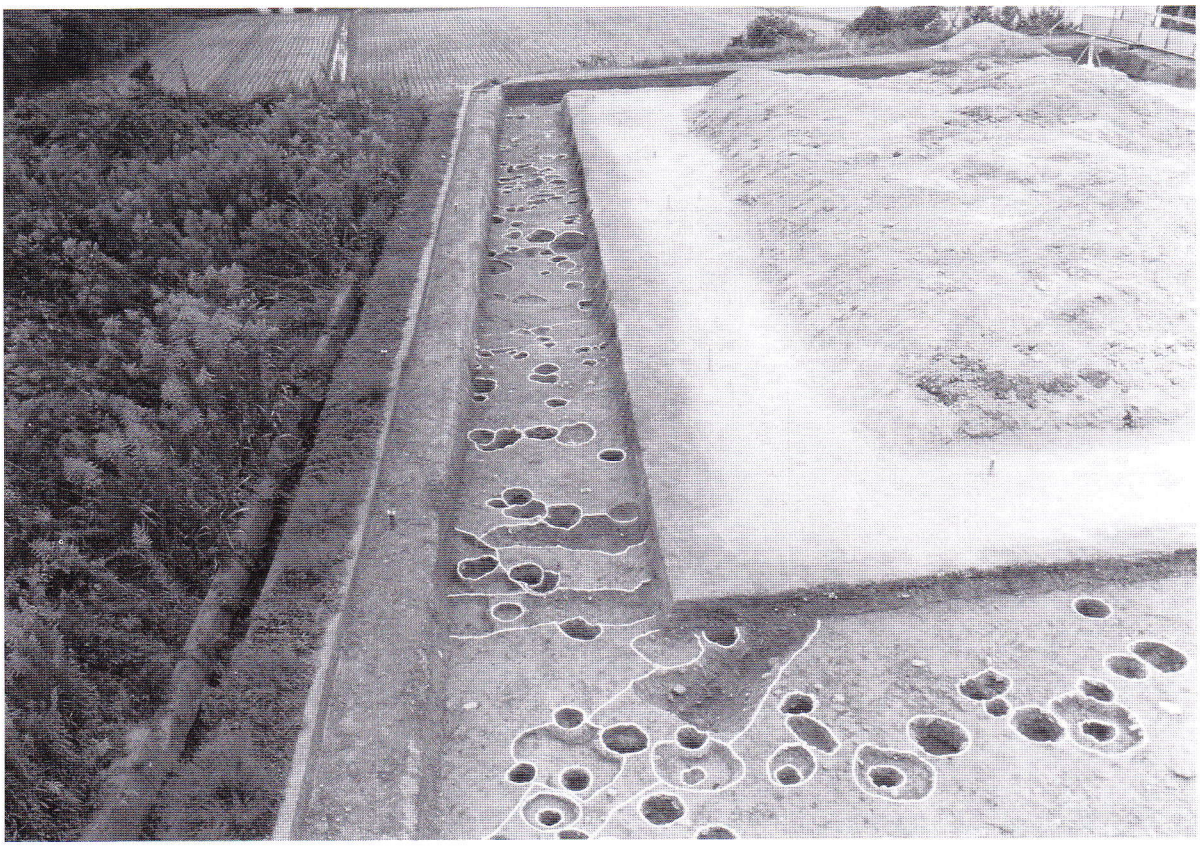


全景（上が北）

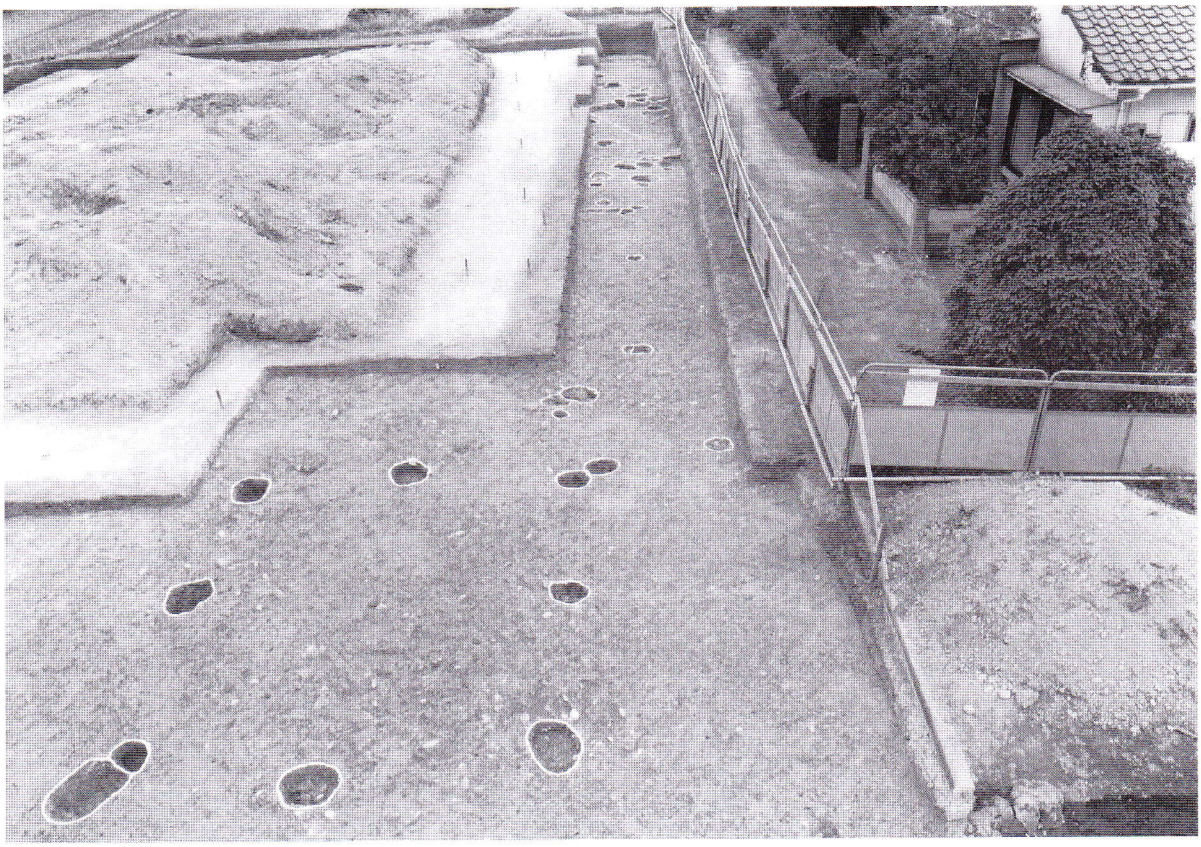


第1区全景（上が北）

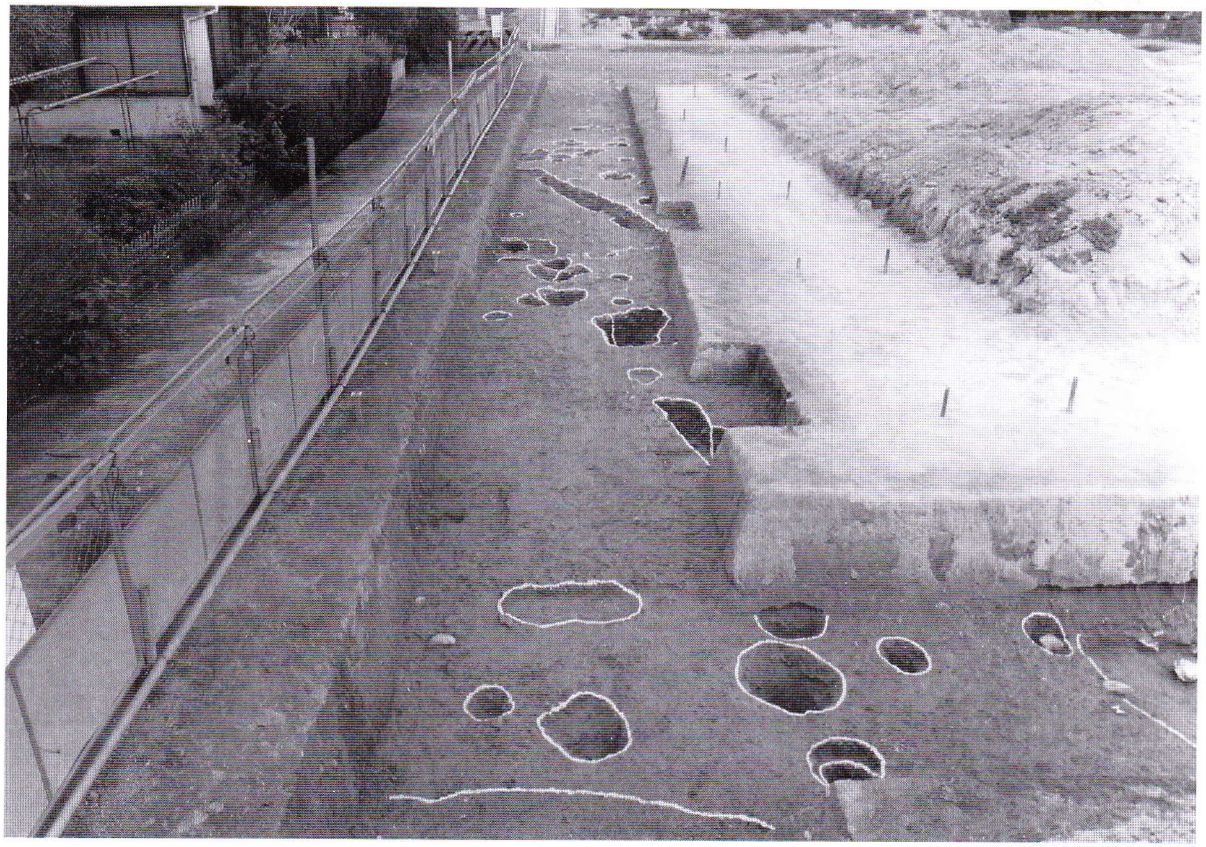
図版4



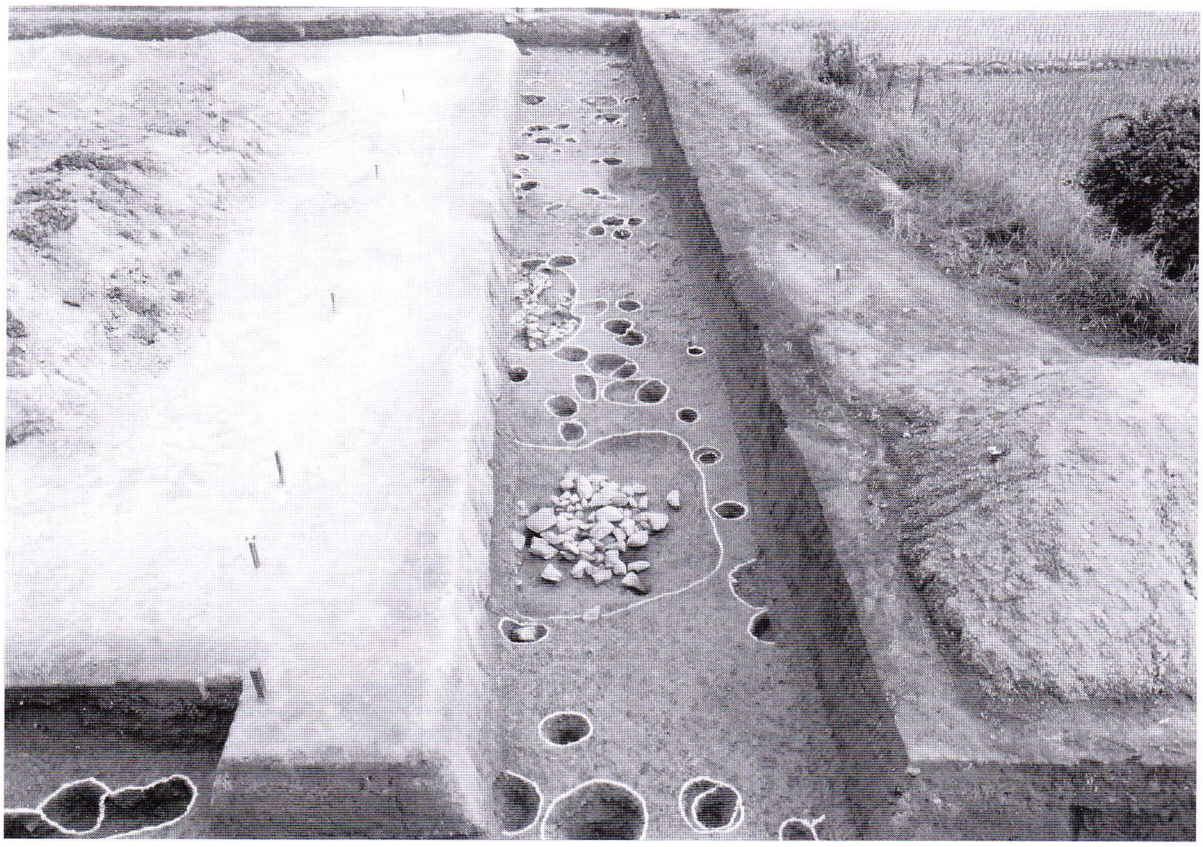
第3区全景（北から）



第4区全景（北から）

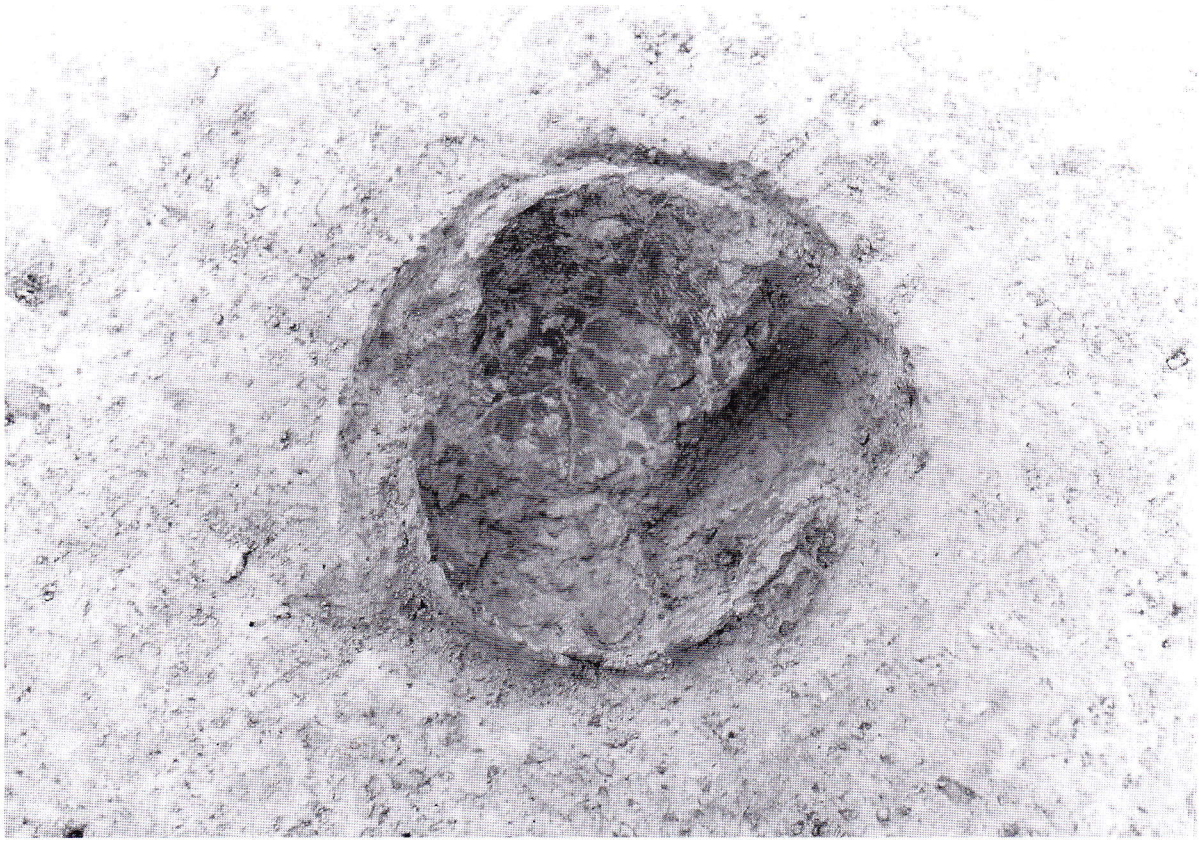


第4区全景（南から）

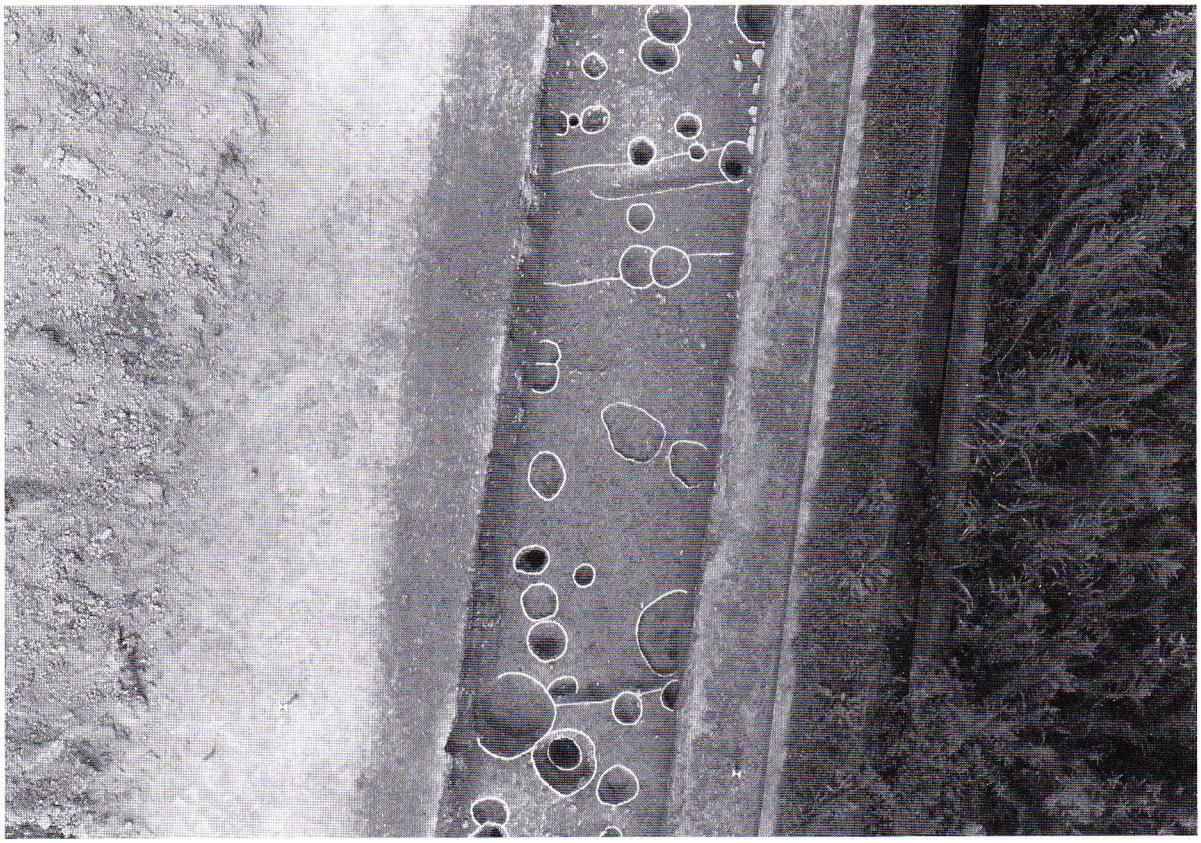


第5区全景（西から）

図版6



第1区　P-72（下が北）



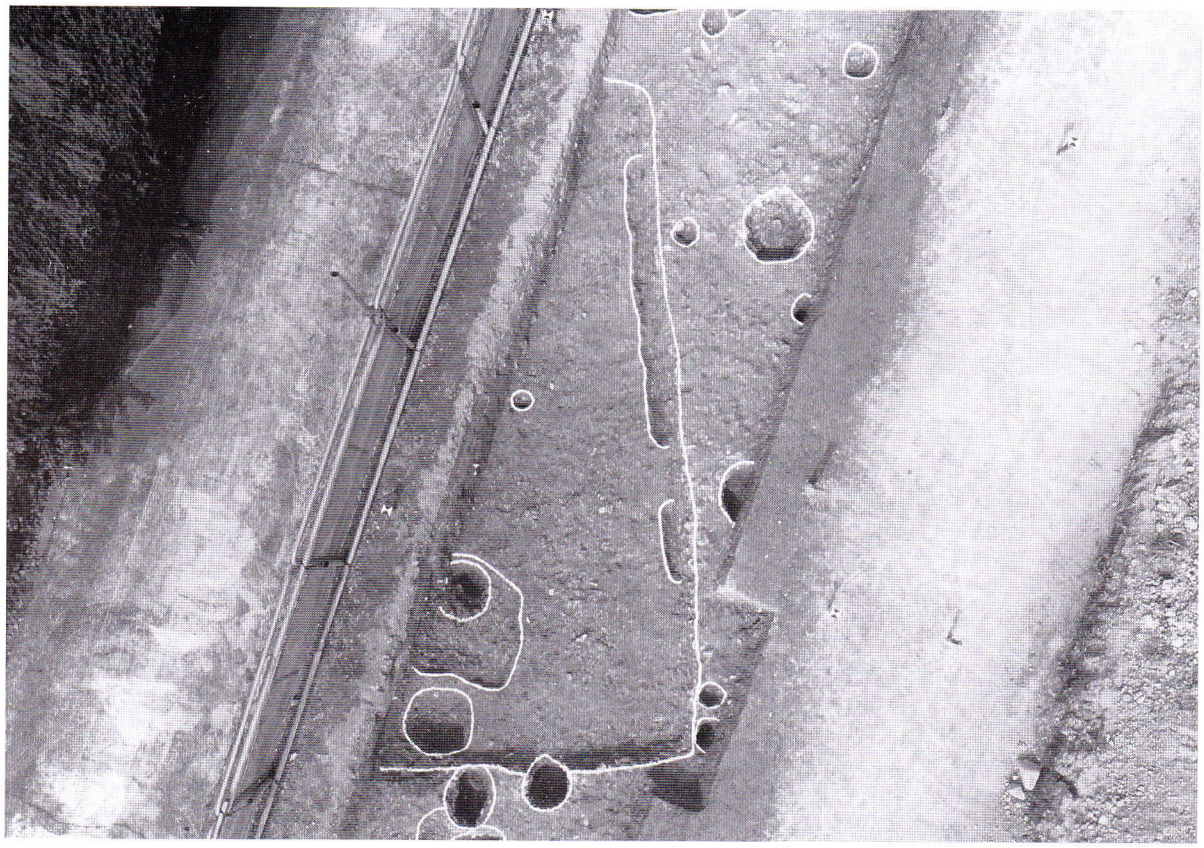
第3区　SB-1（上が北）

第3区　SB-1（西から）

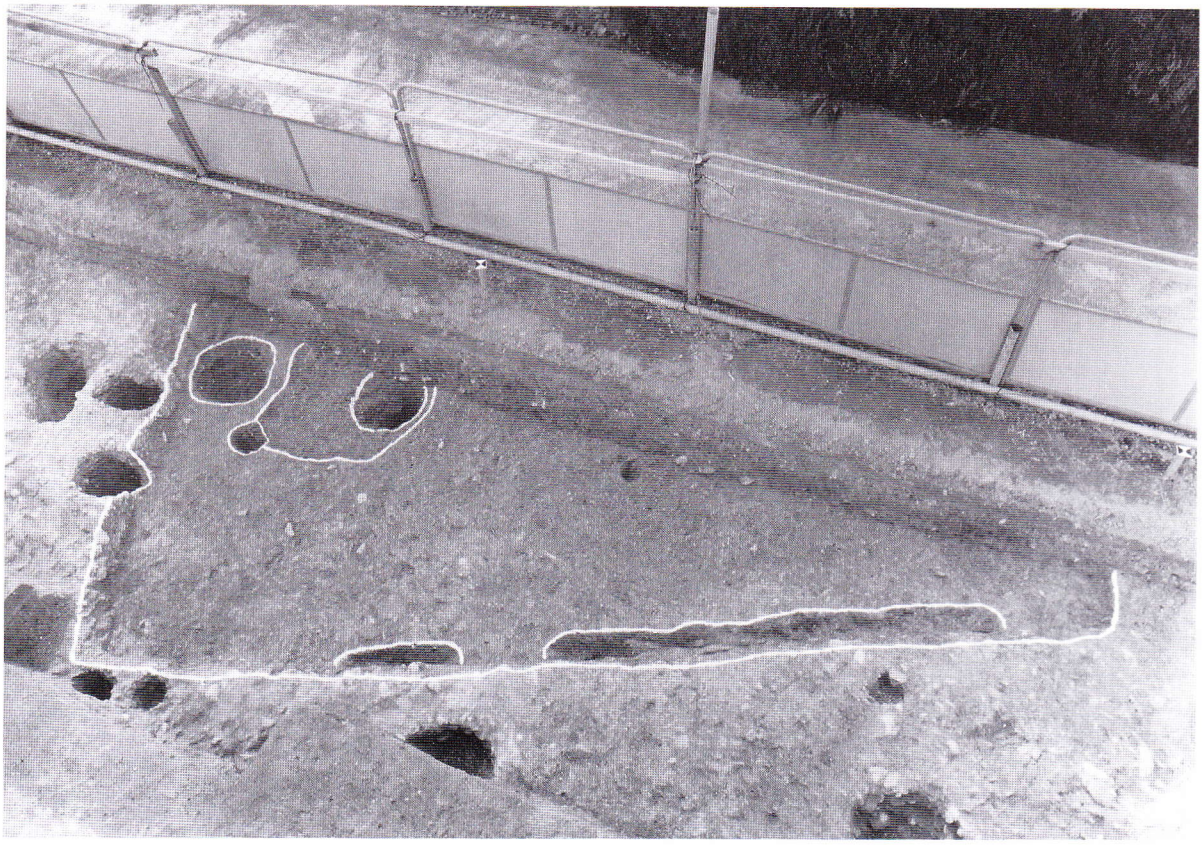
第3区　SB-1土層堆積状況（北東から）

第3区　SB-1遺物出土状況（北から）

第3区　SB-1遺物出土状況（南東から）



第4区　SB-2（上が北）

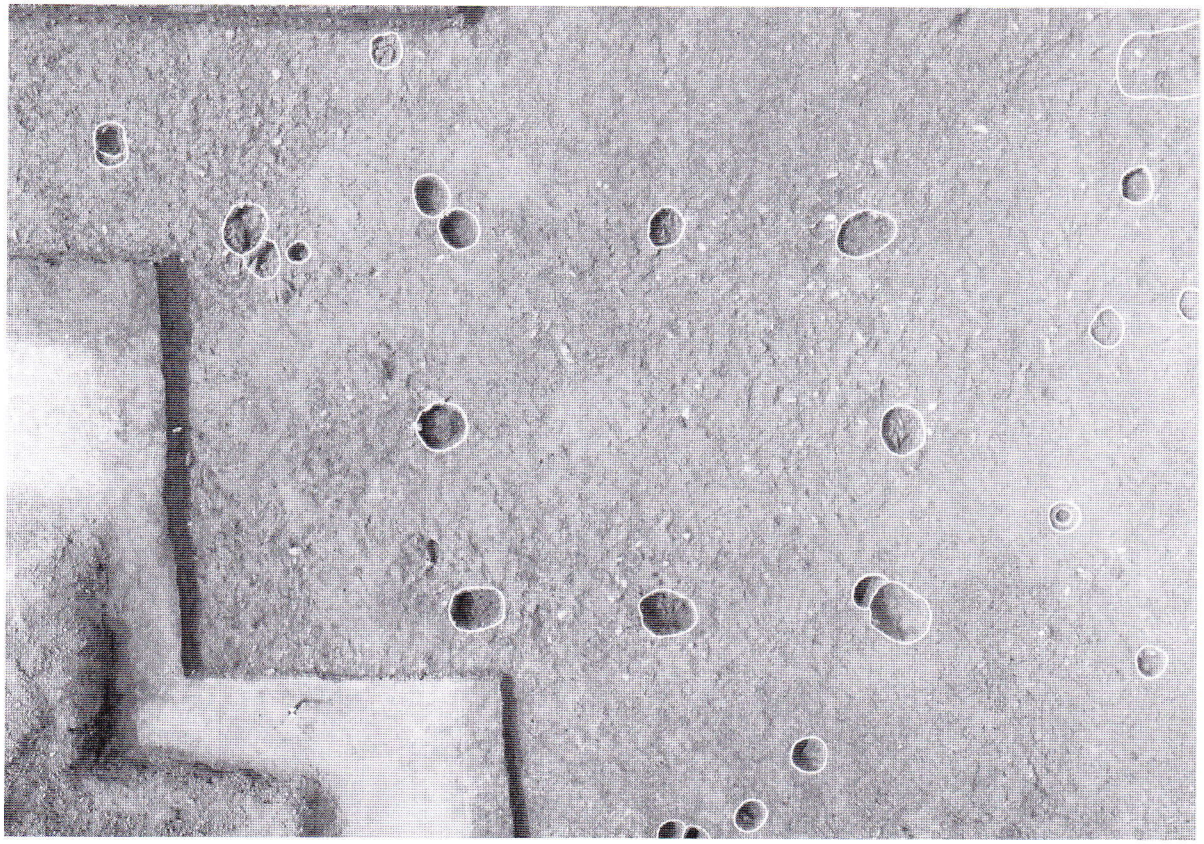


第4区　SB-2（東から）

図版10

第４区　SB-2土層堆積状況（東から）

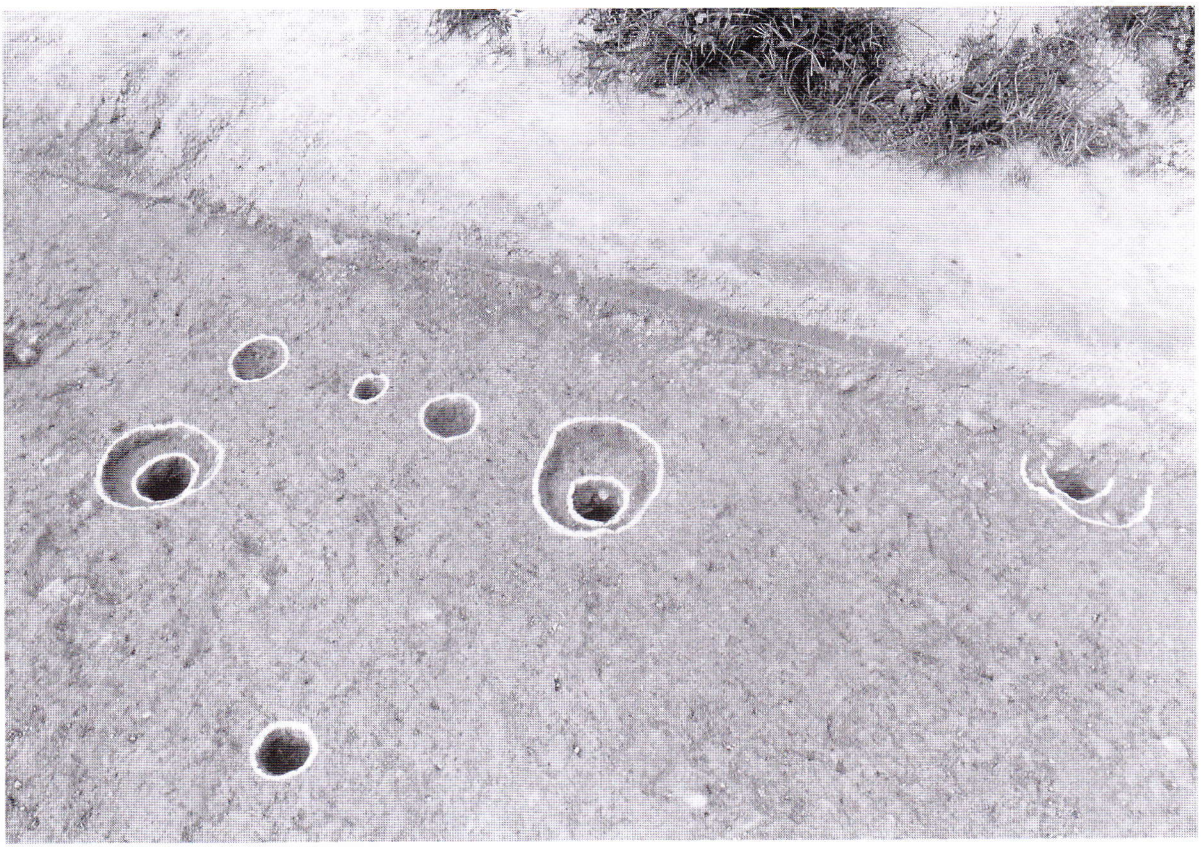
第４区　SB-2遺物出土状況（南から）



第1区　SH-1（右が北）

第1区　SH-1（北から）

図版12



第1区　SH-4（南から）

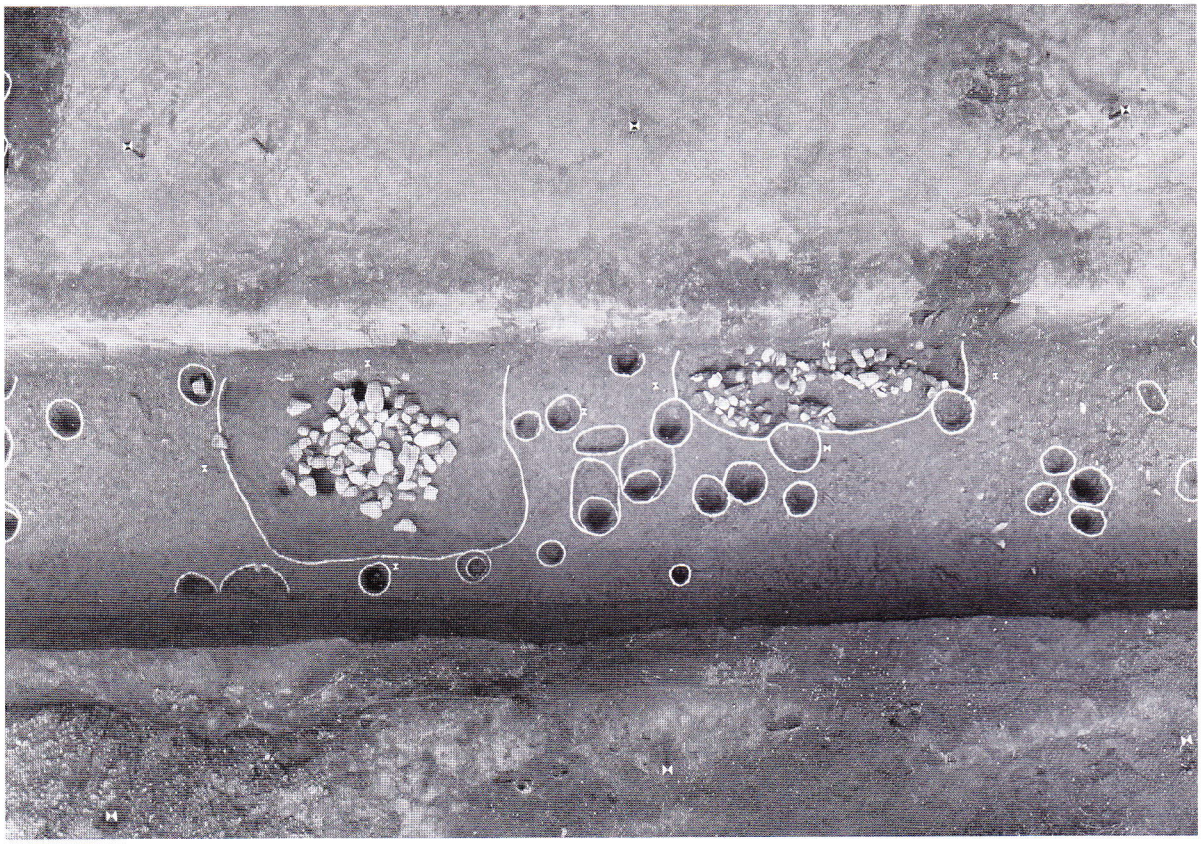
第3区　SH-5（西から）

第1区　P-53（西から）

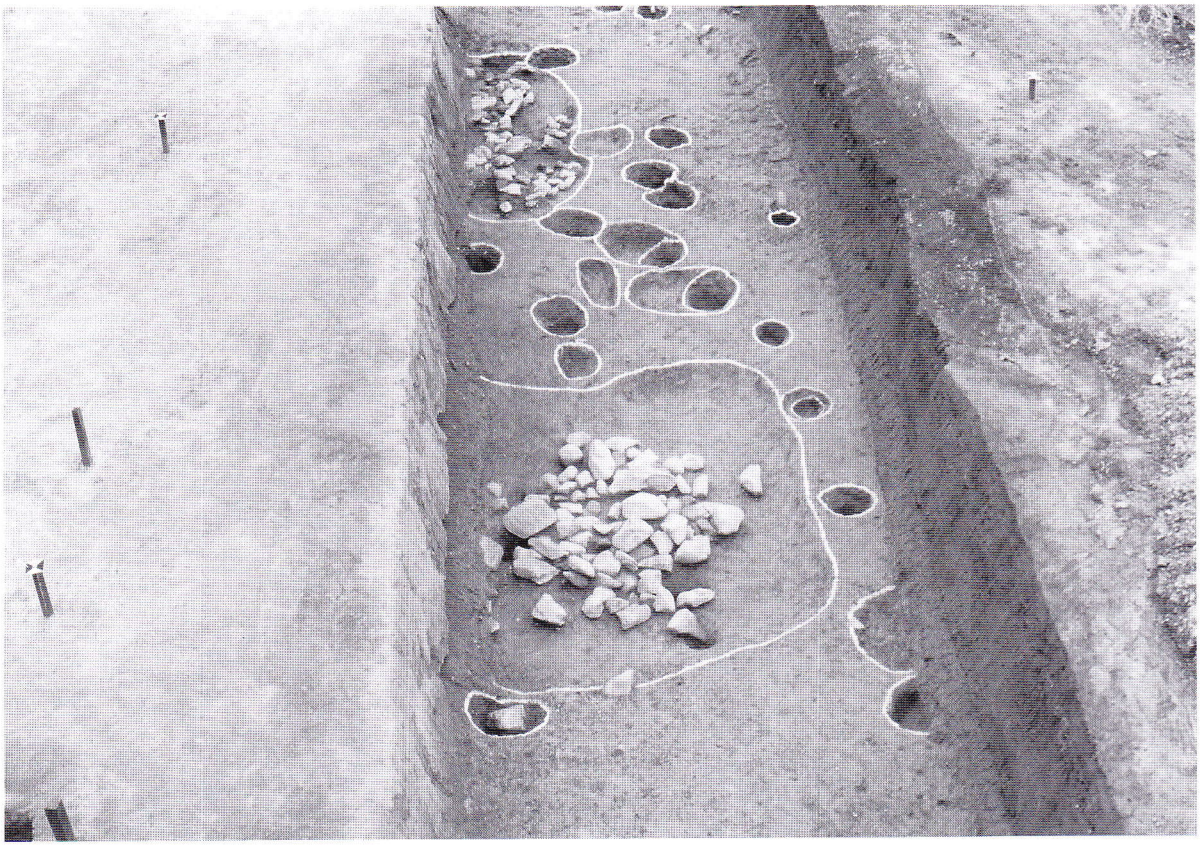
第4区　SK-10（東から）

第4区　SK-10（北から）

第4区　SK-10遺物出土状況（北から）

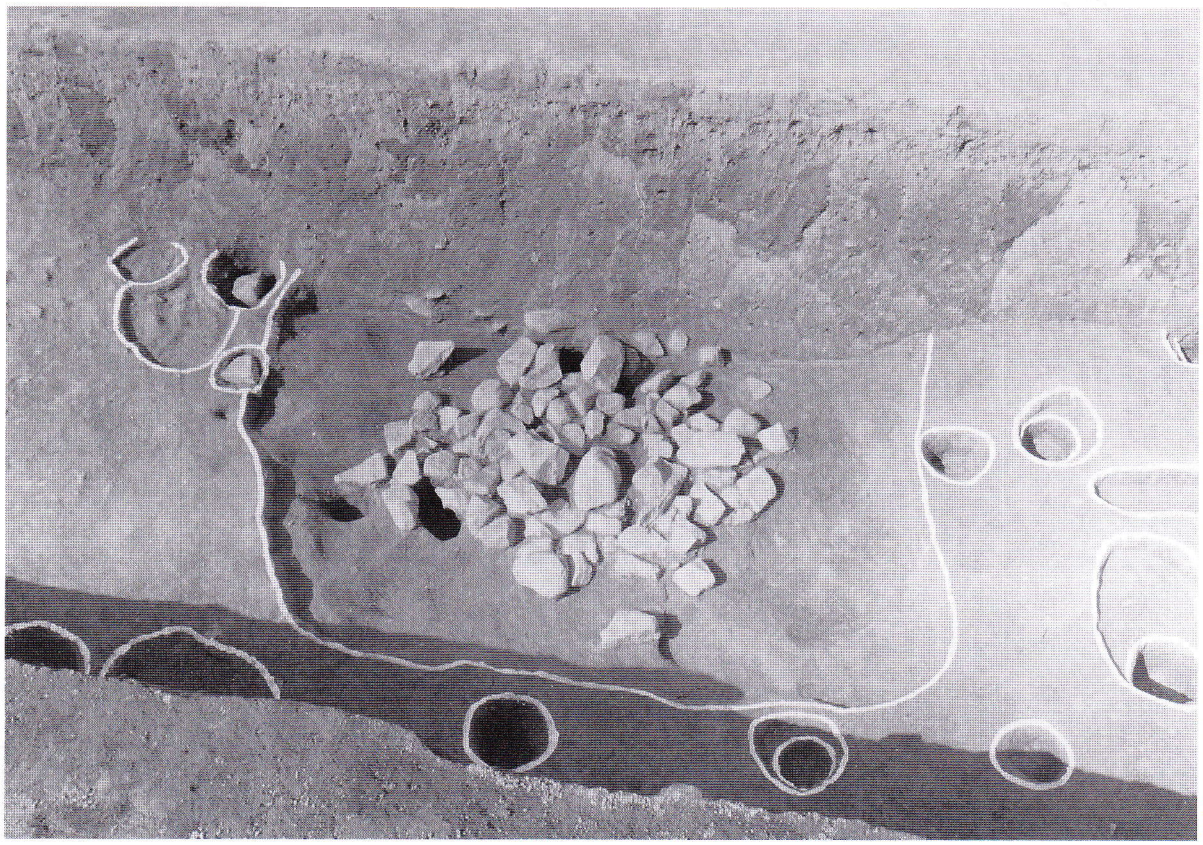


第5区　SX-1・SK-15（上が北）

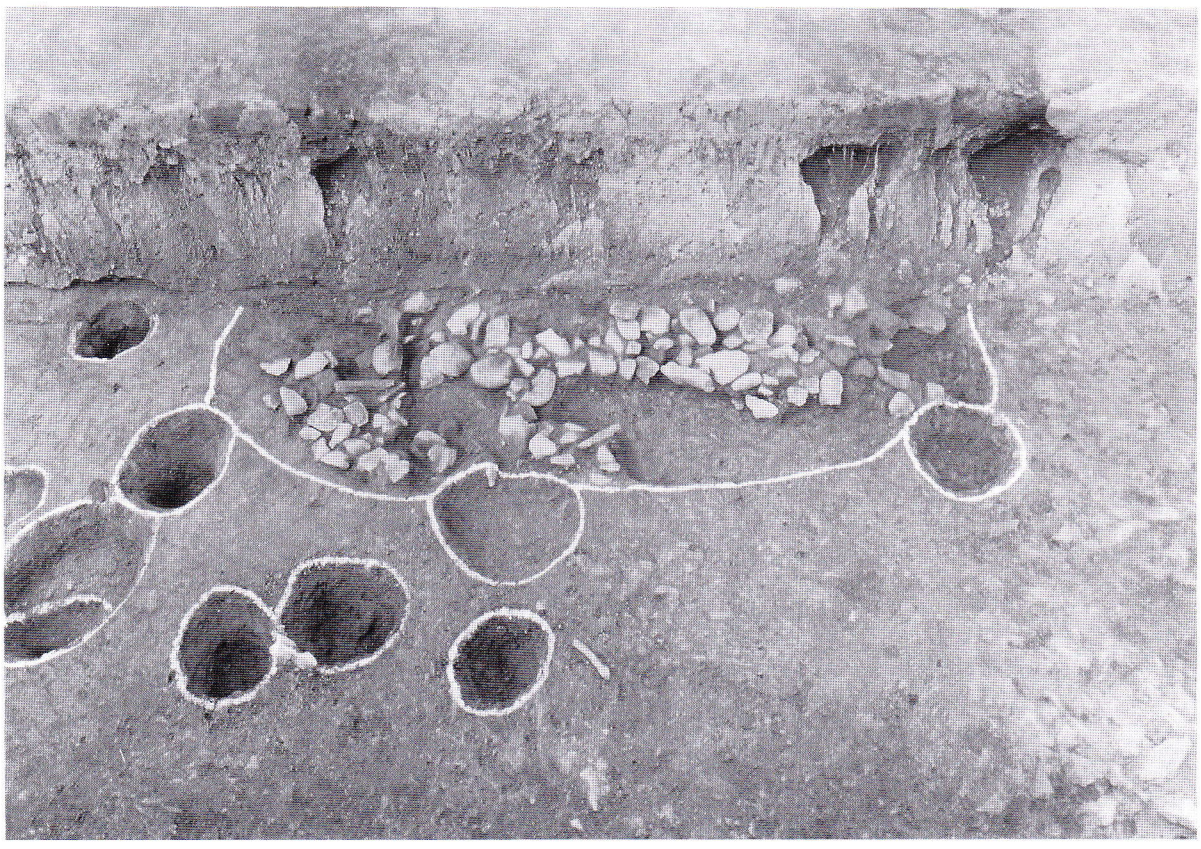


第5区　SX-1・SK-15（西から）

図版16



第5区　SX-1（南から）



第5区　SK-15（南から）

第１区　北壁土層堆積状況（南から）

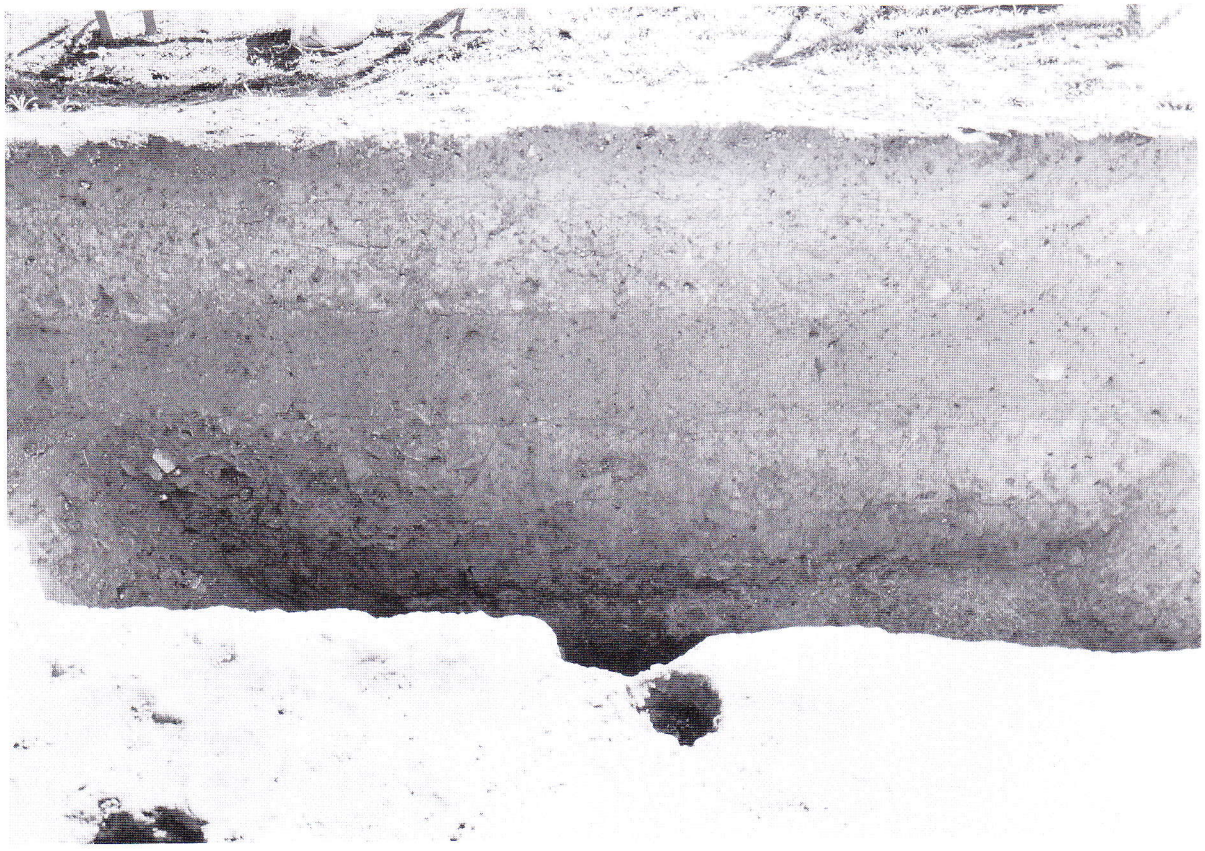
第２区　南壁土層堆積状況（北から）

図版18

第３区　東壁土層堆積状況（西から）

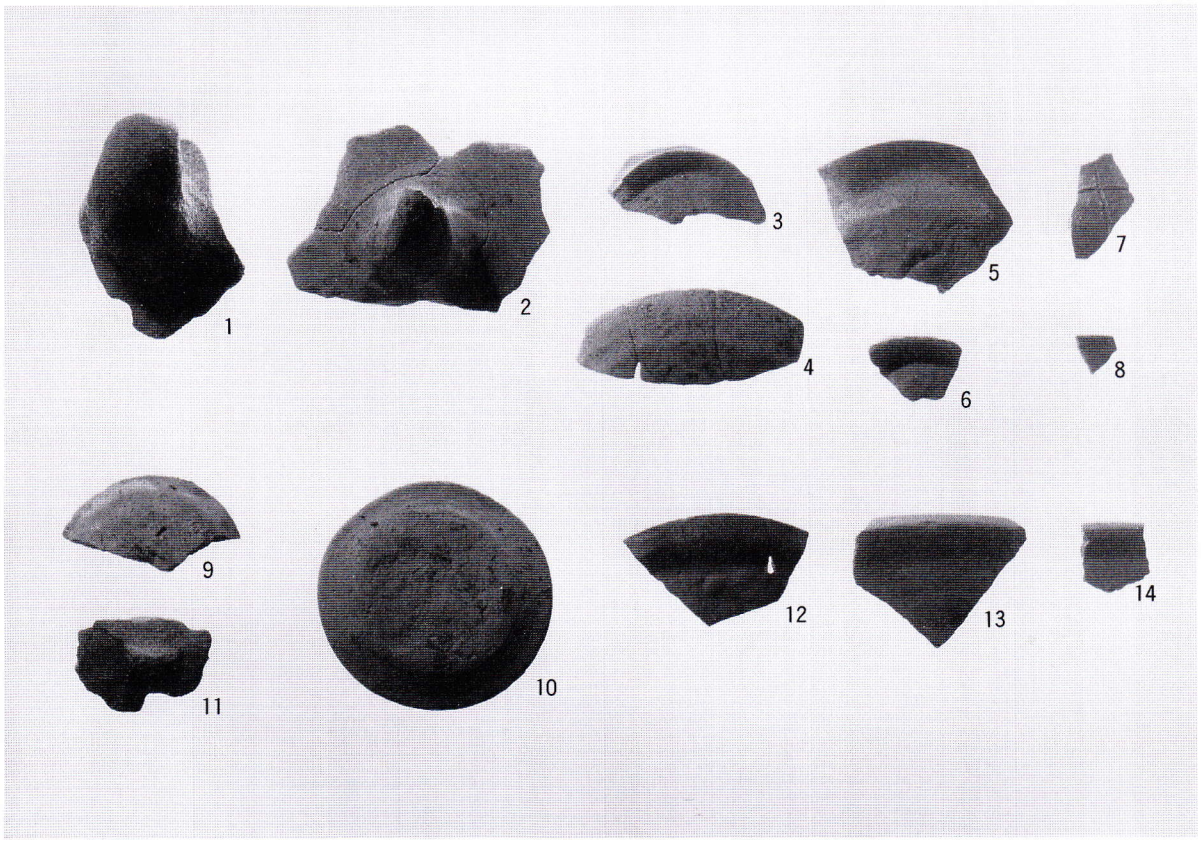
第３区　東壁土層堆積状況（西から）

第4区　西壁土層堆積状況（東から）

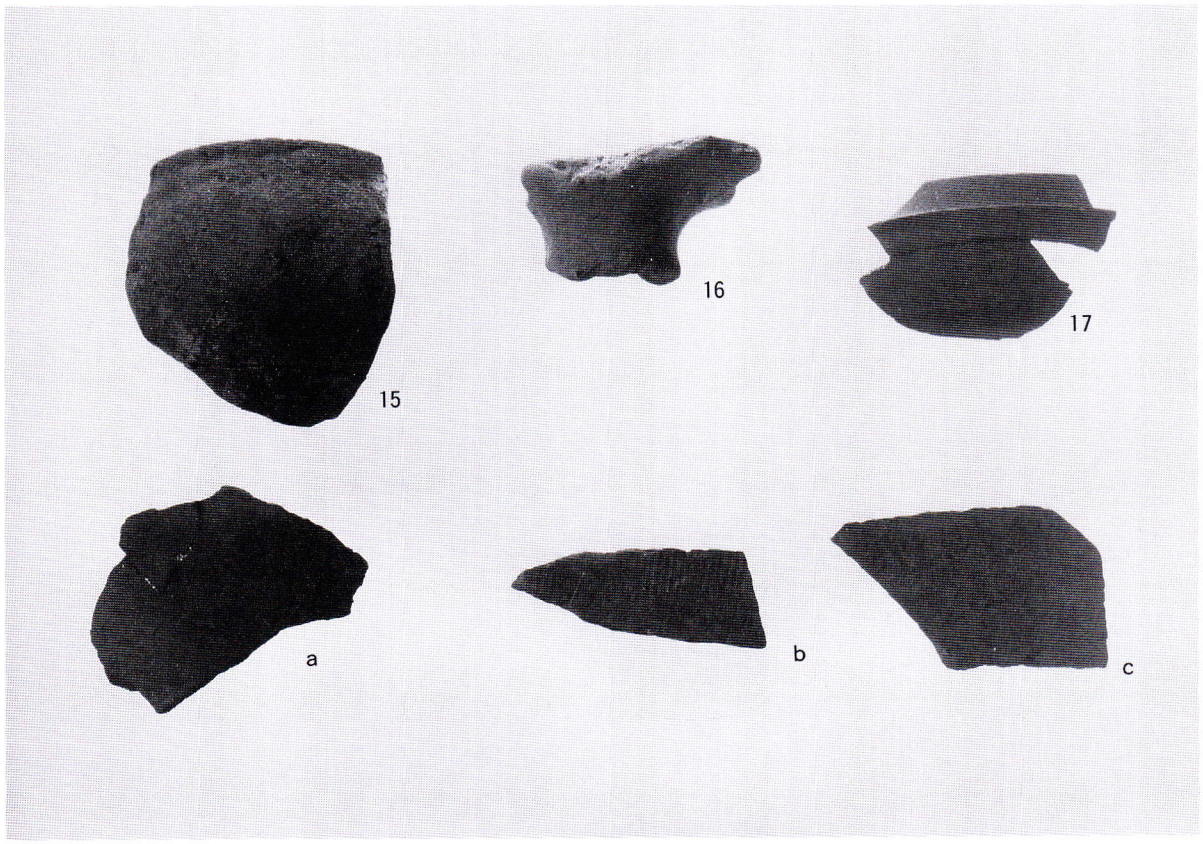


第5区　南壁土層堆積状況（北から）

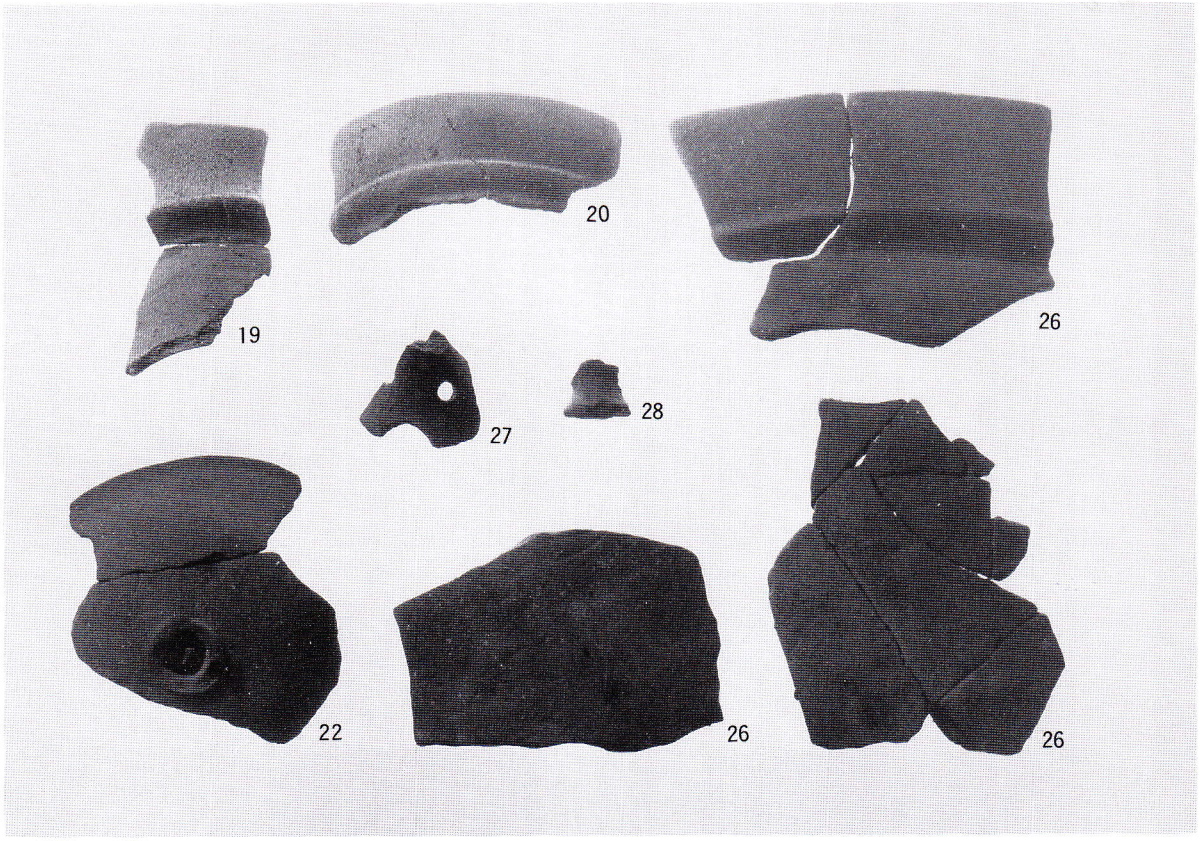
図版20



土師器 1堝、2甑、3椀、4高杯　黒色土器 5•6椀　須恵器 7壺　緑釉陶器 8椀
土師器 9•10皿、11釜　瓦器 12椀　須恵器 13•14こね鉢

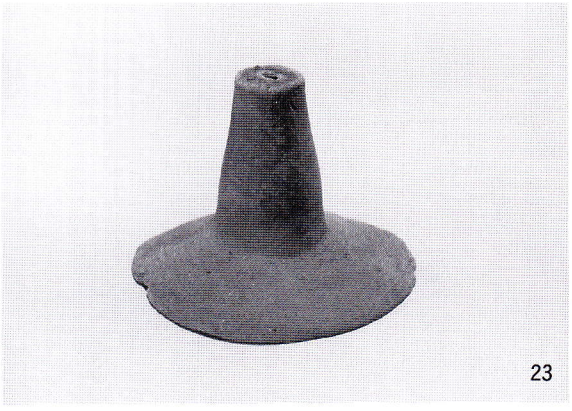


土師器 15鉢、16高杯　須恵器 17杯身、a～c甕



SB-1出土土器　土師器 19・20壺、22高杯、26鉢、27脚部　28製塩土器

SB-1出土土器　土師器 壺

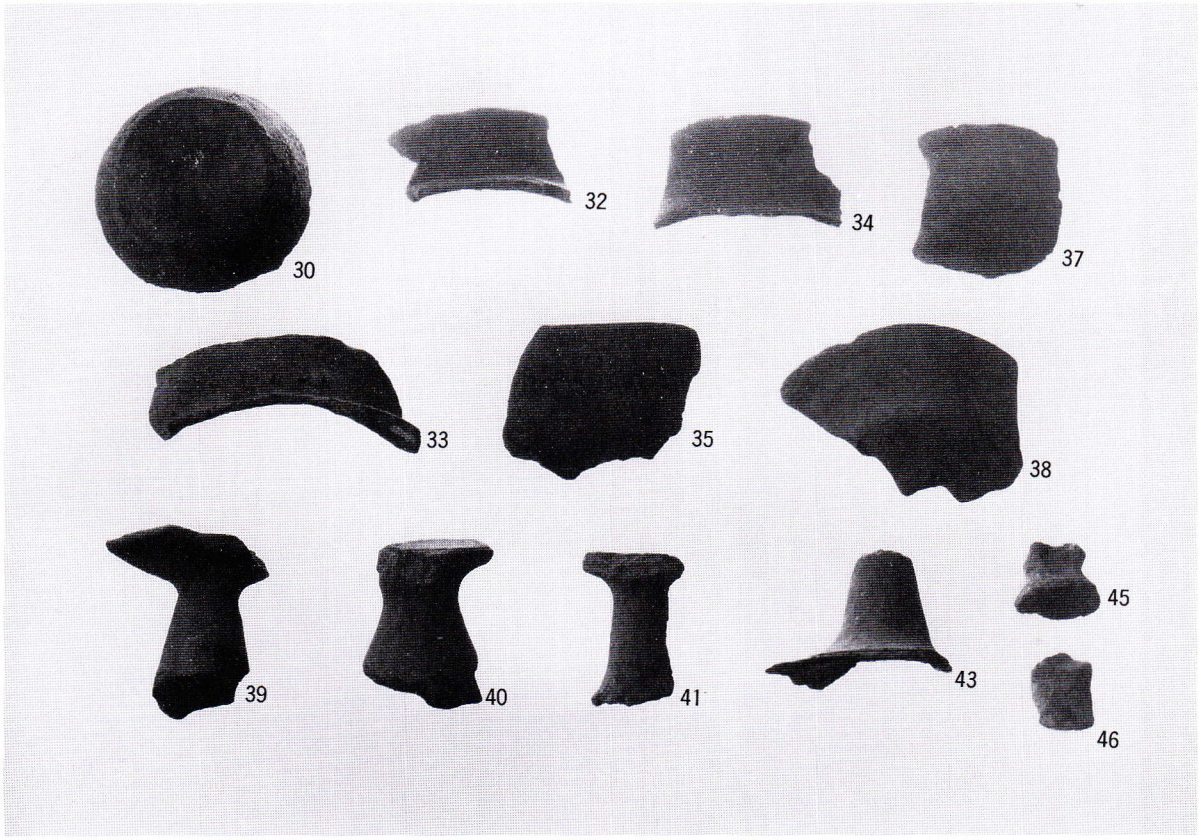


SB-1出土土器　土師器 高杯

SB-1出土土器　土師器 高杯

SB-1出土土器　土師器 鉢

図版22



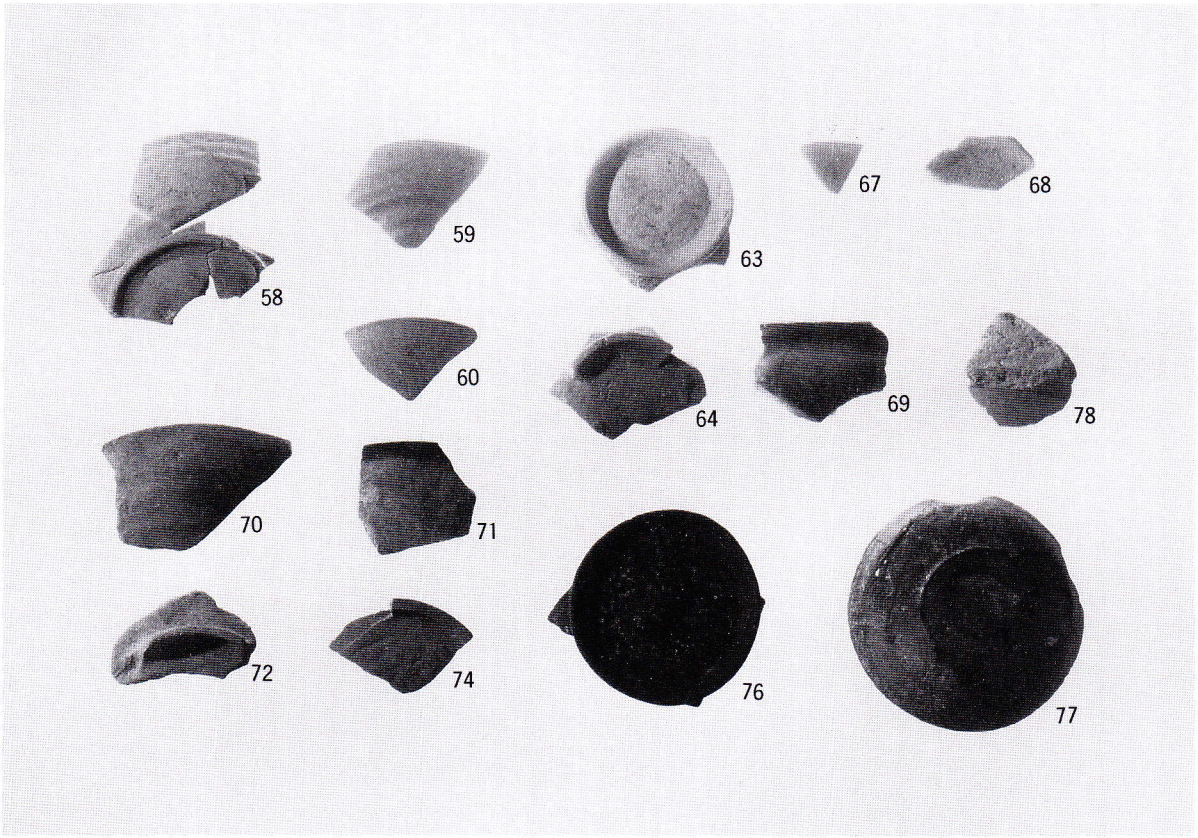
SB-2出土土器　土師器 30壺、32～35甕、37～41・43高杯　45・46製塩土器

SB-2出土土器　土師器 壺

SB-2出土土器　土師器 甕

SB-2出土土器　土師器 高杯

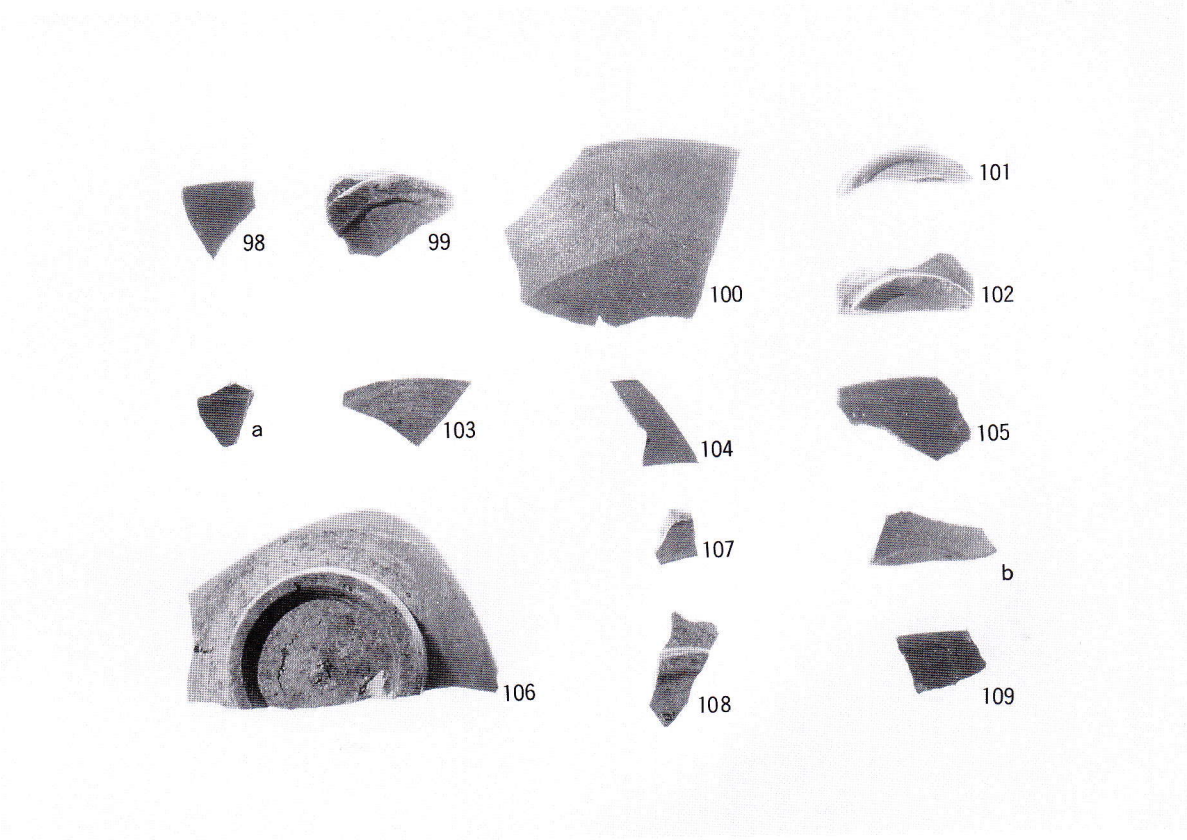
SB-2出土土器　土師器 鉢



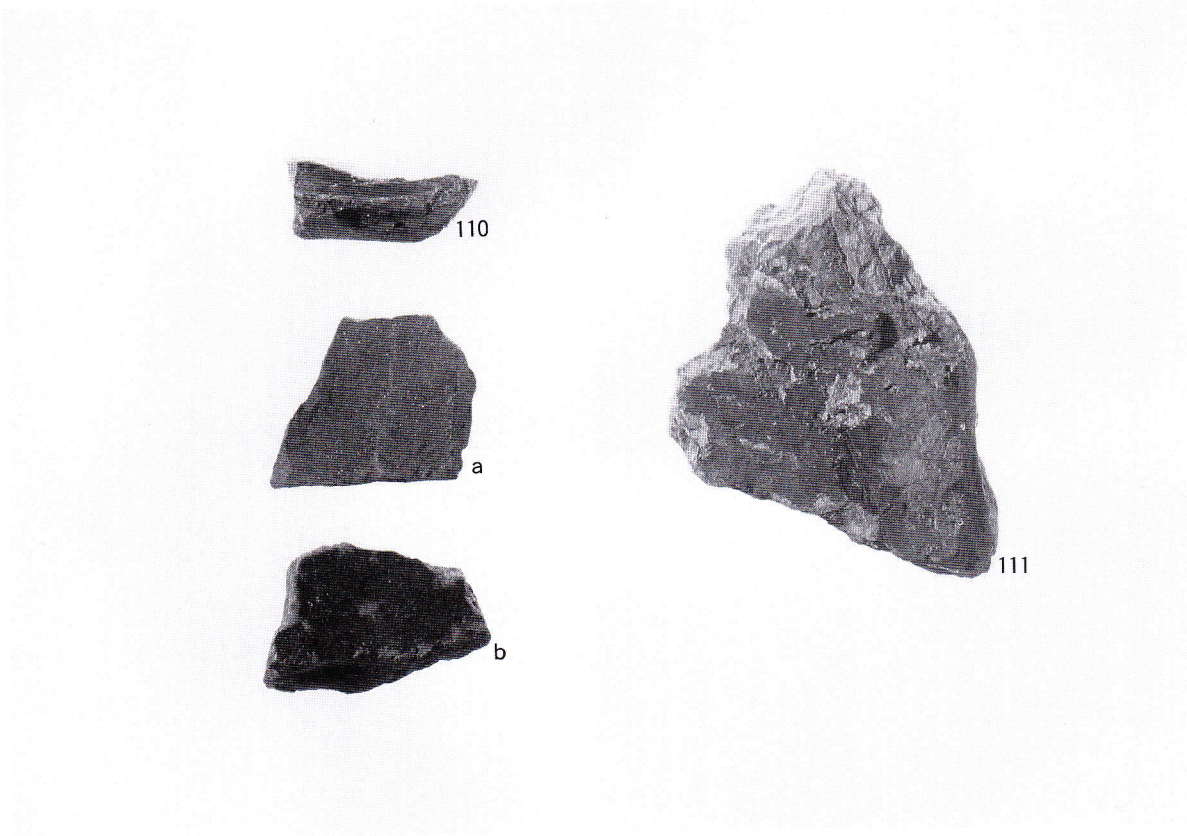
土師器　58～60・63・64椀、67・68皿、69甕　黒色土器　70～72・74・76・77椀　須恵器円面硯 78

土師器 79椀、81～83皿、84～86釜　瓦器 87～90椀
瓦質土器 94釜　須恵器 95甕、96・97こね鉢

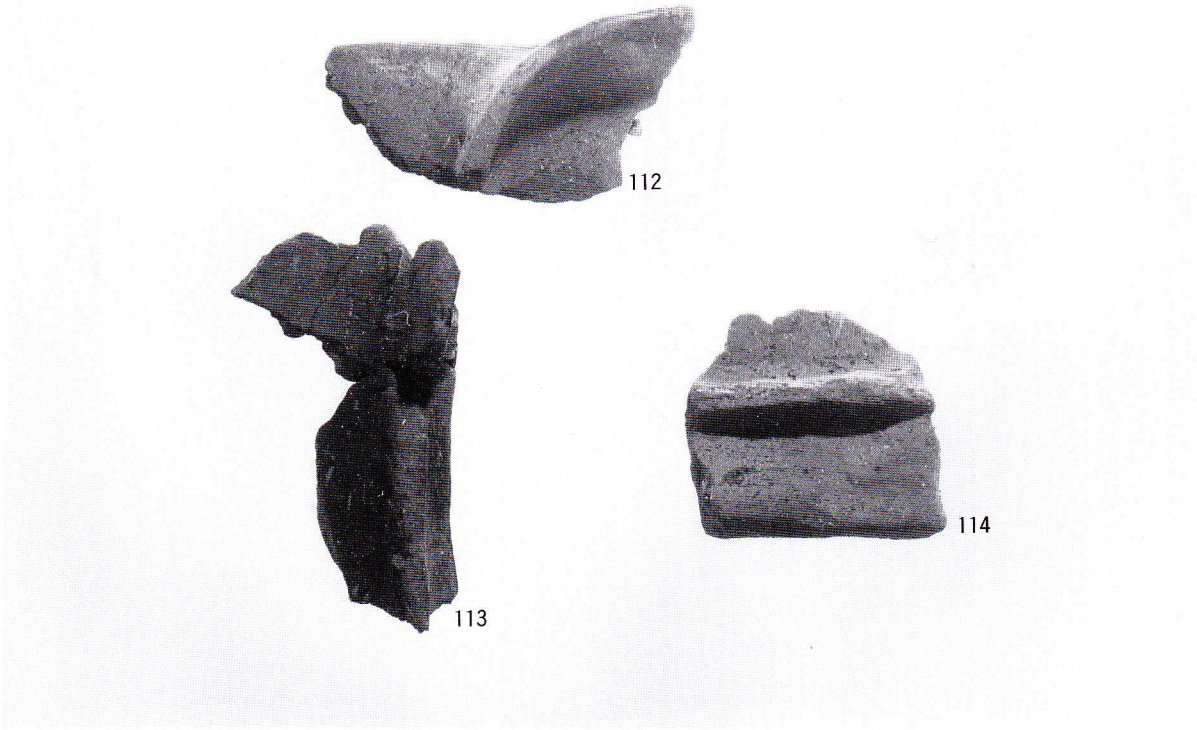
図版24



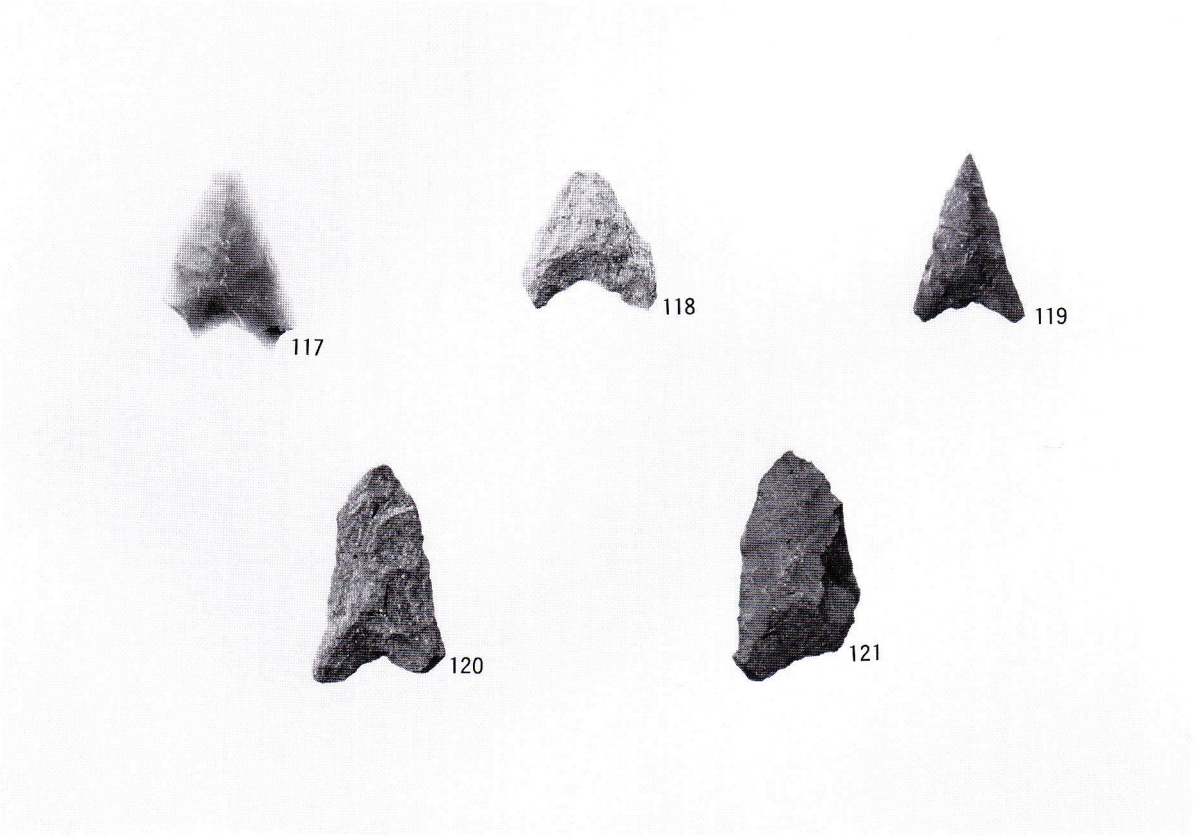
緑釉陶器 98・99・a椀　灰釉陶器 100～102椀、103皿、104蓋
白磁 105～108・b碗　青磁 109碗



瓦　110軒平瓦　111・a・b平瓦

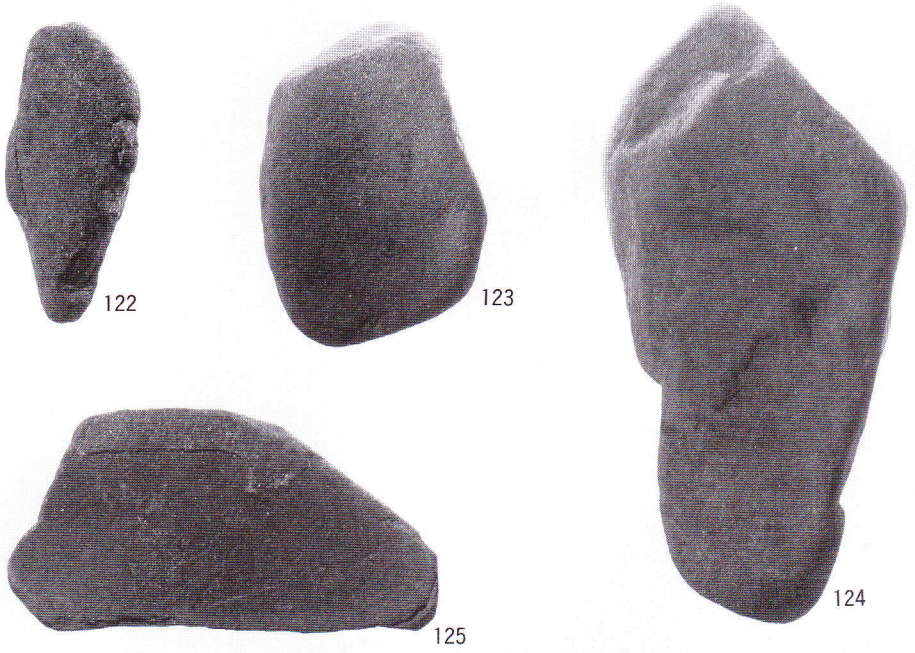


竈 112～114

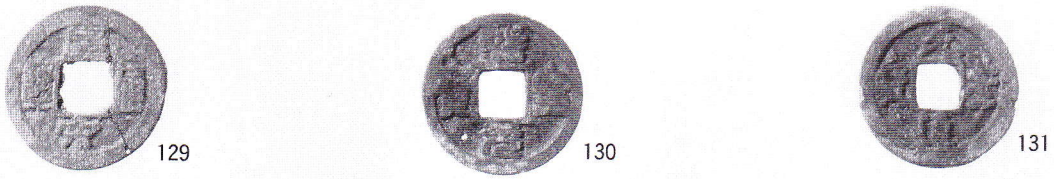


石器 117～121凹基式石鏃

図版26



石器 122叩石、123・124台石、125砥石



銭貨　127祥符元寶　128天聖元寶　129皇宋通寶
　　130熙寧通寶　131元豊通寶

平成12年３月31日発行

高井遺跡 第２次発掘調査概報

編集・発行　（財）和歌山市文化体育振興事業団

和歌山市西汀丁29番地

印　　刷　中央印刷株式会社

© （財）和歌山市文化体育振興事業団 2000